crave for future

チョモランマ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ｃｒａｖｅ　ｆｏｒ　ｆｕｔｕｒｅ

【Ｎコード】
Ｎ９４０４Ｃ

【作者名】
チョモランマ

【あらすじ】
ある宿命を背負った金髪黒目の少年聖が、精霊と人が共存している世界を舞台に、たくさんの人に囲まれながら、恋愛、バトルなどの様々な経験をして成長していくストーリー。

プロローグ

晴ればれとした空、まるで雲の存在が疑われるような天気の中。一人の少年が、ぼんやりと木の下で寝っ転がりながら空を見上げていた。けれど、まゆを眉間に寄せながら、目の焦点が定まっていなかった。その様子は、深く考え事をしている人にありがちな、自分の世界に入ってしまった状態である。

「とうとう明日なんだ…」

誰に言うというわけではなく、まるで自分に言い聞かせるかのように少年は呟いた。

「この馬鹿やっと見つけた！まったく、あんたって奴は…」

少年は、いきなり現れたうるさい存在、声の主である少女ターシャを横目に機嫌が悪そうだ。大抵の人は、自分の時間が人に邪魔されるのを嫌うものである。少年も例外ではなく、

「いや…別に何処にいようと自由っていうか今一人になりたいんだけど」

「あんた明日ギルドに申請しに行くって本当？やめときなさいって。絶対無理。

大体、最近じゃ申請の時に契約してもらう精霊クラスだとろくな仕事が出来ないわよ…」

ギルドというのは、簡単に言えば仕事を貰いにいくところである。ただ、ギルドにくる仕事のほとんどは命の危険が伴う。そこで、精

霊という存在が必要になってくるのだ。
精霊は世界中にいて、例えば木、石、水などの様々な物質に宿っている。最も高位の精霊ともなると、そうそう会えるものではない。だが、時に力を持った精霊は自分と相性のいい人物を探し始める。どうやって決めるのかは、精霊によって違うので定かではない。
ギルドでは、登録する際の条件として、精霊がパートナーにいることを義務づけている。しかし、精霊に選ばれる人物はそう多くないので、申請の時に儀式をおこなって精霊と契約しなくてはいけないのだが、大抵は低いクラスの精霊が応じればいい方なのである。

「いや、僕は大丈夫だと思うよ。そんなに危険なのやらないし…っていうかできないしさ。
ただやってみたいんだ。熟練になれば一生食べていけるみたいだしね。」

「全く…ギルドの新人がどれだけ苦労してるのか分かってるの？
まぁ私はそれほどでもなかったけどね。」

この少女、ターシャは今Bクラスであり、13という年齢を考えればかなりの高ランクである。
少年とは幼馴染もしくは腐れ縁だが、恐らく後者だろう。背はそんなに高くはなく、ターシャは美人といえる部類にはいっており、少年を持ち前の勝気な性格と抜群の行動力でよく振り回している。その容姿、性格、実力は、多くの人を魅了させ、少年の町のギルドでも将来を期待されている。

「じゃあ～大丈夫かな。ところで何か用？」

少年は特に気にする様子もなく、平然と微笑んでいる。その顔を見たとき、ターシャは胸の動揺を悟られないようにしながら、説得

は不可能だということを理解した。少年の、まっすぐな目とその表情が、深い決意を表していたのである。

「はぁ、聖(ひじり)みたいな馬鹿には何言っても無理か。
あんたの母さんが呼んでたわよ。さっさと行きなさいよね。」

「分かった。それじゃ、また明日な！」

そう言って聖は駆け出した。ここからある宿命を背負った少年、金髪黒目である聖の物語が始まるのである。

第一話：自分の道を

聖はターシャと別れた後、すぐに家に向かって走り出した。彼は内心焦り、不安を感じていた。聖の母親は、明るく、些細なことは気にしない…いや時にはかなり大事なことも気にしないタイプの人で、わざわざターシャに頼んで探してもらうなんて、そうそうないのである。

これはヤバいかな。と聖に思わせるには十分、いや十分すぎた。元ギルド員の怒った時の母親は、記憶に残る限りたった二回しかなかったが、絶対的な恐怖を聖に与えたものだった。

何でも聖の母、アミリヤと喧嘩した父は決まって死にかけたらしい。最も、喧嘩の後は必ずそれまで以上に親密になったらしいのだが…ちなみに聖の父親は精霊の研究家で、多忙な生活を送っており三年前に家を出たきり戻っていない。

「…ただいま。」

まるで、この声が聞こえないことを祈るかのように、そっと家に入っていく。

しかし、聖の母は待ち構えていたように、

「おかえり。また森の方行ってたの？見つからないからターシャちゃんに探しに行ってもらったわよ。ターシャちゃんには会えた？」

あのターシャを使いに行かせられるのは、この母を含め町で数人しかいないだろう。

「会ったよ。わざわざターシャに頼むこともないのに。会ってすぐ文句言われたよ…」

「お礼後でちゃんと言っとくのよ。あんなかわいい子に探してもらうなんて幸せじゃない。」

「……。」

聖がそう思うことは、恐らく一生ないだろう。だが、ターシャは町では評判が高いらしく、ファンクラブというものまであり、一種のアイドルらしいのだが、幼いころから腐れ縁であった聖には、全く実感が湧かなかった。

「それはともかく、ターシャに頼んでまでどうかしたの？」

「照れちゃって。ぐずぐずしてるとターシャちゃん誰かに取られちゃうわよ？」

こういう時、なぜ母親というのはそっちの方向に話を持っていきたがるのだろうか。

聖は少し不満気な表情である。最も、せっかく自分から話を核心に持っていこうとしたのに、こんな返答が返ってきては、当然のことなのだが。

「分かってるわよ。なぜ呼んだかでしょ。それはあんたが一番よく分かってると思うけど？」

とたんに場の空気が変わった。母が真剣になる。たったそれだけのことでさっきまでの和やかな場が嘘のようになった。

聖は、真っすぐに母の目を見た。母の発する気にのみこまれないように、負けないよう、自分の意思を通すために。

極度の緊張感の中、ふと母が笑った。その表情には満足感が表れていたが、少し寂しさが混じっているようでもあった。

「別に反対じゃないのよ？ただどうしても、聖の覚悟を確認してみたかっただけ。

何の相談もしてくれなっかった仕返しもあったけどね。」

ようやく極度の緊張感が解けた。しかし、聖は神経をすり減らし、立っているのがやっとの状態であった。

「やっぱり遺伝っていうのは、怖いわね。まぁいいわ。聖がせっかく決心したんだものね。　あ、ちょっと待ってなさい。」

待つもなにも動けないのだから、休ませた方がよさそうだったが、そんな聖の状態など関係なしに倉庫のほうに走って行った。

「あの沈黙は辛かったな…けど許してくれたのかな。」

未だに自分の母が、ギルドに入るのを許してくれたらしいのを怪しく思っていたが、

数分後、どこから持ってきたのか黒いさやにはいった細長い刀を取り出したきた。

「なに？これ？見たことない形だけど。」

「昔、私の父さんが使ってたらしいんだけど、よく分からないわ。

ただ父さん以外抜けないのよ。だから倉庫に放りこんでおいたんだけど、せっかくだからこれ使いなさい。」

この時の聖の表情は、何とも言い難い。母がふざけているのか、まじめに言ってるのか判断しかねているようだった。実は許してないんじゃないかと疑いつつ、その刀を手に持ってみた。

「ちょっと試しに刀を抜いてみなさいよ？」

聖は、決しかねるように、それでも力をこめて刀を抜こうと試みたが、無理だった。

「あれ？…まぁそのうち使えるようになるわよ。
それはそうと、ご飯にしましょ。お腹すいたでしょ？」

と言って、キッチンに行ってしまった。聖は呆然としながら、

「これを使うのは決定事項なんだ。」

と一人ぼやきつつ、母が自分の意思を認めてくれたのを嬉しく思いながら、明日に備えて準備するのだった。

第一話：自分の道を（後書き）

小説って書くの難しいですね。全然下手なので、もっとうまく書けるようになりたいです

第二話：いざ、ギルドにむけて（前編）

「本当に助かったな～あの感じは、ぜったい駄目って言われると思ったけどな。」

聖は母の威圧感、迫力を思い出すたびに震えが止まらないようだ。普段はいい加減で、何を考えているかよく分からないような気楽な性格だが、あるスイッチが入れると、まるで別人である。ギルドにいた頃はどのくらいの強さだったのだろう。

その性格、母の遺伝子を聖は受け継いでいるはずなのだが、そんな様子は全くない。幸か不幸か父親に似たのだろう。

聖は、母アミリヤにギルドへの許可を貰い、昼ごはんを食べた後、軽く運動しようと町へと散歩にでかけていた。これは少年の数少ない趣味の一つである。気晴らしや考え事をしたい時に、よく近くを散歩するのだった。

ここで、いい加減少年自身について触れておきたいと思う。聖の、世間の評価は「少し変わってるけど憎めないやつ」といったところだろう。そんなに目立つわけでもなく、ターシャとは比較にならない、いわゆる凡人と言ったところなのだが、彼には何か人を引き付ける天性のものがあった。少年とは思えない一種の独特な空気を纏っているのである。

背はあまり高くなく、小柄だが、整った顔立ちで美形と言える。容姿について、一言でまとめるなら、優男というのが当てはまっているだろう。

聖については、また別の機会で触れることにして、話を進めよう。

聖の町は、首都ギルバートから近く活気があふれるところだ。その分犯罪や他の問題も多いのだが…聖は町の、噴水が中央にあり、自然があふれる公園にたどり着いた。ここは地元でも人気の場所で、よくデートを楽しむカップルが歩いている。

（うーん…これからどうしようかな。申請は明日だし…一応武器屋でも見に行っとこうかな。あの変な刀だけじゃ不安だし。っていうかあんなの使えって意味が分からない…）と一人黙々と考えていると、

「！！聖？何やってるの？こんなところで。っていうか無事だったんだ。」

そこには偶然、先ほどあったターシャが、見るからに裕福そうな格好の青年と一緒にベンチに座っていた。最も、聖を見た反応はターシャと正反対だったのだが。

「あぁターシャ。母さん別に反対じゃないんだってさ。
八つ当たりは辛かったけど…そっちは？」

「一応ギルドの仕事仲間よ。名前は……」「ロム・グルポフだ。君は？」

見るからにこの青年、ロムは機嫌が悪そうだ。聖に対し明らかに鋭い眼光、口調で敵意を表している。

「聖です。どうぞよろしく。」

だが聖は、ロムの態度に少し違和感を覚えただけで、平然とロムに目を向けていた。普通の人なら、すぐに関わるのはごめんとばかりに公園出て行くぐらいの迫力なのだが。

「君もギルドの人間かい？あまり強そうには見えないけどね。ランクは？」

「まだ入ってないです。明日申請しにいくつもりですけど。」

聖が答えた後、ロムは、見るからに高慢な、自分のほうが優れていると確信をもった人によくある、嘲るような笑みを浮かべた。

「じゃあ君、精霊は？ギルド入りたいっていうなら当然持ってるだろう？」

「聖にはいないわよ。」

聖に対するロムの態度に不快感を覚えたのだろう。ターシャが強引に口をはさんだ。

しかし、優越感に浸ったロムには、そんなターシャの気持ちになどは全く気付く様子もなかった。

「あはは。君それは可哀想だな。僕はBランク。精霊も持っている。まぁ貴族だから当たり前だけどね。僕はギルドでも将来を期待されてるんだ。それに……」

どこにでも、貧富の差が生じてしまうように、当然のように貴族と平民、一部の地域には、奴隷として一生労働を命じられる人々がいる。だが少し違うのは、貧富の差だけでなく精霊のランクによっても、身分の差が生まれてしまったことだろう。

昔から、ランクの高い精霊を持つ人物は、尊敬の念を集めていた。それが時代を経た結果、こういう結果に繋がってしまったのだ。基本的に、貴族は高いランクの精霊を持つことが多い。その理由は不明だが、体質か遺伝によるものが多いのではないかというのが世間一般では有力説だ。

「そうなんですか。すごいですね。」

一応年上のロムに敬語を使い、笑みを浮かべつつも、一人延々と話続けるロムに対し、これ以上は時間の無駄だと思ったのだろう。だんだん投げやりな口調になっていた。最も他人の自慢話ほどつまらないものはないのだが。

だがロムがあまりに得意そうに話すので、ぬけるタイミングを逃してしまったようだ。本人としては、ターシャに聞かせるつもりで話ているのだろう。

「君がもしギルドに入れたら、僕のチームにいれてあげようか？これは光栄なことなんだぜ。」

「いや、僕は一人のほうが気楽でいいですから。えっと、それじゃあ僕は用事があるので失礼します。」

ようやく抜け出せた。と思ったのも束の間、ターシャが、

「用事って？何かあるの？」

と聖に話しかけてきた。思いもかけないターシャの質問だが、冷静に、少し考えた後、

「明日に備えて色々することがあるんだ。」

「ふーん。そう…じゃあ私も行くわ。」

ロムは、この言葉を聞いた瞬間、まるで時が止まってしまったかのように、呆然としていた。今まで得意そうに話していたのが嘘のようである。おそらく信じられないのだろう。風が後ろで木の葉を揺らしていた。

「いや…大した用じゃないから。」

「早く行くわよ。さよなら、ロム。」

聖の返事も無視し、追い打ちをかけるターシャ。少しいらだっているようだ。ベンチから腰をあげ、公園の出口の方へいつのまにか向かっている。

そこでやっと元に戻ったロムが、必死にターシャを食い止めようと、声を張り上げた。

「ちょっ…待ってくれ。君に話たいことが。大事で重要な。」

まだショックから、完全には戻ってないのだろう。言葉がめちゃくちゃである。

だがターシャは、それを冷めた目で眺めながら、何も答えない。完全な拒絶のサインだろう。数秒眺めた後、聖の方に目を向け、早くするよう呼びかけた。

聖としては、抜け出せればそれでよかったのだが、これでは結果的に聖がターシャをさらったようなものである。戸惑いつつ、ター

シャを待たせないように、駈け出した。後ろで一人。聖をにらむ青年の視線を感じながら。

第二話：いざ、ギルドにむけて（前編）（後書き）

もしよかったら評価と感想お願いします。すっごい励みになります

第三話：いざ、ギルドにむけて（後編）

（なんでこうなったんだろう？）

今聖は、公園を出て、ギルドの支部がある建物の方に向ってターシャと二人で一緒に並んで歩いている。あの場面から抜け出すために、用事があるなどといったが、実際は何もなかったのである。しかし、ターシャには、聖の嘘などすぐ見破っていたらしく、わざわざギルドのある場所の近くにある、馴染みの店を紹介してくれることになった。

聖本人としてはありがたいことなのだが、ここまでなぜターシャがしてくれるのかが分からないようで、絶えず首をかしげ、ターシャの様子に注意を払っている。身近な人に突然親切にされると、どうしても何かあるのではないかと疑ってしまうのは、避けられないことだろう。

さらに、ターシャは先ほどから機嫌が悪い。おかげで話かけることもままならず、二人の周りには、沈黙と冷たい風が流れるだけであった。

気まずい空気の中、そのまま15分ほど進んでいくと、ギルドの支部が見えてきた。見た瞬間、聖に表現できないような感覚が襲ってきた。そこで明日、自分の運命が分かれるのだ。期待や緊張、不安などの感情が、一気に聖を包んでも仕方ない。鼓動が嫌でも高まっているようだ。少し顔色が紅潮している。

「馴染みの店はあっちよ。何？今更びびってるの？」

ターシャが聖の顔色に敏感に反応して、話かけた。聖の様子に少し楽しそうなのは気のせいではないだろう…

「そうだね。実際自分がどこまでやれるかたかが知れてるけど…やっぱり楽しみだ。僕もやっとギルドに…。」

（なれないことは考えてないのね。この聖（バカ）は…）

どこか聖の反応にうれしそうなターシャであった。依然として憮然とした様子で、一人先に歩きだしてしまったが、抑えきれず、思わず漏れてしまったような微笑を浮かべてる。

「まったく、せっかちなのは相変わらずだ…」

そんなターシャの様子には気付かず、ターシャの後ろを、聖はおとなしくついていくのであった。

「ここよ。通称トロイカ。まぁ、ギルド専門店ってところかしら。ギルドに必要なものなら大抵そろってるわ。」

ギルドの向かい側、少し離れた場所にある、古い感じのする店である。建物自体は決して小さい…とは言えないが、大きいとも言えない。いわゆる個人店のようで、そんなに頼りになるような印象を聖は受けなかった。しかし、ターシャが勧めるのだから、そんなハズはないという気持ちも強く、一体どんなものなのか判断がつかなかった。

聖が呆然としていると、店の中から、

「いらっしゃい！！お！ターシャちゃんか。久しぶりだね。」

と周りに活気を与えるような、快活な大きな声が響いてきた。

「こんにちは。カミンさん。お久しぶりです。」

「最近どう？ハハハ、最もターシャちゃんに聞くまでもないか。活躍は色々聞いてるよ。ギルドのアイドルだもんね。」

「いえ、そんなことないですよ。ところで今日は……」

と、ターシャは聖を紹介しようと、目を向けた。カミンはそこで初めて気づいたらしく、

「君は？見たことないけど…ギルドの新人？」

「いえ、まだギルドには入ってないです。名前は聖。明日ギルドに申請に行きます。」

カミンは、見た目すごい筋肉質で、身長も高く、迫力があり少し怖い印象を相手に与えてしまうだろうが、その性格は、気さくで面倒見がよく、その人柄は周りに好かれ、年上のお兄さんとして慕われていた。

「お、それはめでたいね！精霊は？」

「いないです。」

「そうか…それだとこれから厳しいぞ。頑張れよ！俺も元ギルドに所属してたから、何かあったらいいな。力になってやるから！」

「ありがとうございます。」

聖は笑顔で返事をした。こんな力強い言葉をもらったのは、ギルドに入ると決めた時以来初めてであった。

「うん、いい返事だ。気に入った。よし、明日も来いよ。サービスしてやる。ところで、ターシャちゃんが男を連れてくるなんて珍しいな…もしかして付き合ってるのか？」

「まさか。ただの幼馴染で、さっき偶然会っただけですよ。」

今までの和やかなムードが、一瞬のうちに消え去った。さすがのカミンも、自分が決して踏んではいけない地雷を、愚かにも思いっきり踏んでしまったことに気づいたのだろう。聖はもう慣れたのか、平然としていたが、カミンは顔が少し青ざめ、なんとか言葉をしぼりだそうとしている。

「それじゃあ、私はこれで。たまたま会った馬鹿な幼馴染を紹介しに来ただけですから。」

と、ほほ笑みながら淡々と述べたが、目が全く笑っていなかった。

ターシャが帰っていくのを横目に、平常心を取り戻したカミンは、（ターシャちゃんが怒るなんてあまりないよな？それに、今のは本当に俺が怒らせたのか？）と考え込んでしまった。

「僕もそろそろ失礼します。そろそろ家に帰らないと…きっと明日来ます。」

そう言って聖は、頭を下げ、足早に帰って行った。

（まぁなんにせよ、どっちでもいいか。それより聖か…あいつは……これから面白くなりそうだな。）と、これからのことを思い、一人心を踊らせるのであった。

同時刻、あの公園では、まだロムが一人ベンチに座ったままであった。

「あのくそガキ……庶民の分際で……よくもこの僕に屈辱を…」

と、同じように一人、心に暗い闇、恨み（逆恨みだが）を積らせているのだった。

第三話：いざ、ギルドにむけて（後編）（後書き）

最近小説書くのがどんどん楽しくなってきました。
もっとうまく書いてみたい。
まだこれから、大学のテスト習慣まで書き続けてみます。
あと、もっと早く書けるよう頑張ります。

第四話：運命の朝

いよいよ、聖にとっては運命といっても過言ではない日、ギルドの申請日がやってきた。これは間違いなく、聖にとっては、ギルドの一つの試練と言えるだろう。

聖は、町から少し離れた森の近くにある、二階建ての家に、現在母と二人で暮らしている。部屋は二階にあり、木製の丸い机、椅子、ベッド、それと書物が散乱していて、男性らしいといえば聞こえはいいが、味気のない部屋である。

今、聖はベッドに横になりながら、目を瞑り、真っすぐ天井を見上げている。しかし、その表情からは、緊張感が嫌でも伝わってくるようだ。

「眠い……」

この独り言は、自然と呟いた言葉ではなく、意識して自分に呼びかけるように出しているようだ。恐らく全く逆の状態、眠れないのだろう。最も今日起こることを考えたら当然だが。しばらくそのままでいると、

「聖〜朝よー！起きなくていいの〜？」

朝から母の大きな声が襲ってくる。（なぜ疑問形なんだろう）聖は少し考えてしまう。しかし、朝早くそんなことを質問するのも煩わしく、毎回聞き流している。布団を嫌々放り、足早に階段を降り

ていく。

「おはよう。母さん。」

「おはよう聖。さっさと顔洗いなさい。もう朝ごはんできてるわよ。」

キッチンにある、食卓用の大きなテーブルには、もう聖の分が並んでいた。アミリヤは、その性格を表現しているかのように、料理を作るのが早かった。実際は野宿などギルドで活躍してた頃のなごりなのだろう。

聖は何も言わず、顔を洗い、椅子に座った。だが、その一つ一つの動作には、心あらずといった様子で、淡々と遂行することが義務づけられているかのようであった。

「いよいよ今日なんでしょ？無理なんじゃないの～？精霊はいないし、未だに組み手とか私の足元にも及ばないじゃない。」

だが聖は返事をせず、ただ下を向いて、黙々と箸を進めている。（まったく…母さんに勝てる人間って本当にいるの？）無論口には出していないが、心の底からそう思っているようだ。

「私の父さんなんて、私の倍くらい強かったんだからね。あんたもそうなれるよう死ぬ気で頑張りなさい。」

「そ…そこまではちょっと…」

（それは人間じゃないだろう。）心の中で呟きつつ、食事を終え、椅子から立ち上がった。

そして、食器を片づけながら、

「ギルドはただやってみたいからだけだから。そんなに強くなる必要はないよ。」

と聖は言ったが、アミリヤは含み笑いをしつつ、まるで全てを見通しているかのよう静かに、

「それだけ？」

一言呟いた。その声が届いたかどうかは定かではないが、聖は黙って二階に上がっていった。だが、その時の紅潮した顔を見れば、どちらかは一目瞭然だろう。

そのまま部屋に入り、ベッドに飛び込んだ。しかし、すぐに起き上がり、母から貰った頼りになる武器、とは言えない黒い鞘に収まった刀を背中に背負った。あれから何度も抜こうと試みたが、まるで拒絶されているかのように、その刀は全く動かなかった。

「こんなので大丈夫かな…まぁ最初はこれでいいか。」

ドコッ…突然聖は両ひざを、床についてしまった。痛みが足を駆け巡る。聖は突然のことに理解ができなかった。まるで何かに後ろから押されたように感じたのだ。

「聖ーターシャちゃんが来てくれたわよ～」

何が起こったのか分からず、あまりのことに呆然としていたが、アミリヤの呼び声ですぐに正気を取り戻した。ターシャが来るというのも一つの衝撃だったからだろう。急いで下に向かった。釈然とし

ない、もやもやした気持ちを抱えながら。

「ごめんね。ターシャちゃん。わざわざ来てもらって。」

「いえ、今日はギルドに用事がありますし。そのついでですから。」

「ギルドの方はどう？ターシャちゃん本当立派になったもんね。聖も見習ってほしいわ。」

聖が下に行き、玄関に着いた頃、アミリヤとターシャが会話をしていた。この二人の付き合いは、ターシャと聖の関係を考えれば分るように、当然長い。ターシャはアミリヤに強く憧れている。その持ち前の性格、もしくは強さに魅了されたのかどうか分からないが、ターシャが家族と喧嘩するほど無理を言って、ギルドに入ったのは、母のアミリヤに憧れてなったのではないかと、聖が思ったほどだ。

夢中になって話し込んでいた二人だが、アミリヤは、後ろに立っている聖の気配に気づき、

「あ！やっと来たわね。全くいつまで待たせるのよ？」

さも当然の権利であるかのように文句を言った。大して待たせたわけでもなく、さらに聖には入っていけないような空気を創った張本人のセリフに、多少の不快感を覚えながらも、この二人に歯むかって勝てるわけもなく、靴を履きながら、

「あぁごめん。それにしても、ターシャが来るなんて全く思わなかった。今日どうしたの？」

「馬鹿ねぇ、あんたを迎えに来てくれたのよ。さっさと行きなさい。

」

聖は何の反応もしなかった。だがその様子を見れば分かるように、突然のことに頭が働かず、言葉が出ないようだ。

「……何で？」

やっと凍った脳を回転させ、言葉を捻りだしたが、かえって場の空気を悪くしてしまった。沈黙が場を支配した。もはや聞こえるのは鳥の鳴き声と羽ばたく音だけであった。そして、ターシャが大きくため息をついたのをきっかけに、アミリヤは笑顔で、

「ふふ、早く行きなさい。わざわざターシャちゃんに頼んで、迎えに来てもらったんだから。」

無論その表情、言い方には普段の何倍もの迫力、聖を震え上がらせるような響きがあった。聖は自分の母の顔を極力見ないように努めながら、自分の状況をやっと理解することができた。母がよけいな気を使い、ターシャを迎えによこしたのだろう。

「いや母さん…言わないと分からないじゃないか…大体今日は一人で行こうと思ってたんだし。」

「何言ってるの？ターシャちゃんと一緒に行けば心強いでしょ。二人で行ってきなさい。」

笑いながら、身振りで聖が早く行くように促している。それに、まるで感謝しろとでもいうような、もったいぶった口調であった。何が母をここまでご機嫌にさせるのだろうか。聖はもう半ば諦めたように、押し黙っている。

「聖。早くしなさいよ。いつまで待たせるの？」

「分かったよ。それじゃ、母さん。行ってきます…」

こうして聖は、朝から母に振り回されつつも、胸の鼓動を抑えるように、足早に家を後にして、ギルドへとむかうのであった。

第四話：運命の朝（後書き）

出来たら一言感想お願いします。

第五話：聖の精霊（前編）

「なんか悪いな。付き合わせちゃって。」

「別にいいわよ。アミリヤさんの頼みだもの。アミリヤさんの頼みごとなら、どんな嫌なことだって大丈夫。」

どうやら聖は、ターシャの機嫌を昨日に引き続き、損なってしまったようだ。言葉に毒が含まれていて、聖に襲いかかっている。だが、付き合いの長い聖にとってそれは慣れたもので、平然と歩いていた。最もその様子が、余計にターシャの不機嫌さに拍車をかけているのだが。

ターシャと聖は、まっすぐギルドに向かって、足を運んでいた。途中、人々でにぎわっている市場を通りかかった。太陽の日差しが容赦なく、道行く人々に降り注がれている。そろそろ時刻も昼に近付いているのだろう。道行く人に呼びかける、活気ある人々の叫び声が響き渡っている。

「お！ターシャちゃんに聖。久しぶりだな！」

と知り合いのおじさんやその他の市場にいる人も話しかけてきた。ターシャは今までが嘘のような、天使のような微笑を浮かべながら、挨拶して通り過ぎた。聖も挨拶をしつつ、そのすぐ横を歩くのだが、周りの視線は当然のように、終始ターシャに向けられていた。聖はこの現象に、ターシャの人気を実感させられるのだった。そうなれば、当然

「あのターシャさんと、並んで歩いている男は誰だ？」

となり、聖は市場の人々、特に男性に穴が開くほど見つめられるのであった。聖は苦い思いをしつつも、なんとか市場を通り抜け、公園を過ぎ、ギルドに辿り着いた。

「やっと着いたわね。さぁ早く中に入りましょ！ふふ、聖はどんな精霊が出てくるのかしら。」

いつの間にかターシャの機嫌は、聖の気分と比例するかのように直っていった。聖は何故ターシャが、突然明るくなってきたのか分からなかったが、とうとうギルドの前に立っていると思うと、考えてもいられなくなった。人は、目の前に自分にとって大きな目標が目前に迫ったとき時、些細なことに気を取られなくなるものである。そのなんとも言えない喜びは、時に人に伝わるのだろう。

「うん。」　聖は抑えきれない心臓の鼓動、その内に秘められた無上の喜びを感じながら、ゆっくりと、まるで何かに挑むかのように、中に進んでいった。

「おや？ターシャ！会いたかったよ。昨日は突然帰ってしまって驚いたけど、また後でゆっくり話そうね。僕は君のためなら、例えどんな用事があろうと、君を優先するよ。ん…君は…確か…聖クンだったよね。今日が申請日か…ははは、僕も見てるから、頑張ってくれよ。見てる僕にも恥をかかせないでね。」

二人が入っていきなり、まるでずっと前からこの言葉が言いたくて待ち切れなかったかのように、ロム・グルポフが話しかけてきた。聖に対しては相変らず卑しい、高慢な口調であった。

「あ、どう…「ごめんなさいね、ロム。私今日は外せない用事があるの。またいつかね。」

聖がとりあえず返事を返そうと、声を発したが、わざと聖の声に被せたかのように、ターシャがいつか、を強調して話しかけた。

いきなりのターシャの責めるような言葉に、面をくらってしまったが、昨日の経験からか、すぐに持ち直し、

「そうか、残念だよ。君は忙しいからね…また次、時間が空いたら僕に話しかけてよ。おいしい食事をご馳走するからさ。」

今日はターシャの機嫌が悪いと思ったのだろう。あっさりと、ギルドにあるカウンターの椅子に腰をかけた。聖を横目に見つめながら、平然としながらも、どこかうずうずしたようなその様子は、何かが起こるのが待ち切れないようであった。

聖はそんなロムの様子には気付かないで、ロムが去った後、真っ先にギルドの受付の場所に向かった。

「すみません！聖といいますが、申請の方お願いします。」

「はい。聖様ですね。承っております。どうぞ、こちらへ。」

聖は、受付の女性に案内され、ギルドの一番奥の部屋、精霊の間に歩いて行った。

「聖！とにかく頑張りなさい！待っててあげるから。」

と、ターシャが声をかけた。その表情はいつになく真剣であった。

聖は立ち止まり、後ろを振り向き、そしてにっこりと、ターシャにむかい微笑んだ。

「ありがと。」

そしてまた前を向き、静かに歩き始めた。ターシャはもう一言声をかけたい様子だったが、どうやら言葉が出てこないようだ。顔がほんのり赤くなり、上を向けず、下の方をただじっと見つめているのだった。

聖はただ案内されるままに精霊の間、と呼ばれるギルドで最も神聖な場所にはいって行った。部屋は暗く、静寂と神聖な空気が場を支配していた。中は広いが、ただ床に何か模様が描かれており、真ん中に台とその上に水晶が置いてあるだけであった。

「よく来た…待っておったぞ。お主が聖か？」

どこに立っていたのか全く分からなかったが、突然後ろから話しかけられた。聖は多少違和感と困惑を覚えたが、

「はい。そうです。」

と、その老人の方を向き、相手の顔を見つめながら答えた。

「そうか。お主がか…その黒い目。あやつにそっくりじゃな。髪の色は違うが…まぁよかろう。少し待っておれ。」

と言い、台の方へ進んでいった。

「え？」聖が言葉を返す間もなく、その老人は水晶に手をかざし、呪文を唱え始めるのであった。

「あなたは？誰なんですか？」

「……よし、これでいいじゃろ。ん…そうじゃな。わしの名は…ゾシマ。ここのギルドを担当している、まぁ精霊召喚士ってところかの。細かいことはともかく、今準備ができたぞ。さぁ、ここに手をかざして。精霊に呼びかけてみよ。」

その言葉には、有無を言わせない不思議な魔力があるかのように、聖の戸惑いを消し去り、聖を水晶の前に導くのであった。

第五話：聖の精霊（前編）（後書き）

出来たら評価を、よろしくお願いします。

第六話：聖の精霊（後編）

聖はまるで命じられた機械のように、無意識に水晶の上に手をかざした。その途端、水晶の色が赤、茶色、青などに、どんどん変わっていった。何かに呼びかけているかのように、水晶が、色に応じて強く光っている。最後に白の色になり、ひときわ強い光を発した直後、今までの光が嘘のように、また元の状態に戻るのだった。

「……。」

聖は唖然としたまま、まだ正気に戻っていないかのように、水晶をじっと見つめていた。

「……。」（失敗かのう…しかし…あの強い光は…わしですらあんな光は見た記憶がない。）

辺りをまた静寂な空気が支配したと聖が感じた時、それは突然やってきた。水晶の上に、小さな竜巻が発生したのだ。あまりのことに、聖は目を開けていられなくなった。次第に竜巻は静まり、心地よいそよ風が吹くだけとなった。

「一体なんなんだ？」

「……お前が聖か？」

「え？」

聖は声のする方、上を見上げた。そこには、全身が真っ白で、長

い髪をなびかせた、小さい女の子が浮かんでいた。顔立ちは、大きな瞳が特徴的であり、かなりの美少女といっても過言ではなかった。

「そうだよ。…君は？」

「そうか！それでは、お前が今日から私の宿主だ。」

「人型じゃと！？」

ゾシマが一人、驚嘆の表情を浮かべ、思わず声を張り上げた。

この世界の精霊は、大抵動物や虫などの、自分が発生した元の形を模っているのがほとんどだ。人型の精霊も、全くいないわけではないが、それでもかなり稀なことであり、過去をさかのぼってもあまり例をみないことであった。

「まさか悪霊かのう？」

「なんだ？そこのじじい。あんな知性のかけらもない奴らと私を一緒にするのか。殺すぞ？」

ゾシマがこう思ったのもしょうがないことであった。悪霊とは、精霊とパートナーを組んでいた人間が、死んだあと、その体、もしくは魂を精霊に乗っ取られてしまった状態のことをいう。精霊のなかには、それを狙って人間と組むものもいる。しかし、悪霊になってしまうと、理性がなくなり、本能に忠実になってしまい、人に危害を加える可能性が高い。それゆえ悪霊となってしまった存在を排除するのもギルドの仕事なのだ。

「美人の顔の割には狂暴じゃのう…聖、こやつで大丈夫か？もし

嫌なら、特別にもう一回やってやるぞ？」

聖は、ただ黙ってもう一度、その精霊の方を見た。その精霊は、不安なのか、もしくは聖を見つめられるのを嫌っているのか、表情を強張らせ、怯えたように聖を見つめ返している。

「…いや、この精霊がいいです。そんなに悪い感じはしないし。」

ふぅ、精霊が安心したかのように、息を吐いた。表情も先ほどと比べ、穏やかで涼しげである。

「もっと慎重に選ばんか、全く。（そういうところはあやつに似ておるのぅ）それでは、仮契約にはいるとするかの。」

「仮契約？」

聖は意味が分かっていないように首をかしげている。

「知らんのか？精霊にも色々おるからのぅ。ギルドでは、最初は仮の契約をして…そうじゃな…仕事を2、3回こなして、認められてから、初めて本契約といって、本当のお主の精霊になるのじゃよ。」

「そんなのいらない。」

精霊が、さもめんどくさそうに言葉を投げかけたが、

「規則じゃからな。破ったらギルドにはいられんぞ？気をつけるんじゃな。」

ゾシマはそう言って、また呪文を唱え始めた。

「ところで君の名前は？」

「私のか？そうだな…メルシー。そう呼んでくれ。」

「分かった。これからよろしくね。メルシー。」

聖は、にこやかに笑いかけた。

「そ…そうだな。よろしくな。」

なぜか分からないが、また、周りに強い風が巻き起こり始めた。だが、聖には風が当たっていないようで、その突風はもろにゾシマに直撃してしまった。

「ぐふ……何をするんじゃ！もっと老人を労わらんか！」

ゾシマが非難の声を、風を起こした張本人に浴びせるが、本人は聞こえていないかのように、平然としている。

「…まぁよい。これで最後じゃ。契約を結びたかったら、大人しくしとれ。」

途端に風が嘘のように静まり返る。

「我、万物の主精霊王に誓い、今ここに宣言する。この二人が契約を結び、共に同じ道のりを歩むことを。」

ゾシマが唱え終わった瞬間、聖はまるでメルシーと重なり合った

かのような、不思議な感覚に襲われた。

「これでいいじゃろ。無事仮契約完了じゃ。これからは二人で頑張るんじゃぞ。」

聖は少し、呆気にとられながら、

「はい。ありがとうございます。ところであなたは一体？あやつって誰ですか？」

「さぁ、なんことかの？次が控えておるんじゃ。さっさと行かんか。」

「……はい。それじゃあ、失礼します。」

聖は納得がいかず、不満気な表情だったが、仕方なく、メルシーと一緒に部屋を後にした。

二人が完全に去ったのを見送った後、

「悪かったのう。無理を言ってしまって。」

「いえ…それにしても、なぜあなた様がわざわざ？新人の精霊召喚のためだけに、こんな辺鄙なところにお越しになるとは…。」

部屋に中年の男が、恐縮しながらはいってきた。その厳格な格好からみてみると、ここの本当の精霊召喚士なのだろう。

「なに、単なる年寄りのおふざけじゃよ。わしが来たのは内密に頼むぞ。それでは、わしは帰るとするかの。」

「…はい。お疲れ様でした。ゾシマ長老。」

聖は、精霊の間から出て、真っすぐギルドのフロアに向かった。その顔は晴れ晴れとしていて、嬉しさをかみしめているようだ。抑えきれない笑みがこぼれている。それも仕方がないだろう。聖にとっては、これがギルドへの第一歩なのである。後ろに佇んでいるメルシーにも、その気持ちが伝わったのだろうか。新たな主の嬉しそうな表情に誇らしげな様子で、辺りを見回している。

「聖！？ずいぶん早いわね…普通なら5時間は掛かるのに…まだ30分も経ってないわよ？」

ターシャが不安そうに、早足で駆けつけてきた。そのすぐ後に続いて、ロムが、

「やっぱり精霊は応じてくれなかったか。ははは、まぁ君じゃしょうがないよ。気を落とさなくていい。君の呼びかけに応じる精霊なんているはずがないんだ。」

さも愉快そうに、悠然と駆け寄ってきた。しかし、

「なんだ？この偉そうなのは？聖。お前の敵か？」

聖の後ろについていたメルシーが、突然声をあげ、聖に話しかけた。その瞬間、ギルド全体が凍りついたかのように、誰も声を発しなくなった。

「人型！？悪霊か？…」

「あの精霊しゃべれるのか！？」

数秒後、皆抑えきれないように、興奮して、一斉にこそこそと喋りだした。真っ先に聖に質問を投げかけたのがターシャで、ロムは今の状態が信じられないのか、放心したかのように呆然をしている。

「聖…もしかして、その後ろにいるのがあんたの精霊？」

「ん？そうだけど。」

「…でも人型で、しゃべれるなんて…その精霊のランクは？」

「聞いてないから知らない。へー…そんなのあるんだ。」

「聖様の精霊、メルシーの精霊ランクはＡですよ。」

受付の女性が律儀に答えたのをきっかけに、またもや誰も、ターシャさえも声を発しなくなった。

「聖。本当になんなんだ？こいつらは？さっきからわめいたり、急に静かになったり。」

「僕にも分からないよ…それより、これからちょっと寄るところがあるんだ。そういえば、メルシーってほかの精霊みたいに、僕の体に宿らないの？普通にしてるけど？」

通常、人とパートナを組んだ精霊は、人の魂に宿って力を蓄えると言われている。基本的に実体を持たない精霊にとって、そこは心地よい場所らしい。最も、精霊も千差万別で、絶対そうであるとも言えないのだが。

「ふふふ、私は他のやつとは出来が違うんでな。まぁ力を使ったらお前の中で休むが、それ以外の時は、このままの方が都合がいい。それと、いいか？もう聖の魂と体は、私の物だからな。その辺は、ちゃんと認識しておけ。」

「そっか。じゃあ行こう。」

聖は聞こえていないかのように、すたすたと出口の方へ向っていった。

「こら。ちゃんと聞いているのか？」

とメルシーが声を張り上げながら、追いかけていく。

未だに理解していない他の者達を置き去りに、二人はギルドの外に出て行ってしまった。これが、聖とメルシー、宿命を背負った人間と過去を背負った精霊の出会いであった。

第六話：聖の精霊（後編）（後書き）

一度でいいので、この小説に対する読者の評価を聞いてみたい！と思っています。拙い小説ですが、出来れば評価の方よろしくお願いします。

第七話：旋風

聖はギルドを出た。外はもう太陽が昇りきり、太陽の光と涼しい風が、道行く通行人を包みこんでいた。聖は、その気持ちの良い天気を噛みしめながら、そのままギルドの向かい側に足を運ぶのだった。

「聖、どこに行くんだ？」

メルシーが聖の後ろに付いて歩きながら、不思議そうに訪ねた。

「あぁ、昨日行くって約束した店があるんだ。「トロイカ」ってところ。今日はちゃんと商品じっくり見てみたいからさ。」

「ふーん…。」

メルシーはあまり興味がないのか、生返事を返し、しきりに周りの様子を、珍しそうに目を絶えず動かしながら眺めていた。

聖はその様子をじっと見つめながら、

「そういえばさ、何で僕の名前知ってたの？初対面だよね？」

メルシーはその質問に、少なからず驚嘆を覚えたようで、周りに目を移すのをやめ、聖の目線に合わせるように、突然浮かび上がった。

「へぇ…あの状況で…以外と鋭いな。はっきり言っておこうか、聖。お前は私たち一部の精霊の間では知らないものがいない。それ

ほどお前は有名で、魅力的な存在だ。」

聖は突然の事実に、頭が追い付かないのだろう。立ち止まりって目を見開き、

「え！？」

と答えるのがやっとだった。最も、今まで精霊に全く接点がないのにこんなことを言われたと考えれば、当然の反応だろう。

その反応に満足したのか、メルシーは得意気に微笑んでいる。

「いや、それはおかしいって。それなら、なんで今まで僕の前に精霊が現れなかったんだ？」

「三つ理由がある。一つは現状のお前は、はっきり言ってあまり魅力的ではない。だから、何も知らない他の連中は、お前なんか見向きもしなかった。二つ目は、実力の拮抗。お前を狙ってた他の精霊は、私を含め皆かなりの高位に位置する精霊でな。お互い睨みあって、なかなか手が出せなかった。」

「……。」

聖はただ黙ってその信じられないような言葉を、真剣な面持ちで聞いていた。

「まぁ、お前が有名な理由は後で話してやる。最後に三つ目、これが一番厄介だったのだが…その刀。お前が今背負っているその代物。そいつが、私たちがこの町に入るのを邪魔しやがった。おかげで何年、苦い思いをさせられたことか。」

「この刀が？特に何にも感じないけど。」

「そんなこと、私が知るわけないだろう！とにかく、それが原因なのは確かだ。ふふふ、まぁ、もはやお前は私の物だ。他の奴らが悔しがる姿が目に浮かぶ。その刀も、もうどうでもいいことだしな。」

聖は、腑に落ちないかのように、背負った刀を下ろし、手に持ってみた。だが、刀は無反応で、どう見てもそんな力を持っているようには見えなかった。

「まぁ、いっか…そのうち分かるだろうし。」

また元のように、刀を背に戻し、再び歩き出した。

（……しかし、何のつもりだ。散々邪魔しといて、今じゃなんの力も感じない。あいつはどこにいるんだ。）

メルシーは思考を張り巡らしたが、すぐに辞めてしまった。理由はともかく、自分は聖の精霊なのだ。そのことを確信をする度に、自然と笑みがこぼれてしまうのであった。

「メルシー？どうしたの？」

不思議に思った聖が、立ち止まり、メルシーの様子に首をかしげている。

「！！…お前のお気楽な様子に呆れてたんだよ。何でそんなにあっさりその刀を受け入れるんだか…。」

聖に怒り、呆れているかのような、攻撃的な口調を投げかけ、冷たい風と共に、聖の横に嬉しそうに並ぶのであった。

「お！よく来たな！そっちの子は？まさか彼女？」

「いや、カミンさん…浮かんでるじゃないですか。」

昨日と全く変わらず、声を張り上げながら、店の中から、カミンが笑顔で出迎えた。

「お前、私が見えるのか？ということは、お前も先ほどの連中と同じか。」

「しゃべった！？しかも人型…聖…もしかして、悪霊に取り付かれたのか？」

カミンが話し終わった直後、メルシーの起こした突風が、カミンを店の中まで吹き飛ばした。

「次、また私を悪霊なぞと勘違いしてみろ。このボロ屋ごと吹き飛ばしてやる。」

「メ…メルシー落ち着いて…カミンさん大丈夫ですか？」

聖は突然のことに、動揺し、急いでカミンの無事を確認しようと、店の中に駆け込んだ。

「ははは、元気な精霊だなー。しかもこの力…Aランククラスの精霊だな。」

聖の心配をよそに、平然とした様子で、立ちあがった。どうやら店の中も無事のようだ。カミンが、その体で庇ったのだろう。

「すみません…何ともないですか？」

「こう見えても、元ギルドの人間でね。このくらいじゃ何ともないさ。それより悪かったね。悪霊なんかと間違えちゃって。精霊の名前は？」

「メルシーだ。」

まだ気が収まっていないのだろう、憮然として、そっぽを向いている。

「あらら、怒らせちゃったか…それにしても、人間くさい精霊だな。こんなの初めてみる…少なくとも、俺の精霊よりは気分屋だな。」

「殺すぞ？」

また風を起こしそうになるのを、聖が慌てて止めて、

「そ、それよりカミンさん。今日は品物を買いに来たんですけど、何かいいものありますか？」

「おお、そうだったな。今日は聖のお祝いの意味も込めて、大サービスしてやるぞ。」

そういうと、くるりと背を向け、品物を物色し始めた。改めてこの店を見ると、外見の割に中は大きく、品物が多く棚に並んでいる。しかし、聖にとっては何に使うのか分からないものばかりだった。きれいな石やら、汚い靴やら…唯一分かるのは、薬草くらいのものであった。

「よし、こんなもんだろ。聖！ちょっと来てみろ。」

聖は、カミンに呼ばれて店の奥へと進んでいった。

「まずはこれ、この石だが、これには光の精霊の力が込められていてな。一回しか使えないから気をつけなくちゃまずいが、大抵の傷なら治してくれる。ギルドで働くなら必需品だ。次は服装だな。そんな私服じゃ、危なすぎだ。そういうわけでこれ。サイズ大丈夫か？」

そういって、白く輝いている石を三つ、それから黒色の丈夫そうな服を上下を聖に手渡した。

「着てみろよ。それは、軽い割には、すごい丈夫なんだ。熱にも強い。材料に、ある珍しい動物の……」

カミンが勢いよくしゃべりだした。しかし、聖は相槌としながらも、興味がないのか奥の着替えをする部屋で、聞き流しながら淡々と着替えている。メルシーも退屈そうに、欠伸をして眠そうな様子であった。

「ってとこだな。サイズは？見せてみろよ。」

ガチャ、ドアを開け、新しい黒い服装に着替え、すこし気まずそうに聖が出てきた。

「お！ぴったり。似合ってるぞ。これなら、ターシャちゃんもいちころだな。」

「誰が？いちころなんですか、カミンさん？」

まず間違いなく、今日はカミンにとって、疫日なのだろう。カミンの後ろには、悪魔の微笑みを浮かべたターシャが佇み、そして、カミンの方にゆっくりと近寄ってきた。その時のカミンは、傍から見て分かるくらい冷や汗を浮かべ、思わず苦笑いをしていた。

「あれ？ターシャ、用事は？」

「あんなの嘘。なんで私が、ロムなんかと出かけなくちゃいけないのよ。前は偶然会っただけ。今日は、夕方にちょっと人と会う約束してるだけよ。」

「そうなんだ。まぁともかく、カミンさん。これぴったしで、動きやすいし、気に入りました。いくらですか？」

「あ…あぁ、そうだな…銀貨二枚でいいよ。今日は特別だからな。」

「いや、値段なんかないだろう？今日は特別なんだから。」

今まで黙っていたメルシーが急に口をはさんだ。これには、カミンも吃驚して、

「こ…これでも十分サービスしているんだぞ。これ以上は無理だ。」

と、不安そうに、それでも断固ゆずらない姿勢をとったが、

「そうなんですか？」

今度はターシャがこれに続いた。これにはさすがのカミンもたじろいで、しばし沈黙したが、二人に睨めつけられ、諦めたのか、

「……言っておくが、今日だけだぞ！本当に今日だけ！ほら、聖。それそのまま持って行っていいぞ…。」

聖は、カミンを気の毒に思いながらも、巻き込まれるのはごめんとばかりに、

「…じゃあ…ありがたく貰っていきます。行こうか、メルシー。」

と、早々に店を後にするのだった。

「私のおかげだな、聖。感謝するがいい。」

メルシーは、ご機嫌な様子で、聖の傍を浮かんでいる。さっきの言動は、仕返しの意味もあったのだろう。

「何言ってるの？私が、カミンさんを説得してあげたのよ。」

いつの間にか聖に追いついたターシャが、納得いかないかのよう

に呟いた。

「なんだお前は？何故付いてくる？」

「聖が気になって、念のため後を追いかけたのよ。」

「余計な御世話だ。さっさと帰るんだな。用事とやらはいいのか？」

「そっちこそ余計な御世話。まだ時間は大丈夫よ。それよりあんた、ホントに精霊なの？」

どうやらこの二人は、相性が悪いようだ。どちらも攻撃的な口調で、相手ばかりでなく、自分すらも苛立たせている。

「はぁ……。（なんとかしてくれ…）」

聖にはどうすることも出来ず、これからのことを思うと、溜息が洩れるのであった。

第七話：旋風（後書き）

評価が来たのがうれしくて、急いで書いちゃいました。感想の方本当にありがとうございました。次はもっと描写をうまく書きたいと思います。

第八話：初仕事（前編）

朝日がカーテンの隙間から、暖かな日差しを覗かせ、聖に朝の到来を教えてくれる。風が心地よい。聖の部屋は、家で一番日当たりがよく、風通しもよい。聖の家の周りには住宅もなく、あるといえば、家の後ろにある森ぐらいのものであった。そこで、幼い頃のターシャと聖は、よく冒険ごっこなどの遊びではしゃぎまわったものであった。その森は、聖にとっては馴染みのある、思い出深い場所なのである。

「ん～朝か。眠い…。もう少し…。」

だが、そんな朝日も聖を起こすのには、力不足のようだ。目を擦りながら、朝日を確認した後、もう一度布団をかぶり直し、横になるのであった。

「おい、聖。アミリヤが呼んでいる。さっさと起きろ。」

どうやらアミリヤが、降りてこない聖を起こしに、メルシーを寄こしたようだ。しかし、一日でメルシーさえも従わせるとは、これは一種の才能と言ってもいいだろう。

「おぉ、メルシー…おはよ。ちょっと昨日疲れたからさ。まだ寝かせてくれ。」

「馬鹿め、それは聖が勝手にやったことだろう。むしろ私にとっては、迷惑だ。」

メルシーは怒っているのか、頬を少し膨らませ、その目は敵意で燃え上っている。

（まだターシャとのこと根にもっているのか…）聖は布団をかぶりながら、うつろな目で昨日の出来事を思い出していた。昨日、カムイの店「トロイカ」を出た後、ターシャとメルシーが、口論になったのだ。最初はお互い些細なことで揉めていただけであったが、谷底から落下するかのような速さで、どんどん深みにはまっていき、本気の喧嘩にまで発展してしまいそうになってしまったのである。ターシャが自分の精霊を出そうとまでしたほどであったのだが、聖がターシャをなんとか宥め、一度だけ何でもターシャの言うことを聖が聞くということで、やっと収まったのであった。

「何で？なんとか事なきを得たじゃないか。」

「だから、何で私とやつとの喧嘩を、聖があんな約束をしてまで止めるのだ？絶対私が勝っていたのに。これでは私が敗れたようなものではないか。」

「こうでもしないと、全力でお互いぶつかっていただろう。町が大惨事になるって…メルシーも、これからはターシャに限らず相手を怒らせないようにね。」

「ほぉ、あの女をかばい、さらには私に説教をするとは…いい度胸だな、聖。」

ターシャへの怒りが、どうやら聖への不満という形で表れたようだ。その鋭い眼光を、今度は聖に浴びせている。

「いや…それに、ターシャと精霊相手にメルシー、たった一人じゃ勝ち目は薄かったと思うよ？ターシャの格闘センスは、今の若手のギルドの人達の中ではずば抜けているって聞いたことあるし。」

「今度は私の力に対する侮辱か…今ここで見せてやろうか？」

聖の部屋に、メルシーの感情を表現するかのように、風が吹き荒れる。さすがの聖もメルシーの様子に焦ってきた。何を言っても、今のメルシーにはかえって逆効果のようだ。

「お…落ち着いて、メルシー。ほら、いい子だから。」

そういって聖は、メルシーの頭に手をかざし、やさしく撫で始めた。

「……ふん。子供扱いをするな。まぁいい。それより、アミリヤが呼んでいる。さっさと行くぞ。」

撫でられたのに吃驚したのか、しばらく大人しくしていたが、そんな自分に腹が立ったのだろう。急いで聖の手を払い、早口で言い放った。

「……え？メルシーって触ることできるの？精霊なのに？」

撫で終わって初めて気づいたのか、呆然と自分の手とメルシーを信じられないかのように見つめている。

「なんだ。知らないのか？人間と契約を交わした精霊は、契約を結んでいる限り実体化することができる。まぁ、生命の具現化とでもいうべきか。その姿も契約主の成長、魂の輝きに応じて変わるこ

とができるのだが…今の聖じゃ、今の小さな姿で我慢するしかないな。」

「へぇー…知らなかった…じゃあ、何で他の精霊はいつも見えないんだ？」

「実体化するのには、少なからず力を使うからな。普段は力を温存しているから、普通の連中には見えない。それか、契約を結んだ人間の魂にでも宿っているのだろう。無論、私はそんな微細な力など使わずとも実体化はできる。」

メルシーは、説明し終わった後、胸を張り、誇らしげな表情であった。聖に自分の力を見せつけるのが好きなのだろう。それはまるで、父親に何かを自慢したくてたまらない娘のようであった。そういう娘達は、自分を見てもらうことに喜びを感じるのである。最もメルシーの場合、父親にというよりは兄に当てはめた方が適しているが。

「すごいんだな！メルシーって。よし、じゃあターシャに大けがさせちゃうから、喧嘩は昨日きりにするんだぞ。」

と、なんとかターシャとの喧嘩を避けたいと、聖は語尾に力を込め、見つめながら祈るように言うのであった。メルシーは、ターシャの名前が出てきたことに、少し不満気な様子だったが、

「しょうがない。分かった。」

と、少し恥ずかしそうに、やっと聞こえるかのような声で呟くのだった。

「遅かったわねぇ。ご飯出来ているわよ。早く食べなさい。」

聖は、昨日トロイカで手に入れた黒服に着替え、腰には袋、刀を手にとって、メルシーと階段を下り、リビングに行った。すると、洗濯をしていたアメリヤが、待ちわびたように、テーブルの上にある料理を指さすのだった。

「いただきます。」

聖は黙々と食べ始めた。この少年は、基本的に食卓で話すのが嫌いで、食べている最中は、例え話しかけられても相槌をうつ程度なのである。それを知っているのか、メルシーは、聖のすぐ横にふらふらと浮かび、アミリヤもまた、せっせと洗濯に励むのだった。

「御馳走様！じゃあ、母さん。僕今日ギルド行ってくるから。メルシー、行こう。」

「初仕事でしょ。気をつけなさい。メルシーちゃんも、聖をよろしくね。」

聖が扉を開け、外にでた後、アミリヤはメルシーに小言で何かを話しかけた。その言葉に、メルシーはゆっくりと頷くとともに、急いで聖の後を追うのだった。

「ねぇ……本当に、これでいいのかしら…」

誰もいない家の中で、アミリヤは、まるでそこに誰かいるかのように話しかけるのであった。

第八話：初仕事（前編）（後書き）

評価と感想のほう、もしよろしければお願いします。
ぜひ、色んな人の意見も聞いてみたいです。

第九話：初仕事（中編）

「いい天気だなー今日は。ちょっと寄り道していかない？」

「何処にだ？今日はギルドの仕事をしにいくのだろう？」

「まぁまぁ…うん、双愛公園かな。あそこは噴水とかあって、気持ちがいいし。」

「まったく…」

そういいつつ、メルシーも満更ではなさそうで、嬉しそうに小さい笑みを浮かべていた。そのまま、聖とメルシーは二人で公園に向かった。まだ時刻が早いのか、公園には犬の散歩をしている少年、ベンチでハトに餌をあげている老人ぐらいしかいなかった。しかし、ハトが羽ばたく音や、雀の鳴き声、木のざわめきが耳に響き、心地よい。

聖はベンチに座り、空を見上げた。雲も、この天気に便乗しているかのように、本当はもっと速く進まなくてはいけないのに、わざとゆっくり移動しているように感じられるのであった。

聖とメルシーが、ベンチでくつろいでいると、その隣に、

「ここ、よろしいですか？」

聖より、少し年上の声、ハッとしてその人物に顔を向けると、青い奇麗な髪をなびかせながら、遠慮がちに訊ねる綺麗な少女の姿があった。その髪は、腰あたりまで伸びていて、水色の清楚な感じの服を着た、ターシャにも劣らない、美少女だった。

「あぁ、いいです…」

「だめだ。違うベンチに座れ。」

メルシーが、敵愾心を丸出しにして、怒ったように声を張り上げた。

少女は、いきなりのメルシーの出現に、少し驚嘆したようだったが、申し訳なさそうに、

「そうですか…ごめんなさい。それでは…」

といって、去っていこうとした。

「こら、メルシー。ダメだろ、そんな言い方しちゃ。どうぞ、別に待ち合わせとかしていませんから。」

聖が安心させようと、にっこりとほほ笑みながら、緊張しているのか、少し端に詰め、席を勧めた。最もそのベンチは、人が三人座っても十分スペースがあるのだが。

「ありがとうございます。」

嬉しそうに頭を下げ、聖に礼をいい、ベンチに腰をかけた。その一つ一つの動作には、気品が溢れ、見ている人に優雅さを印象づけ

るようだ。

「貴方はギルドの方なのですか？精霊を連れていますけど。」

「はい、昨日入ったばかりですけど。精霊のメルシーです。君も？」

「いいえ、違います。精霊は私の中にいるのですけど、あまり姿を見せたがらないので。」

「おい、聖。そろそろ行くぞ。時間がなくなる。今日は初仕事なんだからな。」

この二人の会話が面白くないのだろう。拗ねたように、聖の服を引っ張りながら、促すのだった。

「分かったよ。ごめん、ごめん。それじゃあ、僕はこれで」

「ええ、また今度お会いできるといいですね。お名前は？」

「聖です。君は？」

「マリヤ。マリヤ・ラスターシャ。珍しいお名前ですね。覚えておきます。聖さん。」

「じゃあまた今度。」

メルシーに引っ張られながら、聖はしかたなくマリヤに手を振り、ギルドに行くために、公園を後にするのだった。

マリヤは、聖を見送った後、安堵を覚えたかのように、

「ふぅ…」

と息をはいた直後、

「どうだった？あの期待の新人君は？ひひひ、見た感じひ弱で使い物にならないが、あの精霊は魅力的だな。」

聞くものの体を底冷えさせ、脳に直接響くような声であった。ハトや雀も、畏縮しているかのように、その存在が感じられない。

マリヤは突然男が出現したことに、心臓を握られたかのような衝撃を受けたが、その動揺を隠すかのように、

「なぜお前が此処にいるのですか？これは私の任務です。」

強気な口調を投げかけた。

「ひひひ、パートナーに向かってひどい口を叩くものだな～。あいつは、俺達の組織が待ちわびた、逸材なんだ。気になってしょうがないのさ。ひひひ、それにお前が変な気を起こしやしないかと心配になってな。ちゃんと、あいつの事を報告するんだぜ。」

その男は、いきなりベンチの後ろから現れ、ドサッと腰を下ろし、マリヤの肩に手をかけた。背の高い、大柄な男で、髪が白く顔が死人のように青白い。全身を真っ黒なマントで包んでいる。目つきが厭らしく、口元に絶えず人を見下すかのように微笑を浮かべていた。

マリヤは急いでその手を払い、ベンチから立ち上がった。

「一体いつまで私にこんなことをさせるのですか？」

その男を、気押されないよう精一杯睨めつけている。

「お前も貴重な人材だからな～。ひひ、一生無理だろう。人質もいるし、あまり変なことを考えるなよ。誰かに助けを求めようものなら、今すぐにでも。」

「それだけはやめて。」

「じゃあ二度とそんなくだらない質問はするんじゃない。そうだな、それともう少し笑ったらどうだ？「咲かない花」やらなんやら、ひひ、お前言われてたぜ。」

「……。」

「それより、さっさと来い。悪霊をもっと増やさなくちゃいけないんだからな。あぁ～めんどくせぇ。早く殺しがしたいぜ。」

（笑えるわけがないじゃない…）

その男の後を、無表情でついて行きながら、マリヤはその胸に、絶望と恐怖、目の前にいる男に対する、抑えきれない憎悪を感じるのだった。

「聖さん……か。もしかして、あの人なら。」

誰にも聞こえないよう、声を発したか自分でも分からないような声で、希望の光を求め呟くのだった。

その頃、聖とターシャは、ようやくギルドまで辿りついていた。どうやら、メルシーのことは周りに知れ渡っているようで、かすかな話し声と多くの視線を感じたが、話かけるものは誰もいなかった。聖はどうしたらいいか分からず、とにかく仕事を求め、受付に向かうのだった。

「すみません。聖ですけど。ギルドの仕事…ってどうすればいいんですか？」

「はい。少々お待ちください。」

受付は、地方によって大分違うが、ここの受付は首都に近いだけあって、とても親切で礼儀正しく好評である。ひどい所だと、勝手に探せとばかり色々な資料が混じったのを渡したり、不遜な態度をするのである。恐らく、元ギルドの人間がやっているのが原因なのだろう。

「お待たせしました。聖様のランクはDランクです。それだと…あちらの壁に貼ってある資料からお好きなのをお選びください。ランクは一定以上の仕事をこなし、ランクに応じたテストを受け、合格すれば上がりますので。または、向こうの壁に貼ってある賞金首を捕まえれば、その賞金首に応じて上がります、頑張ってください。」

「ありがとうございます。」

聖はお礼を言い、早速ランクDのエリアに向かうのだったが、

「こら、どこに行く？早く賞金首を捕まえにいくぞ。」

どうやらメルシーと聖は、根本的に考え方が違うようだ。賞金首のエリアに向かってしまったメルシーを、聖は頭の頭痛を抑えつつ、仕方がなく追いかけるのだった。

「いや、無理だって。メルシー。」

「聖、こいつを見ろ。別名死神。金貨十枚。この町で見かけたという証言つきだ。こいつにしよう。」

そこには、全身真っ黒で、生きているのかどうか分からないほど白い顔色をした、白髪の男が微笑んでいる顔が映っていた。その顔は、見る者に間違いなく戦慄を覚えさせるだろう。

「いや、無理。絶対無理。ほら、Aランク以外は危険って書いてあるし。僕はDランクだよ？」

「ふふ、私はAランクだ。問題はない。何をそんなに怖がる必要がある？」

「まったく…何を騒いでいるかと思えば…あなたでも無理よ。」

聖が声のする方を覗くと、ターシャが呆れたような表情を浮かべ、こちらに歩いてくる。

「またお前か…なぜそう言い切れる？」

「そいつは現在、Aランクのギルドのエリートを二人も返り討ち

にしているのよ？さらに、生粋の殺人中毒者。最近ある裏の組織に入ったとも言われているわ。とにかく、聖とメルシー。絶対に近寄らないでよ。」

珍しくターシャが真剣な様子で、注意を促している。メルシーにもその男の危険度が伝わったのだろう。仕方なさそうに、黙っているのであった。

「いや…絶対手は出さないって。勝てる気がしなし。」

「まぁ、当然よね。それより聖。昨日の約束覚えているんでしょうね？」

「そ…それは勿論。その話はとりあえず後にしてくれ。今は初仕事、初仕事っと。」

そう言ってターシャを後にし、Dランクのエリアに向かおうとするのだが、

「あら、丁度いいわ。それならあれ。やってみたら？」

と、ターシャが指をさした先には、Cランクエリアの所に［山賊退治D～Cランク対象］という張り紙が貼ってあった。恐らくメルシーを意識した発言だろう。

「ふ、これくらい楽勝だ。さっそくこれをやろう、聖。」

メルシーは言うまでもなく張り切っているが、主である聖は気が乗らないようだ。じっとその紙を見つめ、考え込んでいる。

「なんかこれ見ていると、いやな予感がするんだよなー。」

「私がいるんだから大丈夫だ。さぁ、さっさと申込にいこう。」

しかし、メルシーにしつこく説得され、しょうがなくそれを申込み、早速現地にむかうのだった。そこで生じるであろう、何かを予想しながら。

第九話：初仕事（中編）（後書き）

書くことがたくさんあって、書いててこれでいいのかなって自身がなくなってきます。書くのって本当に大変です。
それと、こんな作品を読んでくれて、本当にありがとうございます。

第十話：初仕事（山賊編）

聖は、あまり気乗りしないまま、強引にメルシーに引っ張られ、とうとうその山賊が出ると言われている山道の近くまでやってきた。

（メルシーってまるで小さい時のターシャみたいだな…）

メルシーの強引さは、聖に幼いころの思い出を振りかえさせるのだった。誰でも子供のころは、周りに存在する様々な現象が何でも不思議に感じられるものだ。無論年をとるにつれ、その好奇心は幻のように消え去っていくのだが。聖はよく、家の近くの森の神秘さや壮大さに惹かれたターシャに、今のように引き連れまわされたものであった。しかし、先ほどから聖は、その地から発せられるなんとも言えない不気味な空気に、体を強張らせ、意識を周囲にむけるのだった。

「よし、聖。さっさと山賊退治といくか。」

聖と対照的に、まるで遠足にいくかのような、軽い口調で、メルシーは聖の先をどんどん先に進むのであった。

「ちょっと待てって。なんでそんなに張り切ってるの？」

その問いかけに、メルシーは振り返り、少し顔を紅潮させながらも、満面の笑みで、

「私が聖にとって、なくてはならない精霊と認めさせるいい機会じゃないか。それを思うとつい興奮してな。いいか聖！私の活躍をよく見ておくんだぞ。」

と声を張り上げた。聖はその言葉に、少なからず衝撃を受けた。そして、メルシーが自分の精霊であることを、嬉しく思うのだった。顔には自然と笑みがこぼれ、抑えきれずに笑いだした。

「何を笑っている？そんなにおかしいのか？」

「いや…嬉しくってさ。思わず…メルシーこそ僕なんかには勿体ない精霊だよ。」

「言っておくが、私は生涯聖以外と組む気はない。私はお前以外の人間など、話すことすら嫌なのだからな。」

「何でそこまで？昨日少し言ってたけど、僕に何があるの？」

「それは……」

メルシーは口を結び、少しの間黙っていた。

「…別にこれといって何もない。ただ私がお前のことを気に入ってるだけだ。」

しかし、意を決したかのように、まじめな面持ちで呟いた。

「…そっか。それじゃ、さっさと山賊退治に行くか。今日中に終われればいいけど。」

そんなメルシーの様子に、違和感を覚えながらも、素知らぬ風に前に進むのだった。

「でも、初仕事が山賊退治って…ハードル高くないか？」

「何を言っている？お前には私に相応しいように、もっともっと成長してもらわないと困るんだ。このぐらいの危険がなくてどうする？」

「いやいや…さっきターシャも言ってたけど、こういう仕事は普通、何人かギルドでチームを組んでから行くものなんだって。メルシーが申し込むなり、すぐにあそこを飛び出して行っちゃうから無理だったけど。」

聖はため息をつきつつ、ターシャが呆れたようにこっちを眺めていた姿を思い出すのだった。聖は知らないが、その後ろの方では、話を聞いていたロムが、死角で卑屈な笑みを浮かべていたのだった。

「私がいるんだぞ？だいたい、何でお前がDランクなんだ？あの女ですらBランクなのに…」

メルシーは、憤然としたように、目を怒らせている。

「対抗心燃やさなくていいって。ターシャは特別。Bランクだって、あの年だったら間違いなくトップだよ。そもそもこの町にAランクの人いないしね。」

「そんなんで大丈夫なのか？この町は。」

「もし何かあったら、首都も近いし、すぐにAランクの人が派遣されるさ。」

「まぁ、聖がこの町初のAランクになればいいだけだな。これか

ら毎日修行だから、覚悟しておくんだぞ。」

「え…基礎体力とかの訓練なら、母さんに習ったのをやってるよ？」

「馬鹿め。そんなんじゃ、対精霊使いとの戦いじゃ、話にならない。私が言っているのは、私の力を使いこなす修業のことだ。聖のやっていた訓練とは、根本から違う。」

「はい？メルシーが戦うんじゃないの？」

「それじゃあ、言っとくが下っ端にしか勝てない。この戦いでは、どれだけ上手く精霊の力を引き出し、戦うのかにかかっているんだ。」

「…もしかして、今日戦うのって僕？」

「当然だろう、私はサポートだけだ。風の属性は、多くがサポート専門だぞ？」

「……帰ろっか。今日嫌な予感したし、まだ早いって。」

くるりと向きをかえ、来た道を急いで戻ろうとする聖。最も、そんなことメルシーがさせるはずもなく、聖は風で作られた壁に、勢いよく額をぶつけてしまった。

「何をしてるんだ？聖。道が違うぞ？山賊退治もいい経験だからな。修行にもってこいだ。全く、山賊は何をしている。早く出てくればいいものを。」

聖はぶつけた額をさすりながら、先ほど自分がすこし衝撃をうけ、感動した気持ちを頭の中で、思いっきり訂正するのだった。

「鬼だ…今日が命日かもしれない。」

聖が呟いた直後、待ち構えていたかのように、木の上や茂みの中から、突然４人ほどの屈強な男が現れるのであった。

メルシーが、笑みを浮かべているのは気のせいではないだろう。直ぐに聖の横に移動し、腕には不意の攻撃に備えてか、風が渦を巻いている。聖も、突然の出来事だったが、すぐに切り替え、背負っていた刀を鞘ごと下ろし、両手で構え、意識を集中させるのだった。山賊達も武器を構え、このまま戦闘に突入するかと思いきや、

「待て。」

山賊達のさらに後ろの方から、一人の女性と小さな少年が、しっかりとした足取りで歩いてきた。

「お前、精霊がいるってことは、ギルドの者か？」

「…そうですけど。」

聖は唐突な質問に戸惑いながらも、まだ距離を取り、刀を構えたまま答えた。

「ふぅ、やっと来たか。待ちわびたぞ。」

嬉しそうに話しかけてきたその女性は、露出の多い格好をしていて、弓と矢を後ろに背負っていた。銀色の短い髪と鋭い目つきが、

その衣装に似合っている。そのすぐ横に、隠れるように小さな少年が、じっと聖を見つめていた。髪の色は同じ銀髪だが、その女性と違い大人しそうな印象を聖に与えた。

「…どういうこと？」

「余計なことは聞くな聖。さっさとこいつらを退治しよう。」

メルシーは、そんなことは関係ないとばかりに、戦闘する姿勢であった。周囲の風が、聖の周りに集まってくる。

「野郎ども。武器をしまえ。こいつは、お頭に合わせる。おい、お前。私らははっきり言って、お前の敵じゃない。……いや、言いにくいんだが…お前の依頼主だ。」

女性が戸惑いながらも言ったその一言は、聖とメルシーの全身を凍りつかせ、頭を真っ白にさせるのだった。

聖は何とか説明を求めたようとしたが、理不尽にもいいからついてくるように言われ、今の状況を理解できないまま　その女性と少年に連れられて、森の奥、茂みの中にある洞窟まで辿り着いた。メルシーも少なからず混乱しているようだったが、とにかく大人しくついていくことに決めたらしい。一言も声を発しないで、聖の横に浮かんでいる。

「お頭！やっと、ギルドの人間がきたよ。」

「本当か！！」

洞窟の中から、見上げるような大男が顔を覗かせた。山賊という

言葉が、これほど似合う男もそうそういないだろう。茶色いぼさぼさの髪をしていて、髭も負けないくらい濃く、顔に寄生しているといったが当てはまっているだろう。腕と足は丸太のように太く、胸板もそうとう厚い。カミン顔まけの筋肉であった。そのあとに、６人ほど男が続いて出てきた。

「たった一人か…しかもあんま強そうじゃないな…本当にギルドの者か？もっと鍛えた方が…まぁいい。精霊を持っているならどうでもいいか。」

「え～と、どういうことなんですか？山賊退治に来たんですけど…依頼主って…」

聖はその男の言い分に腹を立てたメルシーが、怒って風を起こそうとするのを必死に止めながら、緊張しているのか、少し小声で話しかけた。

「…そうだな。簡潔に言うと、手前には山賊退治じゃなくて、俺らのアジトに住みついちまった悪霊を退治してもらいたいんだよ。」

「だったら、ギルドに正式に依頼すればいいじゃないですか？」

「はぁ…それができるならすでにやってる…恥を忍んで言うが…手元に金がねえんだよ。」

肩をぶるぶると震えさせ、手を強く握りしめている。屈辱と憤りを胸に秘めているのが一目で分かるが、その体格からは想像できないような暗い口調と表情は、恐らく自分自身の不甲斐なさを一番嘆いているんだろう。何事も自分の力で切り開いていった男にとって、今の現状は見渡すような大きな障壁となって、立ちふさがっている

のだった。

「山賊らしく、人から取ったり、今まで取ったものを換金するとかは？」

「全部無理だ。いいか。悪霊は俺らのアジトを攻めてきたんだ。こっちは逃げるので精一杯。武器もアジトに置きっぱなし。こんな状態じゃ山賊稼業もできやしない。やったとしてもだ、もしここにいることを知られて攻め込まれたら、全員お縄につくしかねえ…八方ふさがりなんだよ…」

今までの欝憤と苦労を吐き出したいのか、夢中になって語り始めた。聖の横にいたメルシーは、いつのまにか聖から離れ洞窟の中を浮遊している。

「…そこで必死に考えた結果がこれだ。悪霊退治ができるのは、精霊をもつ奴だけだ。だから、ギルドに依頼することにしたんだが、何分生活だけで精一杯…悪霊の依頼は最低Bランク…払えやしねぇ。だから、山賊依頼でギルドの奴を呼んで、解決してもらおうって寸法だ。金はねぇが何とか頼み込んでCランクにしてもらった。頼む！お前なら出来るだろう！」

「……」

聖はその剣幕に圧倒されてしまって、言葉が出なかった。しかし、冷静の今の状況を考えてみると、相当窮地に陥っているのは間違いないだろう。冷汗が出ているのを肌で実感しながら、何とか言葉を絞りだした。

「いや……僕はまだ新人で…ランクも低いし…あ、知りあいにB

ランクの凄腕がいるんで、その子に頼んでみますよ。」

ターシャを当てにするのは気が引けたが、いきなりBランクの仕事なんて引き受けるのは、無理だと理性ではなく本能が理解した。早くこの場を逃れようと、後ずさりしつつ、メルシーを目で探し始めたのだが。

「場所はどこだ？さっさと言え。」

いつの間にか実体化して、堂々と聖の横に浮かんでいた。その顔は、まさに感激の極地と言っても過言ではないほど、嬉しそうな笑みが溢れている。

「ちょ…メルシー！？何言ってんの？無理だって。Bランクの仕事だよ？」

「だから何だ？あの女ですらBランクなんだ。お前と私の方が優れているに決まっている。それに…ふふふ、こんなチャンスは滅多にないぞ。初仕事が悪霊退治なんだ。あの女の悔しがる姿が目に浮かぶ。それに、いい修業になるしな。」

「いや…ほら、割に合わないって。とりあえず、もっと修行を積んでから…」

と諦めきれず、メルシーの言葉に流されないように食いつくのだが、突然のメルシーの出現に驚嘆して、言葉がでなかったお頭が、

「金だったら心配しなくていい。悪霊追っ払ってくれんなら、ちゃんと規定の料金アジトにあるからよ。払ってやるぜ。そんくらい強ぇんだったら、うちの娘を嫁にやってもいい。どうだ？破格の条

件だろ。ここまで頼まれて、引き受けねぇのは男じゃねえよな。」

追い打ちをかけ、もはや聖の味方は一人もいなくなった。焦燥感と不安の念が、聖に襲い掛かり、纏わりつくのだった。

「何いってんだいお頭。何で私がこんな奴と…大体こいつ一人で、あんな狂暴な悪霊と渡り合えるわけがない。即効で死ぬだけさ。」

先ほど聖を案内した女性が、眉をよせ、不満気に文句を言い放った。

「何言ってんだ、ジェンネ。強い男が好きってよく言ってたじゃねえか。手前にかなう男なんて、この辺りじゃいないぜ。」

「馬鹿ども。何を勝手なことを言っている！聖の嫁など、絶対にいらん。邪魔なのはあの女だけで十分だ。もう一度言う。さっさと場所を教えろ。」

「あんた達じゃ、死ぬだけさ…悪いが、さっさと帰るか、替わりに強い奴をここに連れてきてくれないか？」

「よく聞け。言っておくが、私の精霊としてのランクはBでもCでもない。Aランクだ。その私の主である聖が、そこらの悪霊共に負けると思うのか？」

メルシーが話終えた瞬間、数秒の沈黙後、周りから驚きの声が少しずつ溢れだした。それは、お頭が雄叫びによって、歓喜の嵐となって、その声は洞窟の奥にまで響き渡るのだった。

「……メルシー…何てことを。もう引き受けたも同然じゃないか

…」

無論それは、ある一人の少年の声を置き去りにするのだった。

第十話：初仕事（山賊編）（後書き）

文字の量舐めてました…おさまりきらず、なんだか番外編みたいなタイトルに…次は気をつけたいです。
後、今までの話で感想もし何かあったら、一言でいいのでお願いします。読んでくれて、ありがとうございました。

第十一話：初仕事（悪霊編）

周りが騒いでいるなか、聖は悲嘆にくれ、思わずため息を吐いてしまうのだった。すると、誰かに服を引っ張られた。振り向くと、先ほどジェンネの横にいた少年がそこに立っていた。聖のことを心配しているのか、不安そうに聖を見上げるのだった。

「君の名前は？」

「……グリオ。」

その一言だけ言って、その少年は、またもやじっと聖をその目で見つめていた。

「え～っと…僕に何かあるの？顔に何かついてるのかな。」

グリオに目線を合わせるために、その場にしゃがみこみ、怯えさせないよう、慎重に声をかけた。

「へー…グリオが自分から人に接するなんて。聖だっけ？あんた相当好かれたねぇ。滅多にないよ、こんなこと。」

「…へぇ、そういえば、グリオ君ってジェンネさんの弟ですか？同じ銀髪だし。」

「その通りさ。お頭…いや親父は茶色だが、私とグリオは二人とも母親似でな。それと私は呼び捨てで構わないからね。…堅苦しいのは好きではないから。あと敬語もやめな。」

「わかった。これからは、ジェンネって呼ぶ……」

「…僕も。」

グリオは聖の服を引っ張り、自分の存在を主張するかのように、聖に話しかけた。これには、ジェンネも吃驚したのか唖然としている。

「分かった。よろしくね、グリオ。」

聖はグリオの頭を撫でながら、微笑みかけた。それを見たグリオは、恥ずかしがりながらも笑みを浮かべるのだった。一方、会話を聞いていたお頭は、その様子を驚きが混じった目で見つめるのだった。

「何いってやがる…馴れ馴れしく近寄ってきた男を何人半殺しにしたことやら。グリオも、俺にすらあんなに積極的に話しかけてこないってのに…」

誰にも気づかれないよう、そっと小声で、寂しそうに呟くのだった。

山賊達が騒ぐ中、待ちきれなくなったのだろう。メルシーは怒りのためか、頬を赤くさせ、大声で話し始めた。

「いい加減ばか騒ぎはやめにして、本題にはいれ。私達は暇ではない。帰ったら聖の修行があるんだからな。」

「……。」

聖にはもはや何も言うことが出来なかった。成り行きに任せることにしたのだろう。諦めているのか、現実から顔を背けているのか分からないが、大人しく黙っている。

「おお！そうだったな。場所なら、グリオとジェンネに案内させる。言っとくが、グリオは精霊を持っている。まぁ、攻撃するのに適してはいないが、俺達が無事なのはあいつのおかげだ。期待してくれていい。終わったら、狼煙をあげてくれ。楽しみにしてるからな。」

「そうか、まぁ私と聖だけで十分だ。それでは早速出発するとするか。行くぞ、聖。」

「…了解…」

（これからずっとこうなのかな…）先のことを思うと、自分は生きのびられるか、自信がなくなるのであった。

「悪霊はあそこだよ。」

洞窟を出た後、ジェンネとグリオに案内され、森をさらに奥へと進んでいくと、森の中でどうやって建てたのか分からないほど、立派屋敷が二つ並んでいた。しかし、行く先々で罠が仕掛けてあり、もしも案内がなかったら、聖は無事ではすまなかっただろう。

「あそこか…そういえば、グリオの精霊って？」

「……出てきて。」

グリオが呼ぶと、勢いよくグリオの中から、小さな水で模られた

水竜が出てきた。グリオに懐いているのだろう。グリオが手を差し出すと、嬉しそうにじゃれはじめた。

「…水竜？凄いな、初めて見た…かっこいいね。」

その一言に照れたのか、グリオは恥ずかしそうに下を向き、顔を紅潮させている。その水竜も、心なしか嬉しそうだ。

「その竜でなにが出来るんだ？攻撃は無理だと言っていたが。」

しかし、聖がその竜を褒めたのがメルシーとしては面白くないのだろう。水竜を横目に、グリオに早口で質問した。勿論、グリオは答えられず、下を向いてしまったので、見かねたジェンネが横から代わりに答えた。

「物や人を水で包むことだけさ。私らが悪霊に攻撃されそうになったとき、グリオが守ってくれたのさ。でも、まだそれだけしかできないらしいから、あまり戦闘にはむかないかもしれないけど。」

「その悪霊の属性は？」

「多分……火だな。よく分からないが、そいつが手をかざした瞬間、矢のような火球が飛んできたから。」

「…そうか。まぁ、聖なら大丈夫だろう。」

「こら、メルシー。そんなの当たったら多分死んじゃうって。とにかく、敵が火を使ってアジトが燃えたりなんてしたら一大事だ。風の障壁でなんとか防ぎながら、近くの川のまでおびきよせよう。確か、悪霊って知能少ないんだよね？」

「そうだが…そんなに簡単にいかないだろう。山賊のアジトと乗っ取って、何を考えているか知らんが…恐らく馬鹿ではあるまい。おびきだしてもそこを動くかどうか…」

「…ジェンネ、悪霊の大きさはどのくらい？」

「確かあまり大きくはなかった…聖と同じくらいだね。…だが無茶はするな。ダメならダメで、違うギルドの奴をこれから金を稼いで雇えばいいだけなんだから。」

ジェンネは不安そうに、聖の顔から感情を判断したいのか、じっと穴があくほど見つめるのであった。

「はは、そのなけなしのお金はもう使っちゃったんでしょ？洞窟の中や皆の顔を見ればわかるさ。悪霊なら大丈夫。ただ、グリオ。ちょっと手伝ってくれない？君のその力が必要なんだ。」

「……うん。」

聖は少し緊張しているグリオを安心させるために、微笑みながら、グリオの頭を撫でるのだった。その様子に、思わずジェンネも笑顔が漏れ、悪霊にアジトを追われて以来、久しく味わってなかった感情、溢れる期待感に胸が一杯になるのだった。

「よし、じゃあメルシー。初仕事と行こうか。」

「そうだな。私と聖の初仕事…ふふふ、悪霊もついていない。」

聖とメルシーは悪霊に気づかれないように、慎重に屋敷に近づいた。かなり広かったが、幸いにも悪霊の姿を先に確認することができた。何を考えているのか、屋敷の庭でじっと空を見上げ、ただ立っているだけで、不気味な印象を聖に与えたのであった。聖は恐怖と興奮を抑えつけ、息を落ち着かせた。

「いた…よし、まずは挑発。メルシー、頼む。」

メルシーが頷き、手をかざしたその瞬間、悪霊に向かって突風が吹き荒れた。

「グ…オォォォォォ。」

突然の風に驚き、数秒何の行動もしなかったが、それが精霊による攻撃と気づいたのだろう、急に森中に響くような雄叫びをあげ、すごい形相で辺りを睨めつけている。

「あれが…悪霊か…」

聖が思わずこう呟いてしまったのも無理はない。メルシーと同じように人型ではあるが、悪霊と間違えられて怒っていた気持ちがよく分かった。確かに見た目は人の形をしているが、髪と目は赤く染まっていて、その手足も精霊による影響なのだろう、真っ赤に変色し、皮膚は、鱗のようなものが覆っている。なまじ人間が元となっているため、一層悲惨な姿に見え、その姿からは悲しみ、恐怖しか伝わってこない。まさしく化け物であった。

「ウォォォ…」

悪霊は、その目で風の発生元である聖を視界にいれた。そして、

片手を聖に向けてかざす。聖はとっさに横に飛んだ。その手からは、ジェンネが言ったように、まさに矢のような火球が、手をかざした瞬間襲いかかってきた。

「これは、当たったら火傷なんかじゃすまないな…多分一瞬で黒こげだ。」

聖はなんとか避けることができたが、屋敷の囲っていた壁が、一瞬で燃え尽きた。

「いいか、怯えるな聖。これから、全力で風をお前の体に集中させる。それにしても、ここまでのレベルとは、私も考えていなかった…あの悪霊は何かがおかしい…今の聖では、その状態はもって一分か二分程度だろう。それ以上は、まだ体に負担が大きすぎる。いけるか？」

「多分大丈夫…それから僕が合図したら、メルシーがジェンネ達と初めて会ったときにやったように、腕に風を集中できる？」

「問題ないが…何を考えている？」

「とにかく頼む。来るぞ。」

悪霊は聖が無事なのに気付き、今度は両手をかざした。火球が今度は二発、聖にむかって放たれる。だが、メルシーが聖の周りに小さな竜巻といっても過言ではないような、強力な風を纏わせる。その風は、聖の移動速度、防御力を飛躍的に上昇させた。その火球をなんなく紙一重でかわし、一気に接近を試みる。どうやら、火球は連射が利かず、最大発射数は二発なのだろう。威力は強力ではあるが、今の聖にとって、悪霊が次に発射させる時間が最高の好機であ

った。一瞬で悪霊の背後に回り込む。

「メルシー！」

「分かった。」

掛声とともに、聖の腕に風がうねりをあげて集中される。悪霊が聖に手をかざし、火球を発射しようとしたその瞬間、悪霊の胴体に、聖は渾身の一撃を叩きこんだ。

「オォォォォォォ」

叫び声をあげながら、悪霊は思い切り吹き飛ばされる。聖は悪霊が吹き飛んだ後も、全力で風をその両手から放った。その風は屋敷の壁を突き抜け、木々をなぎ倒し、グリオのいる川の辺りまで悪霊を移動させる。

「来たぞ。グリオ！」

「……うん。」

グリオはその力を使い、川の水を操り悪霊を分厚い水の壁で包みこんだ。一方、我を忘れ、怒り狂った悪霊は、周りを見ずにその火球で二人を焼きつくそうとする。しかし、水に閉じ込められた状態から、灼熱の火球を発射したので、水は高温の蒸気となって、悪霊に襲いかかった。

「グオォォォ…」

悪霊が悲鳴を上げ、苦しそうに倒れ、動かなくなった。

「やった！ついに倒したな、グリオ。」

「……いや、まだ…」

「何？」

ジェンネが急いで悪霊に目を向けると、なんと皮膚が破れ、全身傷だらけにも関わらず、立ち上がり、大きく口を開け、そこから燃えたぎっている火は、ジェンネとグリオに死を予感させた。

「いや……」

「……。」

グリオが急いで水の壁を出そうとするが火炎の発射の方が早く、間に合わない。そのまま、火炎は二人に向かって一直線に放たれた。だが、そこで聖が間一髪二人の前に立ちふさがり、もはやメルシーの風の効力は弱まってしまっていたが、背中に背負っていた刀を構える。

「馬鹿、そんなので……」

メルシーが必死に叫ぶが、聖は精神を集中させ、刀を火炎にむかいに垂直に振りおろした。

「え？……」

ジェンネが思わず呟く。信じられない現象が起こったのだ。あの灼熱の火炎が、何かに吸い込まれたか、元々存在しなかったかのよ

うに、一瞬で消え去った。これには聖も驚いたが、対する悪霊の衝撃は聖以上だったのだろう。唖然としているのか、口を開けたまま動かない。その好機をメルシーは見逃さなかった。

「聖！それでそいつを斬れ！」

正気に返った聖は、まだこの現象を理解することができなかったが、風の効力が少しでも残っているうちに、足に力を込め、悪霊にむかって飛び込んだ。悪霊もそれに気づき、逃げようとするが、今の聖から逃げられるハズもなく、後ろから一太刀、聖が勢いを利用して頭に叩き込む。

「ウォォォォォォ」

悪霊は、周りに呪いを与えるかのような、気味の悪い最後の咆哮をあげ、跡形もなく消え去った。

「やった……」

しかし、聖の方も体が耐えきれなくなったか、その体を止めきれず、川に思いきり落ちてしまった。

「聖！！」

その様子を見て心配になったジェンネが、憔悴しきった顔で、すぐさま川に飛び込んだ。聖は気絶してしまったのだろう。ジェンネの腕に抱えられ、川から引き上げられた。そして、そのままアジトに運ばれ、ベットに寝かされた。メルシーが不安そうに、傍に寄り添っている。

「今狼煙をあげたから、すぐにお頭達がやってくるよ。本当にありがとな。」

「ふん、礼なら聖に言ってやれ。全く…他の人間なんて庇って…もしあの刀でなかったら、命はなかったというのに。」

「なんなんだい？あの刀は？鞘に入ったまま使っていたが……」

「聖はお前ら人間の中で、特別だということだけだ。他に説明すべきことなどない。」

「そうかい…聖…変わったやつだな。」

「言っておくが、聖を好きになったなんて戯言と言うんじゃないぞ。今でもこいつにつっかかる変な女が一人いるんだ。全く…」

「聖がもてるとなんか不都合があるのかい？」

「余計な詮索は無用だ。お前には関係ない。さっさと金の準備でもしてくるんだな。聖の容体は私が見る。」

「あらら、聖もこんなのに好かれちまうとは。なんだかますます好きになりそうだよ。」

「貴様…私の忠告を聞いていたのか？精霊もいない分際で…」

「それは…まぁいい。そのうちギルドとやらにも行ってみるから、聖にも伝えといてくれないかい？」

「……」

風が部屋を支配し、室内とは思えないような突風が吹きあげる。それを見たジェンネは、やれやれといった表情で、仕方なく部屋を後にするのだった。

一方同時刻、山賊のアジトからすこし離れたところで、一人の全身黒い服で包まれた男と、青い髪をした少女がいた。男の方は、薄ら笑いを浮かべ、青い髪の少女は深く考え込んでいる。

「ひひ、驚いたな～さすが期待の星。初仕事で、あのレベルの悪霊を難なく倒すとは。Bランクのやつでも手こずるレベルだと思ってたんだけどよ。あの坊ちゃんもやるじゃねえか、見直したぜ。ひひひ、楽しくなってきたな～。」

「いいんですか？あいつ倒されちゃいましたけど…精霊の方もどこにいったか分りません。確かやっと捕まえた精霊だったのでは？上からなにか言われますよ。」

「そんなくだらないこと。どうでもいいじゃねぇか。おっもしろいもんが見れたぜ～ただ、ベースの人間の方が弱すぎたな。全然火の力を使いこなせてねぇ。上に言っとけ、次はもっといいベースを用意しろってな。ところで、いつ勧誘するんだ？恐らく、この1件が公になったら、ギルバード王国やらなんやに先こされちまうぜ？」

「さぁ？上が判断することですから。あの精霊は惜しかったですけど、いいデータが取れました。聖さんとメルシーのデータも。今日はもう退散しましょう。」

「分かった、分かった。帰って寝るとしようかねぇ…それより、なんだか今日はご機嫌じゃねえか。ひひひ、あいつに惚れでもした

のか？」

「馬鹿なことを言わないで下さい。」

「ひひひ…」

不気味に笑いながら、男は森の中に消えていった。その場に残った少女は、アジトの方に目を向け、微笑みをこぼすのだった。

一縷の希望を胸に抱かせながら。

第十一話：初仕事（悪霊編）（後書き）

なんだか一番長文になってしまいました。っていうか、最近そういう傾向に……次は読みやすい小説を目指したいです。感想の方よろしかったらお願いします。

第十二話：初仕事（後編）

「う……」

ここはどこだろう。僕は確か…悪霊と闘って、その後は…。川に落ちたんだった…あれで倒せたのかな？なんだか実感がないや。

「聖！やっと起きたか？」

そういって、メルシーが嬉しそうに抱きついてきた。はっきり言って、メルシーの外見はまだ８歳くらいの小さな女の子で、白い髪と容姿がなかったら、精霊と区別がつかないほど人に似てるんだよなぁ。これじゃあ、知らない人が見たら誤解されそうだ…心配かけたんだからしょうがないけど。

「頭は大丈夫か？怪我とかは？大丈夫なのか？」

「うん。ごめんね、心配かけて。」

「全くだ…これから修行が待っているというのに、怪我なんてしたらどうするつもりだったんだ？」

「いや…それは…また今度ってことで…」

凄い剣幕で胸もとを掴まれる。すごい迫力だ。絶対本気で言っている。勘弁してもらいたいな…どれだけ修行ってきついんだろう。強くなるのは賛成なんだけど、体がもつかどうか。

「何言ってるんだい。そんな気はないくせに…」

そこへ、ジェンネが後ろにグリオを携えて、水を持ってきてくれた。二人を見た瞬間、今までのことが嘘のように、鮮明に浮かび上がってきた。そうだ、悪霊は確か消えて…母さん、あの刀って一体…帰ったら聞いてみよう。

「あれ？そういえば僕の刀は？」

「ん？ああ、あの黒いやつか。あれならちゃんと下の階に置いてあるよ。ただ、親父達がどんちゃん騒ぎやってるけどね…それより、大丈夫なのかい？」

「うん。特に痛いところもないし。」

「そうかい、それは良かった。そうだ、ちゃんとメルシーに礼を言っとくんだぞ。ふふ、私を追い出して、一人で必死に看病を…」

「しょうがない。今日は修行は勘弁してやるが、明日は絶対だぞ！」

そう言って、突然メルシーは窓から外に出て行ってしまった。なぜだか、白いハズのメルシーの顔が、真っ赤に見えたけど…恥ずかしがってるのかな。

「……これ。」

「なに？その重たそうな袋。」

「ああ、それは今回の報酬だよ。親父が正に幸せの絶頂といった感じでな。かなり奮発してたらそんな具合になってな。まぁ、快く

貰ってくれ。」

「……うん。」

「いや…こんなに貰えないって…大体、グリオにすごく手伝ってもらったんだし。グリオと半分ずつでいいよ。」

「おいおい…遠慮するな。その年でギルドやってるんだ。色々金もいるだろう？感謝の印だ。若いうちは、素直に貰っとくもんだよ。」

「ジェンネってまだ若いじゃないか…人生悟ってるみたいな言い方されてもなぁ。今何歳なの？」

「１９歳だ。私はお前のような温室育ちとは違うからな。貰えるものは貰っとけ。損にはならないぞ。」

「それは山賊の理論じゃないか…まぁいいや、有難く貰っとくよ。」

小さなグリオの手から、金貨で膨らんだ袋を受け取った。ズシっと手に重さが伝わる。すごいな…これ。いつか町を出るときのためにとっとこうかな。そういえば、これが初報酬になるんだけど、こんなにギルドの人って貰ってるんだ。じゃあ、ターシャはどれだけ稼いでるんだ…お金がないとか言って、よく僕を連れ出して奢らせてたけど。

「ところで聖…この後、親父…じゃないお頭が、起きたらきてくれって言ってたよ。多分礼でも言いたいんだろう。ところで、もう空が暗くなり始めたから泊まっていかないかい？皆大歓迎さ。」

「いや、勝手に無断外泊なんてしたら、母親がちょっと……じゃない、かなり恐ろしいから、お頭に会ったらすぐに帰るよ。ベットありがと。」

そう言って聖は、かぶせてあった布団をどけて、下の階に行こうとした。だが、ジェンネが聖の首を後ろから掴み、離さなかった。

「ぐぇ…ジェンネ…何？」

「いや、言い忘れていたんだが、泊まるのはもう決定事項なんだよ。もう豪華な夕食も聖主催ってことで準備してるしさ。」

「だから無理だって…悪いけど帰るってこと伝えてくれないか。ジェンネなら出来るでしょ？」

「却下だね。私もグリオも、聖と過ごすことを楽しみにしてたんだし、もう部屋だって決まってるんだ。そこまでしてもらって帰るなんて、男じゃないよ。」

「お…お頭の言葉…外見は母親似だけど、内面はお頭似なんだ。いや…本当に悪いけど、とにかく無理。僕は帰るよ。まだ死にたくないから。」

「ここまで言っても無理か…はは、頑固な奴だな。」

「はは、そういうことだからいい加減離してくれ…息が苦しい。」

ジェンネが笑ったので、つられて苦笑いをした聖だったが、ジェンネの眉が真ん中に少し寄っているのに気がついた。それに、首に

かかる握力もどんどん高まってきている。（メルシー…頼むから、帰ってきてくれ。）心底そう願った聖だったが一向に現れる気配をみせない。

「最後に一つ質問があるんだが、帰り道…分かるかい？後、罠の位置も。」

「え…そういえば、ここってどのあたりだっけ…あ…案内とかお願いできますか？」

「今日はちょっとめまいが酷くてねぇ。明日には治ってそうなんだが…」

「そうきたか…グ…グリオは大丈夫だよね。頼む！ほんの少し安全な帰り道教えてくれればいいから。」

「……。」

グリオはどうしようか迷っているようで、見るからに動揺して、キョロキョロとジェンネと聖の顔を交互に見ていた。だが、ジェンネが意味ありげな目配せをした後に独り言のように呟くのだった。

「聖が今日ここにいれば、たくさん遊んでもらえるし、お話も出来るんだがねぇ。帰っちゃうと、次会えるのはいつのことやら。」

「ジェンネ、ずるいぞ。今ここで帰らないと、これから永久に会えなくなるかも知れないのに。」

「メルシーがいるし、死にはしないだろう？じゃあ決まりじゃないか。そうだろ、グリオ。」

「……（コクリ）」

終わった…悪霊なんかより、この兄弟の方がずっと厄介じゃないか…母さんにもターシャにもなんて言われることやら…いや、もうどうだっていいか。今を生きよう。

聖は長い思考の末、吹っ切れたように、胸に暗い明日を閉じ込め笑顔を取り繕うのだった。

「分かった…仕方がないから、今晩泊まらせてもらうよ。」

「最初からそう言えば良かったのにねぇ。そうと決まったところで、お頭の所に行くか。ほら、グリオもおいで。」

聖の首から手を離し、陽気な足取りでさっさと下に向かうのだった。（何でこんな目に…こうなったらメルシーに何とかしてもらうしかないか。）思いっきり他力本願だが、他に手も思いつかず、グリオを引きつれ重い足取りで下に向かうのだった。

「おお！聖か。手前もよくやったな！おい。さっさとそこに座りな。」

下では山賊達が、酒瓶を両手に抱え込み、皆が皆顔を真っ赤にして騒ぎまくっていた。ある者は歌ったり、ある者は踊ったりで何がなんだか分からない、未知の領域を聖に感じさせた。

「ほどほどにして下さいね。相当酔ってるでしょう？」

「おお、ははは。未来の息子は厳しいな。手前の精霊だって、一

杯飲ませたらすげぇ飲み始めて、散々飲んで酔っ払った挙句に眠っちまったぜ。ほら、あそこにいるだろ。」

お頭が指を指したほうを見ると、確かにメルシーが、顔を赤くし、熟睡した様子で隅っこに横になっていた。

へぇ、メルシーって普通に酔うんだ…じゃない、最後の希望が…まさかこんな形で失うことになるとは…今日はとことん疫日かもしれないな。何度呼んでも返事のないメルシーを、とりあえず寝かせておくことにして、聖は椅子に座った。

「ってあれ？息子って…誰かと勘違いしてるんじゃないですか。グリオはあっちでジェンネと一緒ですよ。」

「はぁ、何言ってんだよ、息子は手前だよ。手前。我らが英雄聖。ジェンネをよろしく頼むぞ。あいつは母親似でな～しっかりしてるし、何より美人でいい体してんだろ。この近辺じゃ、銀髪の女神って言われてるほど有名なんだぜ。まぁ、そこらの男どもには目もくれないんで、心配してたんだが手前なら大丈夫だ！結婚しないなんて、男じゃないよなぁ。そうそう、あいつの小さかった頃なんか……」

「……。」

何だろう？この展開は…実はまだ夢の中なんじゃないかな…お頭の終わりの見えない自慢話が始まったが、聖は呆然としたまま、周りをうつろな目で見渡していた。よく見ると、山賊達の中には、酔いつつも悲しみに萎れている者や、にやにやと気味の悪い顔をして見つめている者もいた。果てには、殺意すら感じさせる鋭い視線も。

「ああ、分かった。お頭も他の人も酔ってるんでしょ？この状況はあり得ないから。僕はまだお酒は飲めないからさ。落ち着くまで、ちょっと外の風に当たってくるよ。」

「俺のどこが酔ってるってんだ～だいたい、手前はジェンネ目当てで悪霊追っ払ったんじゃねえのか？実際何人かそういう奴がいたぜ。結局戻ってこなかったけどよ。」

「メルシーが勝手に引き受けたんですよ。それが目的じゃないですから。そもそもジェンネも納得しないですって。」

「何言ってんだい聖？私の蒲団で寝たんだから、責任取ってもらわなくちゃねぇ。」

ジェンネは顔を赤らめ、手に酒瓶を持ちながら、嬉しそうに聖に後ろから抱きついてきた。

「責任？何言ってるの？っていうか、もう酔ってる…なぁジェンネ。お頭に何とか言ってくれない？」

「こら聖！お頭じゃなくて、義父さんだろうが。」

「展開が早すぎる……頼むから何とか説得してくれ。」

「なんで私がそんな無意味なことをしなくちゃいけないんだい？言っとくが、拒否しても無駄だよ。聖がなんと言おうとどこに行こうと、私は聖の後を追いかけるから。聖に負けないように、ちゃんと精霊も手に入れて修行してからだけどね。」

「へ？何で？」

「私がお前に惚れたからに決まってるじゃないか。私たちを庇ってくれた時の聖はカッコよかった…惚れ惚れしちゃうよ。」

そう言って、腕にかける力をさらに強くし、聖の首を締め付けた。

「……死ぬ。」

「……お姉ちゃん、聖…兄ちゃんが死んじゃうって。」

グリオがジェンネの服を引っ張り止めさせようとする。しかし、酔ったジェンネには聞こえていないのか、依然として力を込めたまま、聖にもたれかかっていた。しかたなく、グリオは精霊を呼び出しジェンネに水をかけさせた。

「うーん…何すんだい？グリオ。」

「……お姉ちゃんは、酔うと強暴になるからやめときなよ。……聖兄ちゃんが苦しがってる。」

「そうだな。ちょっと興奮しすぎちゃったかねぇ。大丈夫かい？」

「ゲホッ…うん、なんとか。それよりさっき言ったことって本当？寝ぼけてない？」

「当然さ。そのうちギルドってとこに顔出しに行くからね。楽しみにしてな。」

「……うん。僕も行く。」

本気みたいだ…困った…僕そんな気全然ないのにっていうか年が早すぎるでしょ。周りは依然として騒がしく、まるで聖の所だけ全く違う場所のような気さえさせるのだった。そんな状況が、聖をのみこんでいく。

「まぁ……いっか。止められそうにないし。ジェンネ言っとくけど、僕はまだ付き合うとか結婚とかする気全然ないよ？」

「そんなの関係ないさ。まだ…なんだろう？今度会った時は、聖を惚れさせてみせるさ。楽しみにしとくんだね。それはそうと、この酒、聖も飲みな。男なら飲むしかないよ。」

「男は関係ないと思うけど…じゃあちょっとだけ。」

聖は好奇心に負けて、一杯飲んでしまうのだった。ジェンネは興味深そうに眺めている。

「うぇ…まっず…よくこんなの飲めるね？」

「はは、かわいいねぇ。まだまだガキだね～。今日はとことん飲むよ。」

「うえ…勘弁してくれ。」

聖にとって、最も過酷な一日はこうして夜まで続くのだった。無論、家はある女性の怒りのために、崩壊の危機にさらされていたのだが。それはまた、次の話。

第十二話：初仕事（後編）（後書き）

ちょっと書き方変えてみたんですけど…まだまだよく分からないです。今次回の展開を練っています。何かあったら、ぜひ一言お願いします。

第十三話：絆

「すっごく疲れた…でも、もう少しで家だ。あと少し…」

聖の目は充血していて、足元もおぼつかなかった。しかも、一歩一歩全身全霊をかけて進んでいるその姿からは、まるで少年とは思えない、人生の辛酸を味わいつくして萎れた老人を思い起こさせるのだった。

「軟弱だな聖は。これからはちゃんと鍛えるんだぞ。」

その横で、メルシーはすっきりと、晴れ晴れとした表情で浮かんでいた。そんなメルシーに気づいた聖は、恨めしそうに睨んでいる。

「メルシー？誰のおかげだと思ってるの。結局メルシーが寝込んだ後、お酒をさんざん飲まされそうになったり、お頭にはしつこく絡まれるは、一部の人には嫌味を言われるは、その人達をジェンネが殴り倒すはで、全然疲れが抜けてないんだよ。やっと皆が夢の世界に旅立ったと思って、喜んだのもつかの間で、今度はメルシーが寝ぼけて暴れだすし…本当にグリオがいてくれて助かった。」

「記憶にないんだが…聖の勘違いじゃないのか？」

「ははは、メルシー本気で言ってるの？せっかくアジトを悪霊から、ほとんど無傷で取り返したってのに、朝には家の中と外が繋がってたじゃないか。あの壁の修理費今回の報酬から払ったんだよ？」

聖は、昨晩の苦痛を思い出すと、口調に怒りが表れるどころか、

かえって笑みがこぼれ、さっぱりとしたものになっていった。メルシーは、そんな主の微妙な変化に、不気味さと恐怖を感じ取るのだった。こんな聖は、メルシーが召喚されて以来、初めてであった。誰でも、いつも怒鳴り散らし、そんな自分に快感を覚えている輩より、普段全く怒らずに、物事に動じないタイプの人間の逆鱗に触れたときの方が、より確かな恐怖を覚えるだろう。

「聖……怒ってるのか？」

「ん？……別に。」

この短いやりとりの中で、メルシーはある確信を深めた。激怒しているというほど、聖は怒っていないが、それでも一種の苛立ちや怒りを抱えているのは間違いないだろう。聖から少し離れ、不安そうに聖の顔色伺っていた。その姿は大好きな父親に怒られた娘を思い起こさせるようだった。

「そ…そうか。今日は…そうだな。ゆっくり休んだ方がいいだろう。」

「大丈夫だよ。家で少し休んだら、修行やらなくちゃ…次悪霊にあったら、本当勝てる気しないよ。もっと強くならなくちゃ。」

「…やめておけ、そんな状態でなにができる？倒れたら元も子もないではないか。」

「そっか…じゃあ、家で休んでから散歩ついでにターシャに悪霊について聞きに行こうかな。今まで奢らされた分も含めて追及してみる。」

メルシーは、ターシャを聖が口にしたとき、その言葉に敏感に反応した。ふいに何を思ったか、じっと聖を見つめてるのだった。最も聖にはその視線に気づく余裕などなく、ただひたすら前だけに意識が集中していた。太陽はもう真上に位置し、雲は太陽の光を浴びて、まるで絵画のように、悠然と空を散歩しているかのようだった。時刻は、すでに朝を通り過ぎ、昼に向かっていた。メルシーが何かを言うために、口を開きかけたが、後ろの方から周りを気にしない大声が響いてきた。

「おーい、聖ー！」

聖がその聞き覚えのある声を、頭の中で反芻させながら、振り返って相手を見た。

「はぁはぁ…聖。全く、久しぶりだってのに全然気づきやしねえんだから…聞いたぜ、ギルド入ったんだってな。本当にびっくりしたぜ。ってか、今にも倒れそうな顔してるけど大丈夫なのか？」

その人物はそう早口で言いきって、親しげに聖の肩に手をかけ、嬉しそうに笑いかけた。身長は聖よりも頭一つ分高く、背が高いというわけでもないが、その自信にあふれた顔つきは、見る人に本人を大きいという印象を与えるのだった。髪の毛は金色ではねたり寝ぐせがついてたりしていたが、それがまた本人に似合っているように感じられた。顔は、一言で言うと男前といった方が的確だろう。ただ、その顔で慌ただしく、落ち着きのない様子は、逆に滑稽ささえ感じさせた。

「うん…まだ大丈夫。本当に久しぶりだね。レートニイ。ギルドの方は順調？」

「当然。なんせ俺のチームは最強だからな。知ってるか？最近じゃあBランクの仕事もこなしてるんだぜ。悪霊だって、今月で三匹倒したしな。」

「へぇ…凄いね。チームって誰と組んでるの？」

「おお、聞いて驚くなよ。実はな…なんとあのターシャがいるんだよ。確かお前って一応幼馴染だったんだろう？あいつは凄すぎだぜ。もうターシャが入ってるだけで、この町のトップレベルチームさ。入りたいって奴が一体週に何人いることやら…後は、おれの妹ともう一人、すご腕の奴がいるんだ。はは、どうだ？聖。羨ましいだろう？」

「うーん…ターシャと一緒はちょっと。僕は一人でやってくつもりだしね。」

その言葉を聞いたレートニイは、さも意外そうな顔をした。この話をすれば、十人が十人なんとかこのチームに入ろうと思って、食いついてきたり思わせぶりなことを言うのだった。その様子を見たり聞いたりするのは、そのチームの一員として鼻が高く、何とも言えない充実感を感じるので、よく周りにチームの話をするのだが、聖のように全く関心なくそっけない態度をとる人物は初めてだった。

「いやいや、一人はきついぜ。もし良かったら、特別にこのチームに入れるように話つけてやろうか？」

「いや、いいって。気を使わなくても。」

「聖。さっさと行くぞ。時間の無駄だ。こんなお喋りに付き合っている時間はない。」

「お！これが噂の喋る精霊か！召喚された精霊がＡランクなんて前代未聞らしいからな。皆がお前に一目置いてるぜ。けど美人の割には、ターシャみたいに愛想がない…口調も男みたいだし、変な精霊だな。」

あからさまに不機嫌な顔をしたメルシーを横目に見た聖は、メルシーとレートニイの間に立ち、穏便にことを運ぼうとした。それを悟ったのか、メルシーは憮然とした表情のままだったが、そっぽを向き何も言わなかった。

「メルシーはいいの精霊だよ。頼りになるしね。昨日は仕事をこなしてきたんだ。一日かけて、やっと終わったよ。」

「それそれ、俺はそれが聞きたかったんだよ。山賊って聖一人なんかで退治でるのか。まぁ、無事っぽいけど…倒せたのか？やっぱり逃げた？」

「うーん…色々あってね…なんて説明していいか分からないけど。実は、その山賊が依頼主で悪霊退治頼まれちゃってね…退治してきた。」

「はぁ？何言ってるんだ。最近ギルド入ったばっかの奴が、悪霊退治なんてできるわけないだろ？」

「黙れ、ボケ男。私がいるんだ当然だろう。」

メルシーは得意気に口をはさんだが、レートニイはただただ唖然として、言葉が出ないようだった。数秒の沈黙の後やっと正気に戻ったか、訝しげに声を発した。

「嘘だろ…で、どんな悪霊なんだ。言ってみろよ。」

「全身が赤くて、確か目も赤かったかな…鱗みたいなのが、腕に見えたけど。後は…腕から火球を飛ばしてきた。」

「ん…なんかそれ、見たことあるような…聖！今暇か？ギルド行ってみようぜ。」

「嫌だ。僕疲れたからさ。また今度ってことで。じゃあね。」

関わるのはごめんとばかりに、面倒そうにに会話を切り上げ帰ろうとする聖だった。メルシーも黙ってそのあとに続いた。だが、レートニイは異様に興奮していて、そんな聖の様子や言葉など目に入っていないかのようであった。聖の手を取り、何とかしてギルドに連れて行こうとする。

「なんだ貴様？聖は疲れているんだ。用もないのに聖に触るな。去れ。」

「うわ…凄い言い様だな。俺だって暇だから聖を連れて行こうとしてるんじゃないぜ。そういえば、聖もまだ知らないのか？悪霊にも賞金首の奴がいるんだぜ。まぁ、悪質と判断された奴ばっかだけどな。確か、全身真赤で火を使うって奴もいたんだよな。そいつ、あのロム・グルポフが狙ってるって噂で聞いたぜ。」

「ん～今度行ったときに見てみるよ。あんま興味ないし…今眠いし。」

「何言ってるんだ聖？私達のランクが上がるかもしれないんだぞ。

すぐに確かめてこよう。」

「その通りだ聖。それにこれは凄い快挙かもしれないんだぜ。しかも、あのむかつくロムを出し抜いたのかもしれないんだからな。」

「ロムを知ってるの？」

「おいおい…そんなこと言うのお前ぐらいだぜ。高慢で、女好きで、いつも下のランクの連中をからかったり、嘲笑ったりで、いい印象持ってる奴なんて皆無だよ。しかも、最近ターシャに狙いをつけたらしくてな。ターシャは全然目もくれないのに、全く懲りないで、次の日には自分にいい様に解釈してまた寄ってくるんだ。チームに入れろってしつこいし…いつも文句俺に言ってくるんだぜ。俺が邪魔してるとかなんとか…勘弁してくれよ。」

「そんなことはどうでもいい。聖、先に行ってるからな。必ず来るんだぞ。」

メルシーはそう聖に言い残し、その場に突風が吹いた直後、風になったかのように消えるのだった。レートニイも、最早ギルド行きが元々決定していたのかと、聖が疑問を覚える程しっかりした足どりで聖が必死に歩いた道のりを後にし、ギルドに向かうのだった。

（メルシー…楽しみなのは分かるけど、さっきと言ってたことが全然違う…っていうか精霊って疲れないのかな。）聖は理不尽なメルシーの行為に呆れつつ、とりあえず黙ってレートニイに続いた。しばらく歩いた後、前を歩いていたレートニイは突然振り返り、聖に目を見つめながら、聖の表情を探るように言葉を発した。

「しっかし聖がなぁ…悪いことは言わないからやめといたらどう

だ？お前はギルドにむいてないと思うぜ。」

「そう？まぁ、ギルド自体にはそんなに興味がないんだけどさ。」

「自覚はあるのか。そんならさっさと誰かとチーム組めよ。強い奴と組めれば、それだけ危険は少ないんだからな。一人じゃ限度があるしな。俺を見習え。とにかく何回いやな顔をされても粘り強くがコツだな。そうすりゃ、道は切り開ける。」

「そこまでするんだ…よくやるよ…さすが、レートニイ」

聖はあきれたように呟いたが、そんな様子にレートニイはまったく気づかずに、褒められてると思っているのだろう。声高らかに笑っていた。

「何か聞こえない？メルシーかな…」

その後二人は、軽く雑談をしながらギルドにたどり着いた。その中では、何やらメルシーの声らしきものが聞こえてきた。誰かと口喧嘩しているようで、その一方の声も同じく聖にとって馴染みのある声であった。

「この声ってターシャじゃないか？」

レートニイも、中の様子に気づいたらしく、訝しげな表情を見せた。入るのを迷っているのだろう、ギルドの一歩前で立ち止まっている。

「聖…先に入れよ。この喧嘩を止められる奴はお前しかいない…と思うぜ。」

「僕は関係ないんじゃないかな…というかレートニイはターシャと同じチームでしょ。何とかできない？」

「いや、俺なんかじゃ不可能だろう…一つ言っとくが、俺のチームで俺の言うことを聞く奴なんて一人もいないぜ。それにきっとお前が原因だろうな。それ以外に考えられないし。まぁいい。腹くくって入ろうぜ。」

「…はぁ、そうだね。」（レートニイも大変なんだな…）

二人が中に入ると、その存在に気づいたメルシーとターシャは、待っていたとばかりに二人に、いや聖に押し掛けてきた。

「聖！これを見ろ。あの悪霊賞金首だったぞ！通称暴虐の火竜。賞金は金貨三枚だ。やったな。」

メルシーは、踊りださんばかりにはしゃいでいた。しかし、その横では怖いくらい真剣な顔で、ターシャは黙って聖の歩み寄り胸倉を掴んだ。

「聖…あんた、悪霊に手を出したの？」

「いや…成り行きっていうか…偶然そうなった。」

「おい、聖から手をどけろ。だからさっきから言ってるだろう。別に悪霊を狙ったわけではない。」

「そういう問題じゃないわよ。悪霊に一人で遭遇したら、すぐに逃げる。これは常識よ！」

「…一人じゃなかったよ。グリオとジェンネもいたし。なんとか無事倒せたしね。」

「…それでも初仕事でそんなことすることないじゃない。死んだらどうするの？」

「死なないよ。絶対に。」

聖をにらめつけていたターシャだったが、聖のその一言と強い目の光を見て、急にどうでもよくなったのか、呆れたのか。聖から手を離した。

「もう知らないわ。勝手にどこででも死になさい。後、一つ言づけ預かってるわ…アミリヤさんが、聖にあったら伝えてくれって。『うちでは無断外泊は禁止。帰ったら覚悟しなさい』だって。自業自得ね。」

最後に死刑宣告をして、ターシャはギルドを出て行った。その時の聖の顔は、なんとも表現しづらいが、顔色は真っ青であった。まるで、昔夢に見た悪夢を現実に再現されたかのように。

「聖、どうしたんだ？急に顔色が悪くなったが…」

「…そっか、メルシーは知らないんだっけ…多分後で分かるよ。とりあえず今日もう報酬貰って帰ろう。心配してくれてありがと。」

聖はそう言って、メルシーの頭に手を乗せ、撫で始めた。突然の行動に驚いたメルシーだったが、反抗するわけでもなく、下を向き顔を紅潮させながら大人しくしていた。

「ほぉ…メルシーって、聖に心底懐いてるんだな～いいなぁ聖は。メルシーの体型がまだまだガキなのが残念だけどな。」

レートニイは思わず呟いたが、メルシーには気に食わなかったのだろう。顔を上げ、手をレートニイの方にむけて伸ばし、突風で吹き飛ばした。

「…ぐぇ。」

そのままレートニイは壁に頭をぶつけて気絶したのか、動かなくなった。

「おいおい…メルシー。しょうがないな。おーい、レートニイ大丈夫？」

「……。」

「まぁ、レートニイなら大丈夫か。メルシー、もうやらないでよ。危ないから。」

「ふん、こいつが余計なことを言うのが悪い。いいから、早くランクを聞きに行こう。」

辺りは突然のメルシーの突風に騒然としていたが、二人は気にする様子もなく受付に向かった。

「……というわけで、この悪霊倒したと思うんですけど。」

「承知いたしました。では、精霊メルシー。この水晶に手をかざ

して下さい。そうすれば確認ができますので。」

そう言って、後ろに設置してあった銀色の水晶をメルシーの前に出した。

「……」

メルシーは無言で手をかざした。その瞬間、水晶に悪霊の姿が映し出された。その映像に聖とメルシーは呆気にとられていたが、すぐに消えてしまった。

「どうやら本当のようですね。それでは、こちらが賞金の金貨三枚。そして聖様のギルドランクは、特別昇級でCランクになります。」

「ところでこの水晶って何なんですか？」

「この水晶は、精霊の見た映像を映し出すことができる貴重な物です。銀色の慧眼とも呼ばれています。聖様、初仕事で悪霊退治というのはあまりお薦めしませんが、これからもギルドのために頑張ってください。」

「…分かりました。それじゃあこれで。メルシー。」

「ふふ、そうだな。明日も早速仕事にかかろう。」

「こらこら…明日は修行頼むよ。お金もたくさん手に入ったし、仕事はいろんな意味で当分無理だろうから…メルシー、これから二人でもっと強くなろうな。」

「当然だ。」

聖は微笑んだ。それを見たメルシーも、心底嬉しそうに満面の笑みを浮かべるのだった。

第十三話：絆（後書き）

時間掛かってしまってすみません。これからの展開考えてたら、何回も書き直すことになってしまって…

出来れば評価の方、すっごく嬉しいのでよろしお願いします。

第十四話：忍び寄る影

「死…死ぬかと思った…」

疲れた体に鞭をうって、ようやく家に辿り着いた思ったら、そこにいたのは予想以上に修羅と化した母だった。ドアを開け、床に倒れこもうとすると、殺気をこもった一言が放たれた。

「何様なの？聖。」

その後の出来事は思い出すのもつらい…当然のように夕飯抜き、散々怒鳴られ、最後に一発殴られた後、二度と無断外泊しないと誓わされた。予想通り仕事も一週間禁止…という判決が無慈悲にも決せられた。無論こっちの言い分なんて、全く聞いてもらえなかった。

「聖、アミリヤは何者だ？どこの猛者だったのだ？」

「さぁ…昔はギルドにいたらしいけど、詳しいことは…」

メルシーは、さすがに庇ってくれようとしたんだけど、母さんの迫力と目に圧倒されて、何も言えなかったらしい。今日は改めて母の強さと恐ろしさと理不尽さを痛感した一日だった。

聖はアミリヤから解放された後、何も考えずにベットに潜り込んだ。

「まぁ、仕事一週間禁止っていうのもちょうどいいかもね。明日から…修行…頼むね…もっと…強く…」

「分かった。いいから寝ろ。昨日今日でよく頑張ったな、聖。…お前の精霊として、私は誇りに…」

「すぅぅ…」

「全く…私の主は、もう少し起きててくれたっていいのに。」

聖の横顔を、近くでじっと見つめた後、メルシーはため息をついた。

「まぁ、しょうがないか…さて…おい、そこのぼろ刀。昨日はどういうつもりだ？」

「偉そうに。わらわが助けてやったから、お主らが無事だったのだろうに。この小娘。ちゃんと聖を守らなかったらお主を消すぞ。」

部屋の入口に置いてあった刀から、突然黒い影のように、人型の精霊が浮かび上がってきた。髪と目は吸い込まれる黒色。衣装は紫色の民族衣装のようなひらひらとした服。その顔は、神秘さと高貴さを兼ね備えていた。メルシーを、その鋭く、相手を委縮させる黒い瞳を細めながら見つめ、その言葉一つ一つは、メルシーを諌めるためのものであるかのようだ。

「貴様こそ、何様のつもりだ。聖は私のものだ、貴様はさっさと刀から離れて違う奴に憑いたらどうだ？それが貴様にはお似合いだ。」

「言うねぇ。わらわに手も足も出なかったうつけが。聖を手に入れたつもりになって浮かれておるわ。たまたま聖と風の属性との相性がよかっただけのこと。まだまだ、聖を狙ってる輩がおるから追

っ払いに行ってやったというのに。感謝の一言があってもおかしくあるまい？」

「…それがどうした。とにかく、聖には私だけでいいんだ。貴様は消えろ。」

「お主も力づくで追っ払ってみよ。ふふ、一生不可能だろう。それより、わらわは訳があってまだ聖に力を貸すことが出来ない。昨日は聖が無理にわらわの力を引き出しただけのことよ。案の定すぐに気絶してしまったが、本当に将来が楽しみな奴ではないか。さすが奴の血筋をひく…」

「貴様に言われなくても分かっている！いいから消えるんだな。さもなくば私が貴様を殺す。」

「無理だと言っておろうに。わらわは下等な言い争いをする趣味はない。ただ聖のために言っておく。…まだ聖を狙ってる精霊もそうだが、不穏な輩が暗躍しているようでな。お主にも注意を…」

「そんなこと、言われなくても分かっている。聖は私が必ず守る。必ずだ。」

「ふ、そうか。それでは甚だ不本意だが、わらわ達の希望の子、聖を頼むぞ。それでは、さらばじゃ。」

黒い影は消え、また元の刀に戻った。メルシーはしばらく黙って椅子に座りこんでいたが、いくら考えても無意味なことを悟ったのだろう。聖の温もりある布団に潜り込み、聖の横で静かな寝息をたてるのだった。

「聖～起きなくていいの～ご飯なくなるわよ。」

「はいはい。」

母の声で呼ばれると、最早条件反射で起きてしまうのだろう。焦点のあってない虚ろな目で、なんとか返事をするのだった。太陽を雲が覆い、空は曇っていた。窓には霧のようなの水滴がついていた。聖はベットを抜け、窓を開け空を見上げた。小雨が降っていたのを確認し、そのまま、窓を閉め着替えようとしたのだが、やっとある事実に気づくのだった。灯台もと暗しとはまさにこの事かもしれない。

「…メルシー、何でそこにいるの？確か母さんのところで寝ることになったはずじゃなかったっけ。」

「ん…おはよう聖。私がどこで寝ようといいではないか。何か問題でもあるのか？」

「え～っと、ターシャやレートニイに知られたら面倒っていうか、教育上問題アリっていうか。」

「そんなことどうでもいいではないか。ふぁぁ…言わせておけ。どこで寝ようと私の勝手だ。」

「まぁ…いっか。メルシーだし。それより修行、これから一週間頼むよ。」

「任せておけ。早くAランクにいかなくちゃいけないからな。」

「……。」

言葉を失くした聖だったが、その表情に絶望の色はなく、まだ堂々としているとは言えないが、少なくとも数日前聖よりは、凛々しかった。

（悪霊との戦闘が、聖を成長させたのか…それとも…ふふ、本当にこれからが楽しみだな。私が聖を強くするんだ。）聖の態度に、今までと違った空気を感じたメルシーは、体中に溢れる喜びを実感しながら、密かに決意を固めるのだった。

「そういえばさ、昨日の夜、なんだか懐かしい…いや、メルシーじゃないようなものを感じたんだけど何か知らない？寝ぼけててよく覚えてないんだけど…夢かな。」

「……多分夢だろう。それより早く修行の準備をするぞ。ところでアミリヤはもう怒ってないのか？」

「あ～母さんは一日たったら、大抵のことはどうでもよくなるタイプの人だから。ほんと、子供みたいな人だよね。」

「聖～何か言った～？」

「なんでもないから！メルシー、早く下に行こっか。」

アミリアに急かされ、急いで下に向かうのだった。メルシーは聖の言い方に、何かおかしな、奇妙な違和感を感じたのだった。しかし、数秒頭をよぎっただけで、その感覚すぐに消え去った。

「それじゃあ、今日はこのくらいにしておくか。」

「……もう無理…」

「情けないな聖は。そんなんじゃ、Aランクなんて夢のまた夢だぞ。」

聖とメルシーは、朝食後に、家の裏にある森に入って行った。まだ少し雨が降っていたが、森の中では逆に気持ちよく感じるのだった。森の奥、聖の好きな大きな一本の木がある場所まで進んでいった。そこでのメルシーの最初の一言は、

「私の風を感じて、自分の風として操ってみろ。」

「はい？無理だよそんなの。」

聖が即座に拒絶した瞬間、聖は凄い勢いで吹き飛ばされた。

「この風の中をそうだな…十五分以上平然と立っていられたら合格だな。いいか聖。属性の能力は、精霊によっては色々特性があるから一概には言えない。ただ私の場合、風を聖に一時的に与え、聖がそれをどれだけうまく使うかに勝敗がかかっていると言っていい。悪霊の時のような付け焼刃は恐らく通用しない。だから、私の風を感じることから聖の修行は始まるんだ。ついでにその根性も鍛えなおしてやる。全く…少しはマシになったと思ったらこれだ…」

無論メルシーの言葉は、軽く十メートルは離れた茂みの中にいる聖には届いていなかったのだが。その後、時刻はもう夜中。途中何回か休憩をはさみながらだったが、一日中、聖は暴風にさらされて

いたことになるのである。

「私は聖の体で寝ることにする。これだけやれば十分だろう。私も今日は疲れた。」

「……了解。」

メルシーはその言葉と共に、聖の目の前から消えるのだった。聖はもはや自由に動かない体の重さを感じながら、仰向けになって夜空を眺めていた。そのまましばらくかすかな星を眺めていた。

星ってなんで光ってるんだろうな。そういえば昔、ターシャが大人ぶってよく分からない理論ならべてたけど、全然分からなかったっけ。適当に頷いてたら、その時も確かターシャに……ガサッ…聖は突然後ろの方から人がやってくるのを感じた。その瞬間全身に緊張を張り巡らし、刀に手をかけたが、その人物は予想外にも見覚えがあった。

「こんばんは。聖さん。」

そこには、月の光を後光に、綺麗な青い髪をなびかせた一人の少女が佇んでいた。

第十五話：勧誘

「え？君は…マリヤさん。なんでこんなところに？」

「ふふ、突然すみません。少しあなたに用がありまして。隣いいですか？」

聖が驚いて、次の言葉が出てこなかった。沢山の疑問が頭のすみずみに浮かんできたが、ほぐれた糸のようにこんがらがってしまった。しかし、隣に座るマリヤを見ると、そんな疑問など、どうでもいいように感じてしまうのだった。それがアミリヤの魅力か、突然のこの状況かは分からないが、聖は無意識に質問をしていた。

「用事ってなんですか？」

「そうですね…まず聖さん。敬語をやめてもらえませんか？私は気にしませんので。」

「いいですけど…それなら、マリヤさんも普通に話していいですよ。」

「私にとって、この言葉使いが普通ですから。」

「…そっか、分かったよ。それで、こんな夜中にどうしたの？この場所を知ってるのはターシャぐらいなんだけど。」

「ふふ、それは秘密です。聖さん。単刀直入に言いますが、あなたを勧誘しに来たんです。ギルドをやめて私が所属している組織に入ってくれませんか？」

「……。」

聖は突然叱られて、何の言葉も出ない子供のように、ただ唖然として言葉が出てこなかった。その様子を注意深く観察したマリヤは、子供に諭すかのような口調で、ゆっくりと話し始めた。

「すみません。突然こんなことを言ったら当然ですよね。先日、暴虐の火竜を倒したDランクのあなたの実績を知った上の者が、ぜひあなたを組織アヴィズムに迎え入れたいとの事なんです。報酬も弾むらしんですが…どうですか？」

「…悪いけど興味ないな。他を当たってくれない？メルシーも怒るだろうしさ。」

「そうですか…残念です。あなたと仕事をしてみたいと思っていたのですが。」

「こっちも一つ質問していい？」

「何ですか？」

「…マリヤさんって今幸せ？こんな質問して悪いんだけどさ。なんだか最初会ったときから、マリヤさんの笑顔って、まるで苦笑いしてるかのような、ぎこちなさを感じるんだ。必要だから笑顔を作る、みたいな。」

今度はマリヤが驚く番であった。咄嗟に目を見開き、聖を見つめた。その様子に聖は、今までの大人びた顔が、急に年相応のものになっているのを感じたのだった。

「……。答えられません。そもそも私のことはどうだって…」

「マリヤさんこそギルド入らない？そのアヴィズム…だっけ。無理に働いてるならさ、ギルドに入って、僕の知り合いみたいに楽しく…かな？とにかくチーム組んで、その人達と一緒に仕事こなしていった方が絶対楽しいよ。」

「…いいですね。そんな明るい人生も…ふふ、なんだか立場が逆ですね。私が勧誘しにきたのに。言っておきますが、アヴィズムはあなたを決して諦めませんよ。あなたは、アヴィズムから逃げれられません。」

「なら僕も入らないのを諦めなければいいだけさ。逃げる気もないしね。」

「！！そんな簡単に。あなたはお気楽すぎます。あの組織は、あなたを入れる為なら殺人だろうと、誘拐だろうとなんでもやります。……もし、あなたの大切な人が人質に取られたらどうするんですか？そんなことが言えますか？」

「……マリヤさん？」

「なんでもありません…忘れてください。…ふぅ、今日はこのくらいにしておきましょう。次にお会いする時は、もう少し現実的な意見を期待していますから。それでは失礼します。」

マリヤはこんなにも興奮を抑えきれず、顔を紅潮させていた。そんな自分に納得がいかないのかどうかは定かではないが、少しでも早く聖の元を去ろうと、足早に暗闇の中に消えていった。

「あ～あ、怒らせちゃったかな。」

一人残された聖は、そのまま脱力して、仰向けになってまた星を眺めた。涼しい夜風が、森を騒がしている。木々がそれに応えて、葉を踊らせているようだ。

「…それでも立ち向かわなくちゃ…自分の過酷な運命を、自分の転機に置き換えなくちゃいけないんだ。」

聖は空に向かって呟いた。誰に言ったわけでもない。自分に言った言葉なのかも分からない。ただその一言は、夜風に流され、森を彷徨うのだった。

一方その頃、王都ギルバードの宮殿の中、興奮した面持ちで、まるで発狂したかのように必死に走っている一人の青年がいた。すらりとした足と腕、短い茶色の髪、見るからに学者を連想させる服装だった。もしもゆっくりと歩いていたら、どれだけ優雅で宮殿に似合うのだろう。しかし、そんなことを言っている場合ではない。その青年は、急いで宮殿の一室に辿り着き、呼吸を落ち着かせ、身なりを持っていた手鏡で入念に確認した後、トントン…とノックをした。

「入ってよいぞ。」

「失礼いたします。」

その扉を開くと、大きな机に積み上げられた書類、部屋の半分を占めている本棚が目に入った。青年は、頭を下げ、胸の鼓動を抑えながら入った。

「ん…お主はイグリオートではないか。こんな時間に珍しいの。最近どうじゃ？学院の方は順調と聞いておるが。」

「はい、ゾシマ長老と国王様のおかげで、ラスルコフ学院もちゃくちゃくと実績を伸ばし、不肖イグリオート、今ではこの大陸一の学院であることを自負しております。そこで私は、最近生徒の引き入れ、監督、指導など無くてはならない重要な仕事に日々精を出しておりまし…」

「そ…それはともかく、今日はどうしたんじゃ？」

「ゾシマ長老のお耳にいれておきたいことが…先日この王都近くの町で、なんとつい最近精霊を手に入れた者が、初仕事で人間と精霊の悪霊を倒したという出来事がございまして。今日、無礼を承知でこちらに伺ったのは、この者をギルドから、我が学院の特待生として引き入れたいのです。その者は貴族ではなく、一般人ですので前例が無いことですから、そのための許可を…」

イグリオートは興奮のあまり舌がもつれ、早口で捲くし立てた。あまりの興奮ぶりに、イグリオートの頭がおかしくなったのではないか、とゾシマが疑うほどだった。

「…少し落ち着くんじゃ。確かにお主の情熱は人一倍強いのは知っておるが、なにもそう興奮せんでも。大体、珍しいケースではあるが、そこまですることがあるのかの？」

「そ…それもそうですが。何分、最近ではあのアヴィズムの動きも活発になってきておりますし、こういう人材は即座に確保しておかなくてはと思いまして…」

ゾシマの一言で冷静さを取り戻したのだろう。自分の先ほどまでの行為を、今さら恥ずかしくなったのか、言葉に詰まり、顔を隠すかのように下を向いた。その後、ゾシマは何か考え込むように黙ってしまったので、沈黙が部屋一帯を覆ってしまった。イグリオートは居たたまれなくなって、なんとか退出しようと、恐る恐る後ずさりをしたが、何か思い当たったのか突然ゾシマが声を発した。

「そやつの名は？」

「は…はい、聖という者です。精霊はメルシーという風の…」

「許可しよう。好きにするといい。面倒なことがあったら、わしの名を使ってよいぞ。…ただそやつの精霊には気をつけるんじゃぞ。凶暴じゃからな」

「は？…はい。誠にありがとうございます！不肖イグリオート、全身全霊でやらせていただきます。それでは！失礼しました。」

シグリオートはそう言って、まさに躍り上がらんばかりの足取りで、退出した。ここで、この奇妙な男、イグリオートについてもう少し詳しく説明しなければならない。性格を一言で表現するとするなら、一昔前の熱血教師という人種が一番当てはまっているだろう。おしゃべりで単純、また、彼には自分の思ったことを、常に最上のことと考え、考えるより先に手を出す、というより周りが諌めるほど、熱烈にそれを実行するの奇妙な特徴があった。さて、イグリオートが退出した後、しばらく書類を整理していたゾシマだったが、

その手を途中で止め、立ち上がった。そして、部屋中を歩き回り、しばらく思考に耽っていたが、思いたったように椅子に座り呟くのだった。

「しかし、聖も変なやつに狙われたもんじゃな…どうせ失敗するじゃろうが、あやつの言う事も一理あるの…アヴィズムか…わしも手を打っておくとするか。」

第十六話：夜空の下で

マリヤは森を抜け、そこに止まっていた馬車に乗り込んだ。馬が2頭、待ちくたびれたかのように、後ろ脚を唸らせていた。御者がそんな馬達の不満なんて素知らぬ顔で、無言でマリヤに会釈をした。マリヤは頭を少し下げ、ただ黙って、馬車に乗り込み、森の方を眺めていた。その顔には、困惑の色が見られ、じっと、まるで深い思考の闇に囚われているかのようだ。しかも、そんなマリヤに追い打ちをかけるかのように、馬車には、全身を黒で色取った、顔の真っ白な男があぐらをかいて、唇を不気味なほどに吊り上げていた。

「お～い。マ～リ～ヤ～。『咲かない花』と『萎れた花』。いや…それとも少しひねった『雪の結晶花』。ひひ、どれがいいと思う？」

「またあなたですか。私に馴れ馴れしく話しかけないで下さい。それと、付きまとうのもやめて下さい。」

「ひひひ、そんな嫌われたか。せっかく暇つぶしに、二つ名考えてやったのによ～。つれないよな。ところであの坊ちゃんは？勧誘行ってきたんだろう。」

「何度も言いますが、これは私の任務です。聖さんには、必要最低限のことは伝えました。」

「ってことは拒否されたか。ひひひ、そりゃそうだような。進んで真っ当な道から、横道それるってのが可笑しい。国家破壊工作を計画してる俺らに従うわけないんだよ。次は俺が手伝ってやる。お前や上の奴は、俺から言わせれば手ぬるい。ひひッ、俺ならどんな

奴でもすぐに引き込んでやるよ。お前みたいにな。懐かしいもんだよな～おい。」

「……。」

マリヤはこの異常な男には、何を言っても無意味だと悟ったのだろう。押し黙っていたが、その手には、もはや皺だらけになってしまった服をつかんでいた。その腕はかすかに震えていた。

「まだ根に持ってんのか？ひひひ、何度も言うが、あの頃の俺はまだ駆け出しだったからな～わざとじゃないんだぜ、依頼されたもんだしな。ひひ、そんなこと言っても無意味だろうがな。」

「…本当に私の両親は…」

暗闇のおかげで、マリヤは涙を流しているのか、こらえているのか分からないが、今にも消えそうなはかない声で呟いた。

「…いえ、何でもありません。一つ言っておきますが、私はあなたに対して何とも思っていません。それだけです…御者さん。行ってください。」

「……。」

御者は無言で頷くと、鞭を大きく振り上げ、見ている者が目をつぶりたくなるほど、思いきり馬の尻を叩いた。しかし、その鞭に打たれた馬は嬉しそうに駆けだすのだった。

（あの坊ちゃん、驚いたぜ…あのマリヤの感情を揺さぶってやがる…あんなこと…今まで全く言いだす素振りすら見せなかったのに

よ。アヴィズム入れるより、殺しちまった方がいいんじゃねえか…）

がたがたと揺れている馬車の中で、死神と命名された男は、その身に溢れる殺意を抑えながら、無意識に微笑を浮かべてしまうのだった。一方マリヤは、御者に指示を出した後、男と顔を合わせないよう努めながら、移りゆく外の様子を眺めていた。マリヤが男の纏う空気や様子が微妙に変化していたことに気付かなかったことが、のちにどうなるか…聖に何が起こるのかは…誰にも分からない。ただ夜空の月は、雲に覆われながらも依然として光輝いていた。

第十六話：夜空の下で（後書き）

短編みたいなノリで書いてみました。次回はもう少し長い分量で行きたいと思います。
しかし、最近ターシャが少ししか出てきてない気が…ヒロインなのに、怒ってばっかりだし…次回からもっと出していきたいな～って反省しています。
最後に読んでくださって本当にありがとうございます。もし一言感想を頂けるなら、凄い励みになります。

第十七話：休憩

「なんでいつもこうなの…」

大きな一軒家、聖の家の倍くらいはあるだろうその豪邸は、屋根は赤く、外壁は白一色で、太陽の光によって、輝いているようで、思わず目を奪われてしまいそうだ。その家の二階、子供の部屋とは思えないほど大きな部屋にターシャはいた。寝起きのようで、ベッドの上で目をこすっている。普段絶対見れないような無防備な姿をロムが見たら、一体どんな行動をとるかは想像するのも愚かなことだろう…しかし、ターシャは浮かない顔である。

「はぁ……」

ターシャはこの数日気分が悪かった。見えない影が後ろに絶えずくっついてくる…胸のあたりが締め付けられる…そんな感覚。いや、その原因は分かっている。しかし、だからこそ取り払うことができないのだ。

「なんでいつも聖につらく当たっちゃうんだろう…昔はもっと普通に接してたと思うんだけどな…最近じゃあ会うとなんだか興奮して…特に、あの精霊が出てくるようになってからは思わずむきになっちゃうし。」

ターシャは抑えきれないかのように、一人、ベッドの上で呟き始めた。細くて白い両腕で胸を抑えている。この悩みのおかげで、最近では夜も時々目が覚めてしまうのだ。とにかく落ち着きがないようでもあった。

「山賊退治だって、私が意地を張らないでついて行ってあげればよかったのに…あんな危ないこと…しかも悪霊に遭遇したって…死んでもおかしくなかった。それを、謝るどころか怒鳴りつけるなんて。」

夜明けが近づいてくる…太陽が顔を覗かせ始め、その光はかすかに残る闇と溶け合い、混じりつつ、闇を追い払っていくかのようだ。そんな朝日を、ため息をもらしつつ、一縷の望みを見出そうとしているかのように見つめるのだった。

「…そうよ。こんなの私らしくない…とにかく、聖に会って…謝ろう。けど、最近あいつ森に籠ってるのよね。はぁ…まぁ、いいわ。とりあえず、今日もギルドに行ってみようかしら。」

ターシャには聖のいる場所は大体見当がつくのだが、自分から森に行くのはまだ決心がつかなかった。いくらB級ギルドの凄腕といっても、まだ13歳の少女なのだ。この呟きは、その事実を実感させた。

聖が悪霊退治を終え、アミリヤに殺されかけた日から、五日の月日がたった。たったの五日がこんなにも長いものだなんて、誰が想像できただろう。聖は想像を絶する修行を、なんとか生き残っていた。これも、毎日の基礎訓練、アミリヤとの組み手、ターシャとの修行？のおかげだと、聖は実感せざるおえなかったほどである。

「今日はこのくらいだな。たまには休みをいれないといけない…らしい。私としては、このまま残り二日やりたいのだが…どう思う？」

メルシーは、聖に教えることが相当嬉しいらしく、どこから持ち込んだのか…恐らく悪のりしたアミリヤからだろうが、聖に修行をつけつつ、表と裏が真赤な、見るからに如何わしい本を熟読していた。今も木の下にたてかけてある。さて、メルシーの放ったこの一言がどれだけ聖を喜ばせたのかは、本人でなくては決して分からないだろう。仰向けに倒れていた体を無理に起こし、必死に賛成の意を示した。

「それがいい、うん。こんなんじゃ、体壊すって。大体、なんで風をやっと操れるくらいのレベルなのに、僕を崖に吹きとばして上がってこいだの、いきなりよけろって言って沢山岩を飛ばしてきたりで…あれ、よく死ななかったな…本当に強くなるの？」

「勿論だ。おかげで大分風を操れるようになっただろう？それに、本に書いてあるんだから間違いない。」

「…その本少し見せてよ。」

「だめだ。アミリヤとの約束だからな。どうしても見たかったら、アミリヤに頼め。とにかく、今日はここまでだからゆっくり休め。明日は倍頑張ってもらわなくてはいけないからな。」

聖は穴が開くほどメルシーを見つめたが、その嬉しそうな表情から察するに嘘ではないのだろう。メルシーはそう言って、ゆらゆらと風に乗りながら、本を夢中になって読んでいる。聖はさすがに何か言ってやりたかったようだが、諦めた。そんなことは、この五日間だけで何度あったことか。

「……。」

しかし、この五日で意外なことが分かった。メルシーは、読書が好きだということだ。聖の修行の合間に、アミリヤから渡された本以外にも、聖から適当な本を借りてむさぼるように読んでいた。聖としては、もう少し落ち着いた性格になってもらいたいとの願いだったのだが、悲しいことに今のところあまり変化は見られなかった。

「…じゃあ、僕はカミンさんのところに行ってくるよ。ターシャに連れてってもらって以来行ってないからね。」

「ああ、気をつけていけ。何かあったら風ですぐに知らせろ。」

「はいはい。じゃあね。」

聖は元気よく叫んで、家に向かって嬉しさのあまり一目散に駆けだした。その後ろでは、

「元気だな…あのくらいの体力があるなら、明日本当に倍にしてみるか。ふふ、楽しみだな。」

聖にとっては、ある意味死刑宣告と言っていい、そんな一言が呟かれていた。

「すみませーん。聖君いますかー？」

聞き覚えのある声、周りを一切気にしないその声は、どこまでも響いていくかのようだ。

「あら、レートニイ君。今日も来たの？聖は今…あぁ、あそこに

いるわよ。」

レートニイとアミリヤが家の玄関で話していた。アミリヤと目が合ってしまったので、何とか身振りをアミリヤに送り、面倒なことにならないうちにやり過ごそうとしたのだったが、そんな企ても、両手を顔の前で大きく交差させた聖の努力も、なにを勘違いしたのかアミリヤが聖の方に手を振り返したことにより、水の泡となった。落胆する聖とは対照的に、レートニイの方は、満面の笑みで駆け寄ってくる。

「よぉ、聖。久しぶりじゃんか！今までどこにいたんだよ。何回お前の家に行ったと思ってんだ。これから暇か？」

「え…っと、これからトロイカに行くんだ。悪いね。」

「その後は？なにかあるか。」

「特にないけど…」

「よし、じゃあ俺もトロイカ行くぜ。その後、ギルドに寄るからな。」

聖は最初の返答で断った気でいたが、レートニイは全く気付かずに、そのゆるそうな脳内では、聖と一緒にギルドに行くことが決定しているようで、聖は一瞬返す言葉が見つからなかった。

「いやいやいや…今日は疲れてるからさ。また今度一緒に行くって。」

「はぁ、何言ってんだよ。お前はもううちのチームの、準レギュ

ラーとして登録してあるんだから。それに、疲れてんならトロイカ行くの辞めればいいじゃん。それで解決。」

「…それはないから。はぁ…しょうがない…付き合うよ。それはそうと、何？準レギュラーって？」

「おお、よくぞ聞いてくれた。実はな、ターシャと俺の妹はいいとして、もう一人の奴が変わってて～最近何やってるかしらねぇけど、全然参加してくんないんだよ。だから、最近株価急上昇中の聖に白羽の矢がっ立ったっていうだけ。喜べ、親友。どれだけ他の奴らが入りたがったことか…」

「ないないない…他の人でいいならさ、その人達でいいじゃん。っていうか、いつから親友に…」

「あれ～そんなこと言っていいのかな～。君は有望の雑用…もとい新人として、目をつけられてんだぜ。それなら、俺らのとこに来た方がいいじゃん。感謝しろよな。今度何か奢ってくれてもいいぜ。」

聖は内心うんざりしていたが、なぜかレートニイが言うと、憎しみといった負の感情が湧いてこない。天性か才能なのか、なぜだか笑みが零れてしまいそうになのだった。

「それはないでしょ…まぁいいや、早く行こう。」

レートニイはまたもや笑いながら、聖は2度目の溜息を洩らしながら、二人並んで、トロイカの方へ向うのだった。

第十七話：休憩（後書き）

書き方を意識してみたけどどうでしょう…ただ最初に比べたら少し良くなったと自分では感じています。
何かご指摘や感想があったらぜひお願いします。

第十八話：久々のトロイカ

「なんだか、懐かしいな～。」

「そうか？俺は最近来まくってるぜ。今じゃこの店の常連さ。それはそうと、聖って金持ってんのか？」

「ん、ああ、持ってるよ。本当にギルドって儲かるんだね。…あ、ターシャに追及するの忘れてた。帰りにターシャの家でも寄ろうかな。」

「やめとけ、やめとけ。最近何か悩み事があるらしくてな。無表情だし、話しかけてもあんま反応ないしで今は近寄らない方がいいと思うぜ。…お前は別だろうけどな。」

聖が言葉を返そうとした瞬間、全く変わっていない小さな店の中から懐かしい声が聞こえてきた。

「おー！聖じゃないか。最近全く顔見せないから心配してたんだ。どうだい？調子は。なんでも強い悪霊倒したらしいじゃないか。……ん？何か今店が馬鹿にされたように感じたんだが…」

「久し振りです。カミンさん。気のせいじゃないですか？それと、悪霊っていっても僕一人で倒したわけじゃないので…」

「そうなのか？まぁいい。さぁ、入った、入った。今日はもちろん何か買ってってくれるんだろう？」

「おーい。カミンさん。俺もいるんだけど、俺は？」

「はっは。たまには品物買ってから言うんだな。毎日毎日、冷やかしか？少しは買って行けよ。」

「いや～俺は宣伝係りだから。金ないし。」

そう言って、無性に笑いたくなるような、楽しい談話をしながら、聖とレートニイは店の中へと入って行った。しかし、店の中は相変わらずよく分からないものが散乱していて、何がなんだか分からなかったが。軽い口調でレートニイがカミンをからかっている間に、聖は散策しようと辺りを見回した。そこで聖は奥の右側、壁に掛けてある四角い写真に目を奪われた。

「カミンさん。これってカミンさんの若い頃？」

「おお、そうだよ。まだまだギルドの現役で結構活躍したっけな～」

カミンは懐かしい時を思い出しているようで、目を少し細め、嬉しそうに語りだした。レートニイも、興味をひかれ、思わず写真を見に近寄った。

「まだ若いな～……この横にいる男の人って誰？チーム組んでた人？」

「まだって今でも十分若いだろうが…そうだな。お前らにも話しておくか。そいつは、俺のパートナーのアントラって奴でな。俺の一番の親友だった。本当にいい奴でな～何度助けられたことか…ハハハ、数えきれないくらいだ。というわけで、一つ忠告。もしもチーム組むんだったら、信頼できる奴と組まないと、絶対続かないぜ。

なぁ、レートニイ。」

「なんで俺に言うんですか？俺はちゃんと人を選んでますよ。なぁ、聖。」

レートニイは、写真から目を離して、聖に同意を求めるように、顔を覗き込んだ。だが、聖はカムイの言葉に感じた違和感に心を奪われたのか、黙っていた。

「聖？どうしたんだ？」

不審に思ったカミンが思わず、聖に視線を向け質問した。聖は申し訳なさそうに、目線をそらしたが、カミンの視線に耐えきれなくなったのか、おずおずと答えた。

「いえ…親友だったってことは…もう亡くなったんですか？」

「……。そっか。よく気づいたな。そうだよ。俺の親友は死んだ…いや、殺された…って言った方が正しいかな。」

「誰に？」

レートニイが興味に駆られて質問した。聖はそんなレートニイを諌めるように鋭い視線を投げかけたが、好奇心に駆られたレートニイには気付かなかった。

「…お前らは知らないだろうがもう４年以上も前にな、ある村が突然業火に包まれた…アントラは妻と一人娘、三人で一緒にそこに住んでいてな…悲惨な事件だった。アントラは結局妻と一緒にな…ただ、娘の遺体だけ発見されてないんだ。もしも生きのびているな

ら俺が保護してやりたいが…ま、ないだろうな。」

「でも、火事で死んだんでしょ？」

「いや…その妻はともかく、アントラのことはよく知ってるが、たかが火事なんかで死ぬ奴じゃない。それは断言できる。必ず犯人がいるはずなんだ。」

「犯人の目星はついてんの？」

「うーん…まぁな。けど、教えないぜ。聖はともかくお前は絶対言いふらすしな。さぁ、辛気臭い話はこれまで。聖。何を買う？武器とか欲しいだろ？」

「……そうですね。一応この不思議な刀がありますけど、抜けないんです…でもメルシー曰く、悪霊との戦いで相手の火炎を消したらしいんですけど…母さんに聞いてもよく分からないんですよね。」

そう言って、聖は背中に背負っていた黒刀を手に取った。いちいち持ち歩かなくてもいいのだが、背負っていないと妙に落ち着かなくなるのだ。なので、外出する時はほぼ必ず背負い、メルシーに散々文句を言われたが、今では修行中でも背負っている。

「どれ…見せてみろ。」

カミンは刀を受取り、抜こうとしたが抜けないので、丁寧に鞘の部分を色々と調べていたが、特に何も見つからないようで、首をかしげ、ぶつぶつ呟き始めた。しばらく考え込んでいたが、結局何も分からないようで聖に黙って刀を返した。

「分からん…俺も色々な武器を扱ってきた自信はあるが、こんな抜けない刀なんて初めてだな。…火炎は気のせいじゃないか？とりあえず、違う武器…少し大きいが、このサーベルでいいか。これから大変だろうしな。とりかえてやろう。これも一応もう一回調べてみるよ。」

「……うーん。いや、この刀はおじいさんのだし。サーベルは買いますよ。その方が…うん……」

聖が決心してサーベルを受け取ってみようとしたのだが、突然頭に何か言葉が響くのだった…

≪こ…のうつ…け、わらわ…そん…なも…同格？絶対…いや…じゃ。わら…わ一人で…≫

突然の出来事に、聖は膝をついてしまった。カミンは慌てて、聖傍に寄り添う。レートニイも、何事かと目を見開いた。

「おい！聖。どうした。貧血でも起こしたか？」

「いえ…大丈夫です。はは、僕おかしくなっちゃったかな…サーベルはやっぱりいいので、それ以外に何かありますか？」

「お…そうか。じゃ～、この指輪は？値段は高いが、風の属性専用の珍しい指輪でな。確か…精霊の力を引き出しやすくするための紋様が刻まれている…だったかな？」

「！それでいいです。よし、これなら後二日生き残れる。」

突然物騒なことを言い出す聖に驚いたカミンだったが、何も言葉

を発しなかった。とりあえずそっとしておくことにしたのだろう。なにやら同情の面持ちで、聖の持っていた金貨と指輪を交換した。

「聖〜。もう買い物すんだ？そろそろギルド行かない？」

「え〜っと、そうだね。とりあえずいいかな。じゃあ、カミンさん。また今度。」

「おう！また来いよ。それから、レートニイ…また何も買わないのか？その上聖を急かすなんて…もしかして、本当に冷やか…」

「…え〜違いますよ。それじゃ、俺は用事があるんで…さよなら。」

レーニニイは、指輪を眺めていた聖の腕をガシっと強く掴み、大急ぎで駆け出して行った。その様子を見たカミンは、やれやれといった感じで溜息をついた。そのまま、二人が出て行った後、悲しいことに客もいないので、品物の整理をしていたカミンだったが、なぜ先ほどあんなことを、まだ子供の二人に話してしまったのか疑問に思うのだった。

「…あいつがこの町に来てるってことが分かったから、浮かれちまったかな…くそ、俺らしくもない…まぁ、いいさ。それより早くあいつの居所をつかまないとな…気がかりだった聖もやって来たし、あいつもとりあえず大丈夫そうだ。じいさんの指令もあるからな、店はとりあえず休業にしとくとするか。」

普段と同じ口調…だったが、明らかにさっきまで二人と話していたカミンとは別人の深く、暗い仮面をかぶったもう一つの顔がそこにはあった。

第十九話：喜び

「なんで買わないの？実は暇つぶしに行ってるとか？」

「おお、よく分かったな～聖って、さり気に鋭いよな。実際最近暇人なんだよ。ターシャは不機嫌だし、妹は冷たいしさ、もっと兄を敬えっての。」

「一人で仕事すればいいのに…」

「面倒くさいじゃん。」

聖は呆れた表情で呟くのだったが、レートニイのさも当然といった顔で断言するのを聞くと、笑うしかなかった。内心、一人で働けよと心底思ってしまうが、そんなことを言ってもこの男には無意味だろう。

「レートニイって、賢いのか馬鹿なのかよく分からないよ。」

「はぁ、何言ってんだよ？天才に決まってんだろ。」

この自信はどこから一体どこからくるのか？恐らく一生聖には分からない。ある意味でこの性格は見習ったほうがいいのだが、聖が同じことを言ったら甚だ可笑しく…間違いなくアミリヤが大爆笑するだろう。

「はいはい。そういえばギルドになんの用事があるの？」

「ああ。実は今度の仕事をどうせなら聖に選んでもらおうと思っ

てな。聖にしたら、初のチームでの仕事なんだ。それくらいサービスしてやるよ。」

「何？僕の今度の仕事、レートニイ達とチーム組んでやることが決定してんの？」

「当然だろ。わざわざ選ばせてやるんだから喜べよ。まぁ俺最近仕事やってないから、いい加減やらないとやばいっていうのが本音なんだけどな。」

「それはレートニイの個人的な理由じゃんか…何だかやりたくなくなるんだけど。」

「それより着いたぜ。さっさと入ろう。」

至極最もな聖の意見だったが、レートニイは素知らぬ顔と聞き流していた。さすがの聖もこの態度には少々の苛立ちを隠せなかったが、レートニイは聖の様子を気にする風でもなく、ドアを開けた。時刻は昼頃だったが、未だに多くの人がうろついている。

「へぇ…結構人いるんだね。仕事探してんのかな。」

「馬鹿、何言ってんるんだよ。こいつらは情報収集に来てんの。仕事なんかうようよしてるけど、最近ありえない場所での悪霊の出現が頻発に起こってんだ。さすがに命に関わるからな。事前にしっこく調べる奴が多くなってる。」

「げ…最悪。メルシーが知ったらなんていうか…想像するのが恐いな。」

「お前の会った暴虐の火竜なんて、その最たる例だぜ。どこに現れるか、とにかく分からねぇ。そもそも、同じ悪霊が広範囲に現れては消えるなんておかしな話だよな。」

「そのおかげで運よく暴虐の火竜を倒せたんじゃないか、君はとにかくついていたよ。」

その人物、ロムは高価なタキシード、手には白い手袋を身につけ、辺りには香水の香りが充満している。聖とレートニイは、あまりに場違いなロムの服装に呆気にとられていた。そのままロムが二人の方にあの高慢な笑みを漏らしながら歩いてくるのと同時に、周りの人間が海辺の波が静かに引いていくように、無言で一斉に離れていく。どうやら聖の予想以上にロムは嫌われているようだ。

「あ、どうも。ロンさんですよね？」

「……。」

周りのざわざわとした喋り声が消える…レートニイはもちろんロムでさえ時を忘れたように黙っていた。当の本人もこの状況を理解できず、何が起きたのか分かっていないのが、表情から丸分かりであった。

「ぶはッ…くく、腹痛ぇ。聖マジで言ってんの？ロンじゃなくてロムだろう。お前は昔から人の名前とか覚えんの苦手なんだな～まぁ、発音は似てるけどよ。」

レートニイの発言を口火に、皆一斉にクスクスと笑いだした。これが男だけの状況なら、ロムもまだ我慢できただろうがその中には女性も混じっている。一部の笑い上戸の女性が手を口に当てて、必

死に笑わないようにしている姿が妙に可笑しく、それだけでまた笑いを引き起こしそうだ。

「…僕の名前はロム・グルポフだ。ふ、僕を挑発しようとしているのが丸見えだが、そんな幼稚な手は食わないよ。」

ロムは周りに自分の平静な姿を見せ、あたかも子供のいたずらであるかのように言い切った。しかし、その顔は見るからに赤く染まり、最初に見せた笑顔すら消えていた。もしもここに聖以外誰もいなかったら、すぐさま聖に殴りかかっていたことが容易に察することができるだろう。

「…あれ、す…すみません。本当に間違えました。あと、暴虐の火竜をロムさんが狙ってたのに倒してすみません…」

慌てて詫びて、頭を下げる仕草にまたもや周りが笑いだす。ここではどんなことをやっても、笑いを引き起こしてしまうかに見えた。まるで酔っ払いが意味もなく人の行動を笑うかのようだ。最もこの笑いの原因は、常に威張っていて傲慢なロムが、こんな少年にしてやられているのが、今笑っている連中にとって嬉しくてたまらないのだ。

「そ…それじゃあ、また。」

この状況を脱するために、未だに笑っているレートニイを片手で引っ張りながら、恥じるようにギルドの中を進んでいった。

聖達が消え去った後、ロムは周囲を無言で睨みつけた。もう笑う者はいない。皆われ関せずといった具合に散っていった。

「くそ。今に見てろよ。」

ロムは壁を思い切り蹴った。その顔にはただ屈辱に対する怒りしかない。そのまま壁に背を向け、ギルドを出て行くことにしたのか、いつもより数段早い歩調でドアを開けて外に出ていった。

しかし散らばっていった者とは違い、一連の様子をこっそりと興味深く眺めていた一つの影がそこにはあった。

「ひひ、あいつ使えんそうじゃねえか。」

その影はそう呟き、周囲には全く気づかれずに、抑え切れない笑みを浮かべながらロムの後を追うのだった。

一方、必死にあの場を逃げた聖は、一息ついた後ようやく仕事を探しにかかり、じっくりと壁にはられた紙を眺めていた。

「聖〜Bランクでもいいんじゃねえか？お前なら大丈夫だって。」

「だから、無理だって何回も言ってるじゃないか。とにかく、Cランクから探すことにする。これが嫌なら、僕は一人でやるから。」

「ったく、頑固な奴だな。やっぱり俺が選んでおけばよかったぜ。言っとくけど最初だけだからな。……あれ。おーい、ターシャじゃん。お前もこの頑固者になんとか言ってくれよ。」

（このお調子者…なんで気配消してたのに気づくの？本当に無駄な才能よね…後で一発殴ろうかしら。）

ターシャは二人に事前に気づいていたのだが、これはチャンスだと思う気持ちと、離れたいと思う二つの気持ちが心の中で争い、決着がつかず、しょうがなく気配を消して様子を見ることにしたのだが、先ほどの通り見事レートニイに見つかってしまった。あの出来事の後、ほぼ五日ぶりの聖との対面である。どういう風に話しかけていいのか分からなかった。

「なに？どうしたの。」

仕方なく呆れた風を装ってレートニイの呼びかけに応じたターシャだったが、自分の心臓の鼓動がはっきりと聞こえてきた。なぜこんなに興奮するのか本人にすら分からない。一歩一歩、足元を確かめるようにゆっくりと近づいていく。幸い聖は仕事探しに夢中で気づいていないのか、ターシャには目もくれない。が、その聖の様子に少なからず胸が締め付けられたように感じるのだった。

「聖に言ってやってくれよ。今度の仕事さ、せっかく選ばせてやるのにCランクにするなんて言い出すんだぜ。」

「あら、そう……」

一応返事はしたが、ターシャの視線は今話しかけてくるレートニイではなく、聖に釘付けになっていた。そこで、ようやくターシャに気づいた聖が視線を向ける。

「あれ、ターシャ…」

（なに？まだ怒ったこと気にしてるのかしら…どうしよう。謝ればいいのかな…けどこんなこと今まで何回だってあったことなのに、何で今回に限ってこんな変な気持になるの…）

「あのさ、ターシャに一つだけ言いたいんだけどさ…」

聖の表情が真剣なものへと変わり、その目がターシャに向けられた。その瞬間、ターシャは今までにないほどの変な気持…圧迫感というのだろうか、心臓が激しく鼓動し、それが全身を覆い尽くす。

（もしかして…私は聖のことが…いえ、それはないわ。こんな情けない奴…最近少しはかっこいいけど…でも…）

「本当にお金に困ってんの？無理やり何十回と奢らされたけど、実はお金をけちって貯め込んでいるとか？」

「は？」

ターシャはあまりに予想に反した聖の質問に、反射的に出てきた言葉以外何も言えず、聖の顔をただじっと見つめていた。

「はぁ…本当に鈍いよな聖は。いいか？ターシャはお前を怒鳴りつけて以来、お前に嫌われたんじゃないかって心配ばっ……」

神速…まさにその一言でしか言い表せない。いつの間にか聖の横にいたレートニイは豪快な衝撃音と共に、壁の下、隅の方で気を失っていた。後何故か分からないが、聖は冷や汗が止まらなかった。それだけのことが、その一瞬で起こったのである。

「え…どうしたのターシャ？レートニイと喧嘩でもしてたの。」

「なんでもないわ。可笑しなことを言うお調子者にイラついただけ…それより聖。さっきなんて言ったのかしら？誰がけちなの？」

人間…いや動物が生まれ持って備えている本能、もしくは直感、それらが聖の脳に直接警戒信号を送っている。言葉を慎重に選ばなくてはいけない…ひとつでも選択を間違えれば、死しか待っていないのだから。

「なんでもない。うん、何も言ってないから気にしないで…仕事は後で選ぶことにするよ。それじゃあ…」

どうやら聖は一にも二にも離脱を図ったようだ。未だに白目をむいているレートニイを横目に見たが、生きているかも分からない。いつターシャの理不尽な攻撃がくるかもしれない状況では、とにかく逃げるしかないのだ。

「待ちなさい。」

ビクッ…聖の体が硬直する。金縛りにあったかのように指一本動かせない…僕の人生ここまでかな…悪霊に初めて遭遇した以上の恐怖を心の底から感じてしまうのだった。

「…なに？」

「…た…たまには私がご馳走してあげようとしてるんだから、勝手に帰ろうとしないでよ。」

「え？…どうしたの…ターシャらしくない気がするんだけど。」

「！！聖のギルド登録のお祝いも何もしてなかったし…前も怒鳴っちゃったし…とにかく、文句言わないの。行くわよ。」

ターシャは一息で全てを言いきった。そのためか、顔は紅潮し、息も荒い。何故こんな突拍子な行動をとってしまったのか、自分が信じられなかった。ただ聖は怒っていないし、気にしてもいない。その事が久しく感じていなかった安心感をターシャに与え、心に重くのしかかっていた暗い得体のしれないものをを消し去ったことは確かだった。

「??本当にどうしたんだ…さっぱりだ。」

聖は首をかしげながら歩き出したターシャの後ろをついてくる。それだけのこと。それだけのことが、今のターシャには嬉しいのだ。

（本当に私、どうしちゃったのかしら…でもいいわ。今はすっごく全身が軽いし、気分がいいもの。）

もしもターシャが知らない本心を知っている者がいるとしたら、隅でピクリとも動かないこの男なのかもしれない。人の気持ちなどおかまいなしのこの男が、わざわざ不在だった聖の家を通いつめてまで、聖をターシャのいるギルドに連れてきたのだから。

第十九話：喜び（後書き）

今回書くのが遅れてしまいました。そろそろテスト週間なんで、ちょっと掲載間隔が長くなってしまうかもしれないです…すみません。今現在、これからの流れや文章の書き方を少し考えようとか思ってます。今までの作品の感想や評価など、すごく参考になりますので、ぜひお願いします。

第二十話：日常

今聖の家の前に、一つの皺のないスーツを着込み、緊張した面持ちで目の前にあるドアを見つめながら、ある決意に燃えている男が立っている。この人物にとっての必須アイテムである鏡で綺麗に整った髪形は、横風を浴びてもビクともしない。この頑強な髪の毛は、本人の今の気持ちを具現化しているかのようだ。

トントン…その男が呼吸を整えた後、ゆっくりとノックをした。そのまま直立不動で目を閉じている。

「はーい。」

アミリヤが客の来訪に気づき、返事をする。この男の姿勢が緊張のためか、つま先からてっぺんまでが一直線になったようだ。背筋が、まるで純粋な子供が姿勢を直され必死にその状態を維持しているのに似ている。

「あれ、どなたですか？」

「初めまして。私の名前はイグリオート・カシスと申します。実は、あなた様の息子さんである聖君を、我が学院ラスルコフに特別生としてご入学していただけたらと思いまして。」

「あら～そうなんですか。わざわざご苦労様です。私は昼食の準備がありますので失礼しますね。それでは。」

ガチャ……イグリオートにとって、まさか数秒で扉を閉められ、その上断られるなんて夢にもよらなかっただろう。さっきとは違う

意味で固まってしまい、呆然としていた。

「す…すみません。ちょっと待って下さい！あのラスルコフ学院ですよ？未だに貴族や王族しか通えない超エリート学院、費用は学院の方で負担しますし、学院の寮もありますから経済面でも通学面でも不自由なことは……」

イグリオートは必死になって、ドア向こうにいるアミリヤに説得を試みた。顔は焦燥感で満ち溢れている。それもそのはず、わざわざ最高権力者に了解をとり、休暇まで貰って首都からやってきたのだ。これで失敗だなんてことになったら、イグリオートの面目丸つぶれである。それだけは何とも避けたいに違いない。

アミリヤは不機嫌そうな表情をして、嫌々ドアを開けた。

「うるさいわね。もうお断りしたはずですけど？」

「何故！せめて理由を教えて下さい。」

「そうねぇ…聖が行っちゃうと寂しいからかしら。一応本人にも話してみるわ。でも、確か学院は１６歳からじゃなかったかしら？」

「いえ、それは高学年のほうでして、この学院は低学年と高学年に分かれています。低学年の方は１５歳までで、高学年は…」

「分かった、分かった。今シチュー作ってるのよ。後で本人には知らせるから、今日はこのくらいにしておいて。」

そう言って、顔を真っ赤にして説明しようとしているイグリオートを軽く足払い、興味なさそうな態度で会話を打ち切り、家の中へ

と消えてしまった。

「なんでだ……」

イグリオートはガクッと両膝を地面につけた。顔は生気の抜けたみたいに白くなっている。先ほどの人物とは信じられないくらいだ。しばらく立ち直れず、迷惑にも聖の家の前で落ち込んでいたイグリオートだったが、急に立ち上がった。

「…しかしあきらめるわけには。聖君を学院に入れること…これは私の使命なんだー！」

アミリヤの取った行動はある意味完全に裏目に出てしまったようだ…さらなる決意を胸に、イグリオートは走りながら、この場を後にした。

その頃聖とターシャは…意識不明のレートニイを置き去りに、ギルドを後にしていた。

「どこに行くの？」

「私の家よ。そこでご馳走してあげるわ。」

「…ターシャって料理できたっけ？昔散々実験台にさせられたんだよな…別に無理しなくてもいいから、どこか別の飲食店にでも行かない？」

聖の記憶にある限りでは、ターシャの料理をおいしいと思ったことは一度もなかった。いや、むしろまずかったという記憶しかない…それでも拒むことができず、無理やり食べさせられた。その事を

知ったアミリヤに、よく幸せ者と冷やかされたものだ。本人にしてみたら、どこが幸せなのか全く分からない。なぜあんなまずいものを沢山食べさせられて幸せなのか…聖にはこのような考えしか浮かばなかった。

「無理…ですって。私に不可能なことなんてないわ。それに聖に料理してあげた頃よりも、ずいぶんと腕を上げたのよ。そうね…いい機会だわ。たっぷりご馳走してあげる。」

ターシャは至極ご機嫌なのか、鼻歌を歌いながら、気落ちする聖をよそにどんどん先に進んでいく。

「ちょ…ちょっとターシャ。えっと…僕が奢るからさ、違うところに行こうよ。ターシャの家ここから時間かかるしさ。確か近くに美味しい喫茶店があるって聞いたことが…」

「うだうだうるさい！いいから黙ってついてきなさい。あとそうねぇ。食材買わなきゃ…聖は何か食べたいものある？」

「…別になんでも。」

「何を食べたいの？」

ターシャが口調を強めた。どうやら聖の態度に、少々ご立腹のようである。歩くのを止め、聖の方を振り向いた。

「…ターシャさんの得意な料理ならなんでもいいです。」

「そう。じゃ…肉を使った料理にしようかしら。」

料理名を言わないのが、聖は恐ろしかった。料理ができる人が、その経験に基づいてオリジナルを作るのはいいが、出来るかどうかも分からない人が作るオリジナルが、どんな味をもたらすのか…聖の感じる恐怖はもっともかもしれない。

ターシャは馴染みの食品店で、肉や野菜を大量に買い込んだ。勿論聖は荷物持ちである。しかし、ターシャと一緒にいると、ターシャの人気がよくわかる。怖い人相のおじさんも、ターシャには破格の安い値段にするし、通り過ぎる人の大多数は振り向くのだ。そのうちの何人かは聖を見ているのだが、自分のことに疎いので気づく様子は全くなかった。

自分が見られていること気付かない聖に、ターシャは思わずため息がでてしまう。（本当に聖って鈍い。けど以外に有名なのね…まぁ、あの精霊や悪霊の件だと思うけど、それでもなんだか多い…）

「どうしたの？早く行こう。」

何も知らない聖は、気楽なものである。ギルドに入る以前、人の注目を集めたことがないのだから当然なのかもしれない。ただ、ターシャにとって昔から地味な幼馴染、聖が一部の人たちの中で人気者になっているのは、少し気に食わなかった。まるで、自分の手から聖を盗られてしまうかのようで…

「そうね。もう買いたい物もないし…行きましょ。」

「っていうか本当に重いんだけど…こんなに食べられないし。」

「別に全部を料理に使うわけじゃないわよ。母さんに頼まれてた物もあるし。」

「…へぇ、だからこんなに重いんだ。だったら少しは持ってくれてもいいんじゃないか？」

聖の両手は、ターシャの買った食材でふさがっている。一歩足を前に出すのも一苦労だ。聖は震える手で片方の荷物をターシャの前に差し出した。

「私は女の子だから。」

その荷物を一目見ただけで、あっさりと断った。それだけではなく、顔には満面の笑みを浮かべている。

「…鬼だ。なんでこんな目に…」

聖はターシャに荷物を持ってもらうという希望を、完璧に粉砕された。どこが女の子なんだと声を張り上げたいが、言った瞬間レートニイの二の舞を味わうことになる。それだけは何としても避けたいのか、大人しく従っていた。

そのまま歩くこと数十分、やっとターシャの家に辿り着いた。だが、これは聖にとって終わりではなく、始まりなのである。

第二十話：日常（後書き）

テストの一つの山を越えたので、少しですが執筆しました。
さっき作品を読み返してみましたけど、本当に下手です。せめてもう少し読みやすいように…なんとか頑張ります。
読んでくださってありがとうございました。評価、感想がありましたらよろしくお願いします。

第二十一話：母と料理

聖は両手に荷物を抱えながら、やっとのことでターシャの家に辿り着いた。相変わらずの豪邸で、大きな庭は少しも変わらず、気持のよさそうな芝と多様な木々で見事に彩られていた。ターシャの家に来るのは久しぶりで、聖は懐かしさに胸が一杯であったが、この感情の中に含まれる、恐怖という感情を幸か不幸か拭い去ることができなかった。

「ただいま。」

ターシャは何気ない素振りで靴を脱ぎ、真っ先に台所に向かった。

「お邪魔します…」

聖は家に入る一歩を踏み出すのに気が進まなかったが、恐る恐る靴を脱ぐ。

「おかえりなさい。…って聖君?」

家の中から、とても一人の子供を育てているのか不思議に思える程の、若い女性が顔を出した。この女性の名前はローラ。言うまでもないがターシャの母親である。顔がそっくりで、背はターシャより少し高く、その体つきは大人の女性そのものであった。また、その態度はターシャに比べ上品で、聖から見ても女性の魅力という点ではターシャは数段劣っているだろう。

「はい。お久しぶりです。」

「まぁ！やっと来てくれましたね。もう…全然来てくれないから嫌われたかと思いましたよ。さぁさぁ、上がってください。」

心底嬉しそうにはしゃぎながら、聖に優しく微笑みを向けている。だが聖はローラが何となく苦手であった。ターシャはともかく、見るからに女性の魅力に溢れたローラに色々と話しかけられるのは妙に照れくさいのである。まぁそれ以外にも理由は山ほどあるのだが…

「お邪魔します。」

聖は急いでターシャの元に逃げようと、そそくさと避けるようにローラの横を通り抜け、台所に向かおうとするのだが、その手をローラが掴む。

「…えっと、なんですか？」

聖の質問に、ローラは聖の耳元に小声で話しかけた。

「ごめんなさい、でも本当に久しぶりなのに、なんだか素っ気ないようですけど？」

「そ…そんなことないですよ。それに、今日はターシャがご馳走してくれるからってことで来たの…で」

「そう？あの子にしては珍しいわ。そんなに積極的だなんて…もしかして…うふふ、聖君はうちのターシャと付き合ってるの？」

聖が返答に困っていると、奥で顔を真っ赤にしたターシャが、怒りの形相でこちらを睨んでいた。しかも、明らかに聖の方を睨んでいる。

「ちょっと…」

ターシャが口火を切った。無言で聖とローラの方に歩いてくる。

「ん…はぁ、もう少しだったのに…じゃあ聖君、またあとでね。」

ローラはターシャの顔を見るなり、平然とした表情でその場を後にして、悠々と庭の方に逃げて行った。ある意味さすがはターシャの母親、大物である。

「はぁ、助かったよターシャ…ローラさんにも困ったもんだよね。」

やっと解放された聖は安堵の表情でターシャに語りかけたが、未だにターシャは聖を睨んでいる。無論、聖は何故自分が睨まれているのかが分からない。ただかなり居心地が悪いのは確かだった。

「なんでお母さんと手を繋いでたの？聖。」

「なんでって…あれは逃げないようにって、いきなり手を掴まれてただけ…」

その瞬間、聖はあの状況が再び脳内によみがえった。（そういえば、何で腕じゃなくて手を掴んだ…じゃない、握ったんだろう？しかも小声だったしあの体勢は…僕がローラさんを連れていこうとしてるみたい…だったかもしれない…かも。）

「あぁ、そういうことか…ターシャ違うって、勘違いだよ。」

なんとか弁明を試みようとした聖だったが、今のターシャには聞こえていないようだ。無言で聖の首にそっと手を伸ばす。

「次…お母さんとあんなことしたら…分かってるわね？」

その顔は、輝くような笑顔であった。もしも聖以外の男にこの顔を見せたら、たちどころにターシャの魅力のとりこになるだろう。しかし、聖の顔には恐怖の為か阿修羅にしか見えない。

「りょ…了解です。以後気を付けます。」

「それならいいわ。じゃあ、リビングでくつろいでていいから。少し待ってなさい。」

どうやら聖は命拾いしたようだ。ただ聖の体中から出ている冷や汗は止まらないようだけれど…聖は大人しくリビングで待つことにした。リビングに入ると、家具の置き場所が変わったくらいで、目立った変化はない。ほとんど昔のままである。高級そうな木の香り、高い天井、毎日掃除されているのだろう、埃一つない。窓からは、色彩豊かな庭が見える。風に揺れる木々や葉の音が、聖を落ち着かせるかのようだ。

「綺麗でしょ？毎日大変なんですよ。」

「そうですね…全然変わってないで…」

いつの間にか聖の横にはローラが座っていた。思わず聖は後ずさりをしてしまう。こうも見事に気配を消せるとは…天然なのか修練の賜物なのか、いずれにせよ聖は全く気づくことができなかった。

「ローラさん…いつの間にそこに？」

「最初からです。聖君全然気づいてくれないから待ちくたびれちゃっいました。ところで、さっきの話の続きなんですけど、どうなんです？」

「どうなの？ってなにがですか？」

「ターシャと付き合ってるかどうかに決まってますよ。あの子が自分の手料理を食べさせに、わざわざ食材まで買って、家に招待するなんて聖君くらいのものですよ。」

「あぁ、それはお祝いを兼ねてるらしいんですよ。ギルド入りの。」

「でもここまでのことをやるなんて聖君くらいだし…って聖君、本当にギルドなんて入ってしまったんですか？今からでもいいから辞めた方がいいわ。ターシャは何度言っても聞かないし…」

ローラは心配そうな暗い表情を見せる。いつもは何を考えているのかイマイチつかめないが、聖はローラの考えていることがすぐに分かった。ローラは母親として、娘が命の危険を伴う仕事をしているのが不安でたまらないのだろう。

「ターシャなら大丈夫ですよ。この町のギルドの中では最強クラスの実力ですから。」

聖が気落ちしているローラに慰めの言葉をかけるが、ローラは聖の顔を覗き込むように見つめるだけで、何も言わなかった。

「それにギルドの間では人気者らしいですよ。ファンクラブもあるとか…ターシャはしっかりしてるし、僕よりよっぽどたくましいですよ。」

「たくましい…そうよ、そこなのよ。」

ローラは聖の言った単語を、俯きながら不気味に繰り返し、ぶつぶつ唱えだした。まるで敵を呪い殺すためのものであるかのように。全身から負の感情が発せられているかのようだ。

「…えっと、ローラさん？」

「お嫁に行き遅れたらどうしよう…」

「……。」（そっちですか…）

どうやら聖の考えは的外れだったようだ。まぁ、心配と言ったら心配な点だが、どこが違う気がする。やはりローラさんは計り知れない…そう実感する聖だった。

「だって…あの子顔は可愛いから彼氏の一人や二人いてもおかしくないはずなのに、素振りすらみせないのよ。しかも、趣味が料理とか裁縫じゃなくて修行なのよ。さらには、女の子のはずなのにギルドで最強で聖君よりたくましいのよ。本当に心配だわ…聖君…もしターシャがお嫁に行き遅れてしまったら、どうかお願いね。」

「…僕には無理です。」

「あなたなら大丈夫。私が保証するから。」

「お母さん…何を言ってるの。」

泣いている振りをしているローラを横目に、ターシャは料理を終えたのか、両手で料理の乗ったお皿を抱えていた。見るからに呆れ顔である。その話は聞き飽きたと言わんばかりであった。

「何って…あなたのことを思って言ってあげてるのに。」

「それ、前に家にきたレートニイにも言ったでしょ。その後大変だったんだから…余計なお世話よ。お母さんはどっか行ってて。」

「聖君は私の中では大本命なのよ…まぁいいわ。邪魔者は退散するわよ。後は二人きりでどうぞ。私はアミリヤさんのとこにでも行ってくるわ。」

何故か意味ありげな笑みを浮かべながら、軽い足取りでそのまま出て行ってしまった。ターシャは少し顔が赤く染まったように見えたが、何も言わずに黙々と料理をテーブルに並べ始める。手伝おうとした聖だったが、身振りで何もするなと制されてしまった。あくまで聖は客として扱うということなのだろう。

「さぁ、どうぞ。」

とうとう出されたターシャの料理。聖の目の前には…よく言えば大胆な料理…の品々が広がっていた。

第二十一話：母と料理（後書き）

表現が難しい…全然文章が下手で、迷ってたら投稿遅くなってしましました…
読んでくれてる人には申し訳ないんですけど…とりあえず今はこんな感じで精一杯です…
うまくなるよう、頑張って書き続けます。

第二十二話：蠢く闇

ロムは聖と出会ってからギルドを後にし、一人自分の家に向かって歩いていた。時刻は昼。人通りの多くなった道のりが、今のロムにとってどうしようもなく鬱陶しかった。早く家に帰りたい。家に帰れば自分の言うことを何でも聞く召使いがいる、何でも許してくれる母親がいる。家では、父親についで自分は最高権力者なんだという、極めて子供じみた、傲慢な自負がロムにはあった。

「くそ…聖め…せっかくターシャと二人きりの時も邪魔しやがるし、それに今日も…どれだけ僕に屈辱を与えれば気が済むんだ…あの悪霊が聖を殺していれば…」

今のロムにあるのは、聖に対する醜い嫉妬と愚かな羞恥心だけであった。暗い影が、ロムの心を包んでいる。貴族の家に生まれ、両親の過保護な育て方とエリートとしての教育が、彼を一際自尊心の強い、性根の曲がった心の持ち主にしてしまったのだろう。

そんな中、ロムが人通りのない狭い路地にさしかかったのを見計らい、気配を押し殺した死神が口を開いた。

「ひひ…これはこれは…貴族の坊ちゃんがそんな口汚いこと言っちまっていいのか？」

体中が底冷えさせる声がロムの耳に響いてきた。咄嗟に声のする方を振り向き、地面を蹴って距離をおいた。ロムにとってこんな不気味な声を聞いたのは、生まれて初めてであったからか、すぐに臨戦態勢をとる。

「……君は誰だ？」

「何をそんなにビビってるんだ。ひひ、聞いた話じゃあ、この町では名が知られているんだろう？」

ロムは必死にその不気味な黒装束の男を睨みつける。しかし、相手が薄ら笑いを浮かべ、ロムとは違い戦う姿勢を全く取っていないのにも関わらず、ロムの頭の中には勝つことができるとは微塵も思えなかった。その男は何も構えず、ゆっくりと歩きながら間合いを詰めてくる。

「来るな！君は何者だ？僕の質問に答えろ！！」

「うるさい…な。今ここで死にたいのか？」

「…答えろ…僕を舐めるな…舐めるな！僕はロム・グルポフ。神に選ばれた貴族の人間だ。」

その男に言われた一言で、完全にロムは逆上し、冷静さを失ってしまった。あらん限りの迫力で男を睨めつけながら、その身に付けた手袋を外す。そして、その両手を前方にかざし、意識を集中させた。その瞬間、場の空気がより密度を増したように感じられた。

「偉大なる大地。その地は眠る。今ここに悠久の力。片鱗を見せよ。我に従い、我以外の全ての者を引き砕け。」

ロムの右腕から、土の精霊が顔を覗かせた。その姿はミミズのようで、色は茶色くサイズは中指くらいであった。しかし、姿を見せたと思いきや、すぐに土の中に潜ってしまった。

（勝った。馬鹿な奴め…黙ってこっちを見ているなんて、この攻撃で死なない奴なんていやしない。）

この攻撃に、ロムは絶対の自信を持っていた。ここでロムの右腕から出てきた精霊は、はっきり言えばミミズの精霊であり、その姿は決してロムの好むものではない。よって、ロムの攻撃は、はったりの言霊を唱えながら、精霊を見せないようにそっと地面に忍ばせ、下から不意打ちするという類のものであった。その精霊の力が、ロムの実力に比例したものであれば、一生Bランクには届かなかっただろう。

その男の周囲、道幅6メートルの地面が突然沈み始める。無論、その下は土でできた槍が真っ直ぐに伸びていて、落ちてくる相手を一突きにするのだ。落ちていく男を卑屈な笑みで見送りながら、その穴にすぐさま駆け寄り、死ぬ様を見ようとしたロムだったが…そんな子供だましの戦法、死神と称される男には通用するはずがなかった。

駆け寄ってすぐ、ロムの右腕に激痛が走る…服が真っ赤に染まり、鮮血がゆっくりと地面にほとばしっていく…その瞬間、恐怖で発狂したかと思えるほどの悲鳴があがった。右腕の傷口を、左手で抑えたまま、両膝をつく。その男は、気味の悪い笑みを浮かべ、悠々とロムの後ろに立っていた。

「うるさい。ひひ、本当に死ぬか？」

その一言で、ロムは完全に戦意を喪失してしまった。体が動かず、逃げられる気がしないのである。また、もし動けたとしても逃げ切れないという、根拠はないがはっきりとした確信があった。

「そうそう…やっと大人しくなったか。安心しろ、皮一枚しか切ってねぇから、そのまま抑えてればそのうち血は止まる。いいか…とりあえず俺の話を聞くんだ…な～に、お前にとってもいい話だよ。聖が憎いんだろう？」

「……そうだが…それと僕と何の関係が…」

その男は黙ってロムを舐めまわすように、じっと見つめていた。ロムは蛇に睨まれているかのようで、男の方を直視することは到底できそうになかった。ただ俯くだけである。すると、男の表情が満足なものへと変貌した。

「実はな…俺の入ってる組織アヴィズムが、優秀な若い人材を集めているんだ…そこは、選ばれた特殊な奴しか入れないんだが…お前を入れたくてよ。」

「…アヴィズムって…確かこの国で暗躍してるテロ組織のはず…そんな組織、僕は入りたくない…」

「いや、暗躍をしているのは一部の人間だけでな、実際はエリート達の間で裏の情報交換が行われているだけだ。そこには、お前のような前途有望な若い奴が必要なんだよ。そこで、お前か聖かを組織に入れるって話があるんだが、俺はお前の方がいいと思ってな。」

「……。」

（話に食いつき始めたな…ひひ、こういうタイプの人間は扱いやすいぜ。少しほめてやれば、すぐに調子に乗ってくれるし脅しにも弱い。しかし…皮一枚切ったくらいであの反応…実戦慣れしていな

い証拠だ。しかも、あんな何の力も感じない言霊なんて唱えやがって…ひひ、こいつは使い捨て決定だな。」

ロムが興味を持ち始めていることを確信した男は、ロムの左ポケットに一枚の紙を押し込んだ。ロムの視線がそこに釘付けになる。どうしたらいいのか戸惑っているようだ。

「とりあえず、紙に書いてある通りの時間に会いに来な。言っとくが、これが最初で最後だぜ。後…ひひ、もし逃げて俺に恥をかかせたら…分かってるよな。」

それだけ言うと、男はロムから離れ、建物の影に溶け込むかのように姿を消した。少しの間、あまりのことに呆けていたロムだったが、正気を取り戻し急いで辺りを見回したが誰もいない…これは幻なのか。しかし、ロムの左ポケットには依然として、粗雑に押し込まれた紙の切れ端と、血は止まっているが微かに残る痛みと恐怖がこの現実を物語っているのだった。

第二十二話：蠢く闇（後書き）

ちょっと横道にずれました。次回は本筋に戻ります。いよいよクライマックス！っていう展開が全然見えてこないです。
もしかしたら、第二部とか続いちゃうかも…しれないです。読んでくれてありがとうございました。

第二十三話：昔話と聖の明日（前編）

「もう…無理…そもそも無理…」

聖は心身ともに疲れ果てていた。こんな状態でも、小声で呟くあたりが聖らしい。聖の目の前には、まだまだ多くの料理が今か今かと、聖を待ち構えている。ターシャの料理は、よく言えば大胆であるが…悪く言えば単に丸ごと調理しただけであった、よく分からない獣が丸焼きにされて横たわっているし、野菜も包丁で切られてはいるが…形はバラバラで、異様に大きかったり小さかったり…非常に食べづらい。

（これって…料理なのか…何も無い山の中で、遭難中に食べるなら分かるけど…家でこれは…無理。）

「どう？おいしい？」

こう聞かれて不味いと答える程聖は命知らずではない。実際、不味くはないようだが、おいしいかと聞かれれば、返事に困ってしまうのだろう。聖は少し戸惑ったが、なるべく笑顔で返事をした。

「おいしい、けど…ターシャ、これって昔と変わらなくないか？」

「そういえばそうね…けど、あの頃は実験で色々辛子とか入れてたけど、今回は普通に作ったから、別に食べれるでしょ？私としては、うまく作れたと思うわ。」

「実験か…こっちは命がけで…いや、はは、嘘だってなんでもな

い。じゃあ、ターシャも一緒にこの料理しょぶ…食べてくれ。」

「馬鹿ね。私が聖のご馳走食べてどうするの。言っとくけど、食べ終わるまで帰さないから。」

（…いじめ…だろ、これは…僕一人でどうやって…。）

ターシャの作った料理はまだ半分以上も残っていたが、聖は最早限界である。その証拠に、聖の顔は少し青白く、食べる手は止まっていた。だが、この料理を作ったコックの方は不満気な表情だ。テーブルの向い側に座っているが、少し眉を寄せ、黙って聖を見つめている。ターシャが声に出さなくても、聖には幼いころからの付き合いで気持ちが伝わってくる。聖には選択権が二つしかない。…料理を食べるか、ターシャの手で死ぬか…。

まぁ、聖が一度として死んだことはないが、ターシャはギルドに入ってから急激に身体能力、攻撃力が上がっていた。その結果急所、死角からの攻撃など、聖の不幸が増えたのは確かだった。

「ターシャ…さん。僕お腹一杯で…もう限界なんですけど。そもそも、これは一人で食べられる量じゃ…」

「…別に残してもいいわよ。」

（嘘だ…）

聖の直感は恐らく正しい。ここで残して帰っても、後日ターシャがどんな無茶を言い出すか…進むも地獄、引くのも地獄である。

「…そう言えばさ、ターシャの父さんって今も都に勤めてるの？」

仕方なく聖は強引に話を変え、時間を稼ぐ。せめてローラさんが戻って来てくれれば…一種の賭けであり、事態が悪化するかもしれない。だが、食べられない以上他に手段が何もないのも事実だった。

場所は変わり、ここは聖の家。聖の帰りが遅いことに怒りを感じ始めたアミリヤが、久し振りに出会う来客に、目を見開いていた。

「久しぶりね、ローラ。二度と来ないとか言ってなかった？」

「さぁ、どうだったかしら。それより、少し話したいことがあるの、お邪魔してもいい？」

にっこりと微笑みながら、ローラはアミリヤを見つめ返していた。その気品溢れる姿は、まるで貴族階級の人間であるかのようだ。しかし、アミリヤは嫌そうに顔を曇らせた。ターシャと聖の関係から分かるように、この二人の付き合いは意外と長い。気質は正反対だったが、性格が似てい為か、ターシャがギルドに入る前は、度々二人で食事をすることもあったぐらいである。

ふぅ…アミリヤらしくない、軽い溜息を吐き、渋々ローラを家の中へと招き入れた。ローラは一言も喋らずに、案内されるまま、部屋の椅子に腰を落ち着かせる。それを横目に、アミリヤは慣れた手つきで紅茶をいれ、ローラの前に置いた。

「あら、ありがとう。あなたの紅茶も久しぶりね。」

紅茶の香りを楽しみながら、カップに入った紅茶を口に入れる。紅茶の香りが、静かに部屋に漂ってくる。このまま、優雅に紅茶タイムを過ごせればよいのだが…二人の放つ緊迫感が、それが起こり

えないことを語っていた。

ローラが飲み終わるのを合図に、アミリヤが口火を切った。

「今日は何？ターシャちゃんのこと？」

「それもあるわ。…あの子に訓練をつけるなんて…聖君には秘密みたいだけど、どうしてなの？」

「前にも言った通りよ。あの子が望んだから。ローラだって私が物好きだからわざわざ教えてるなんて、思ってるわけじゃないでしょ？だから止めることができない。私にもね。念のため言っておくけど、聖には秘密よ。女同士の約束だから。」

「そう…ターシャは強くなったわ。あなたに憧れてね。」

「ターシャちゃんには、本当に感謝してる。聖が今みたいに明るくなったのも…ターシャちゃんのおかげだから。」

「ねぇ…聖君に昔何があったの…あなた達がここに住んでから6年経つけど、未だに教えてくれないのね。あの時の聖君の黒い目…私には怖かったわ。まるで…生きることに絶望してるような、感情の感じられない…あの目が。」

第二十四話：昔話と聖の明日（後編）

ローラは言葉を発するのを止め、目をそっと瞑った。いつにない真剣な表情、しかし、その様子は恐怖に囚われているのではない。むしろ過去の自分を悔いているように感じられた。

――今から六年前、ちょうど今日のような晴れた日の午後、アミリヤと聖は引っ越しの挨拶にやってきた。驚くほど若そうな母親、短い髪が風のそよ風を浴びて揺れていて、その明るく活発そうな瞳に、思わず魅入られてしまいそうだった。そのアミリヤが手を握りながら連れてきた少年は、綺麗な金色の髪が太陽の光に反射し輝いて見え、育ちの良さそうな印象を受けたが、アミリヤに促され、俯いて下を向いていた聖が顔を上げ、目を合わせた瞬間、漆黒の目…自分を貫く鋭い視線に体が硬直し、何の言葉も出なかった。その様を、悲しそうに微笑みながら、お辞儀をするアミリヤ、何の感情も感じられない聖…

ローラが目をつむった仕草を見たアミリヤは、今も悲しい笑みを浮かべていた。

――ローラが恐怖を感じるのも、仕方のないことだとアミリヤは思った。でもしょうがないのだ。聖のせいではないのだから。あの子は被害者なのだから。私よりも…誰より一番辛いのだから…

「ローラは…。」

「何？」

アミリヤの言葉に反応して、ローラは目を開け、申し訳なさそに表情を浮かべていた。その表情に、少し胸を痛めるが、聖の過去を話すわけにはいかない。自分の心に誓ったのだ。例え親友だろうと、友達だろうと親だろうと…聖の悲しい過去は、ある一つの約束と共に、胸の奥底に死ぬまで封印することを。

「…いえ、何でもないわ。そういえば、あの頃の聖に話しかけてくれたのは、ターシャちゃんぐらいだったわね。やっぱり子供の純真な心って凄いわ。何を話しかけてもうわの空だった聖が…今じゃ、普通の子と変わらないもの。」

「そうね…礼儀正しいし、しかも、本当に凛々しくなって…将来が楽しみ…なんだけど、あんな乱暴なターシャと結婚…してくれるかしら…」

「またそっち？大丈夫よ。ターシャちゃんは満更でもないと私は踏んでるわ。問題は…根性無しの息子にあるのよ。全く…困ったものね。」

だが、聖のことを語るアミリヤの表情は明るく嬉しそうだ。思わずつられてローラは柔らかい笑みを漏らしてしまう。昼の温かい日差しが、今のアミリヤの胸の内を表しているかのように感じられた。ローラは同じ母親として、言葉にできない親近感を覚えたが…何かを忘れているような…不快な何かが胸の片隅に残っていた。

「あ…だめよ。早くターシャにギルドを辞めるように説得するか、ギルドから追放するかしてくれない限り、私、許さないから。」

ローラは険しい表情でアミリヤの目を見つめる。だが、その仕草は逆に愛らしくもあり、迫力は皆無といって良かった。まぁ、アミリヤには効果的なのかもしれない。ローラが言い出した瞬間から、面倒そうに溜息を吐いていた。さもうんざりしているのは明らかである。

「ま～だ言ってる…いい加減諦めなさいよ。この不毛な問答も、何回繰り返したことやら…子供じゃないんだから。しかも、追放って…」

「…それもそうだけど……。」

「…そもそも、私じゃ無理よ。諦めなさい。それより、今日は何の用？」

「え…と、そう、ターシャと聖君を二人きりにさせるためもあるけど、聖君のことよ。今までこの町から出るのすら禁止させるほどの過保護だったのに、何でギルド入りを許したの？」

「あんたに過保護と言われる日が来るとは…無性に腹が立つわね…。」

アミリヤは椅子から立ち上がった。そして、そのまま窓辺の方に歩み寄り、空を見上げた。雲一つ見当たらない綺麗な空…この空の下での平穏がいつまでも続けばいい。だけど…時間はあっという間に過ぎていく。あんなに小さく頼りなかった聖が、自分を残して、聖が旅立って行くように…

「約束…したから。」

同じ青空の下のもと、聖は…危機に瀕していた。ターシャとの雑談に花を咲かせていた聖だったが、状況は一向に良くならない。時間をおいて一口…また一口を料理に手をつけていくが、３０分前から依然として減る気配を見せなかった。

「私、少し料理の後片付けするから。」

ターシャは一人、席を立ち食器を片づけ始めていた。聖が食べ終わった料理の食器を広々とした台所に持ち運び、水で洗い始めた。このまま帰りたいところだが、そうはいかないだろう。聖はテーブルに顔を沈めて、突破策を必死に考えるが何も思い浮かばなかった。

「眠い…寝ちゃおうかな…」

今の聖には窓から注ぎ込まれる風が、なんとも心地よかった。その微風が聖の耳をくすぐったかと思えば、弱く小さな渦を巻き始める。次第に風の渦は風速を増し、どんどん大きくなっていく。しかし、突如渦が霧のように消えて、そこには小さな精霊が佇んでいた。

「聖、遅いぞ。読む本が無くなった。他にはないのか？」

「……なぜ…ここに？」

一縷の望みと共に、ローラを待っていた聖だったが、まさかメルシーがやってくるとは…夢でも見ているのかと思ってしまうが、少し顔を脹らましている不機嫌そうなメルシーの様子は、急速に聖を現実に引き戻す。夢など見ている時間は全くないのだ。なにせ…メルシーとターシャの仲は…最悪なのだから。絶対ここで合わせるわけにはいかない。

「前に言わなかったか？私と聖は魂が繋がっているんだ。意識を集中させれば聖の居場所など簡単に知ることができる。それで…ここは何処だ？それとこれは…昼飯か？」

「…知り合いの家です…豪快な人でさ、全部食えってしつこくて、全部食べたら本屋行って、何か好きそうなの買ってきてあげるから、お願いだから先に家に戻っててくれ。」

「……よし、私も行く。この料理が無くなればいいんだろ？」

聖は不安そうにメルシーを見つめた。何か嫌な予感が…ある意味で的中。ターシャ作の料理が次々に風を纏い、中に浮かび始めた。ターシャが見ていたらと思うと恐ろしいが…こちらの様子に気づいていないようだ。ターシャが食器を洗う音が聞こえてくる。メルシーは浮かびあがり、口を大きく開けた。その瞬間、信じられない勢いで料理がメルシーの口の中に押し込まれていく…

「おかしい…なんで入るんだ？しかも、明らかにメルシーの口より大きいのに、全部一口で食べてるし…」

聖を脅かし続けた料理が消え去るのは一分とかからなかった。疑惑の念はつきなかったが…聖がようやく解放されたのは確かだった。だが、その現実に聖は未だに呆然としている。

「……まずい料理だな…まぁいい。よし、聖、早く行くぞ。お前が買ってくれるんだろう？」

子供が見せるような屈託のない笑みで、メルシーは聖の袖を引っ張っている。聖はお礼とばかりにメルシーの頭を撫でながら、メル

シーがなぜこんなに嬉しそうなのか理由を考えたが、

（本がそんなに欲しかったのか…）

としか思い浮かばなかった。アミリヤが呆れるのも無理はない。後はどうやってここから出るか…それだけだが…すぐにこの場所から逃げるしか手ないだろう。

「ターシャ！僕全部食べたから。本当に。一人で。だから、もう行くね。じゃあまた！」

ターシャの返事を待たずに、辛そうだが無理をして、まっしぐらにメルシーを連れて家を飛び出した。その迅速ではない速さ…こういう時に風の力を借りるのもどうかと思うが…

「聖？あれ…全部食べ終わってる…早すぎ…もっと居てもよかったのに…うーん…けど久し振りに話せたし、いっかな。」

不審に思ったターシャだったが、意外にも上機嫌なようだ。こうして聖の貴重な休日はあっという間に過ぎていく。時も人も交差していく。当然、水面下で闇もうごめいていく。これからどんな未来が待っているか…今は、明日からの二日間、聖がどのような地獄を見るかしか分からない。

第二十四話：昔話と聖の明日（後編）（後書き）

感想なにかあったら、一言でいいのでお願いします。励みになります。

第二十五話：レートニイ＋α登場

あれから二日、ギルド禁止期間の一週間が過ぎ去った。だが、聖はというと…部屋のベッドでぐっすりと寝込んでいた。静かな寝息をたてながら、頬を緩ませ幸せそうな表情だ。それもそのはず、昨日でやっとメルシーの特訓は終わったのである。今日からギルドの仕事を行うことは可能だったが、聖にその気は全くないようだ。

ベッドの横の壁に貼られたカレンダーには、一週間後に小さな赤丸と一言書き添えてある。

＜ギルド開始かも＞

どうやら、このまま最低一週間はのんびり過ごすことを計画しているようだ。事実、メルシーにはさらに二冊の本を買い与えることで、ギルドに行くのを伸ばしてもらってあった。これで万全と思っていた聖だったが、不覚にも一人の男の存在を忘れてしまっていた。他人の都合などお構いなしのあの男を。

「すいませーん！！聖君いますかー！」

ドアのノックする音と共に、こんな朝から大音量の声が響いてきた。その声だけで見事に聖の安眠は妨害されてしまう。聖は寝ぼけながらも、反射的に意識を外から聞こえてくる声に集中させた。

「おはよう。レートニイ君。聖は寝てるわよ。…そうね、ちょうどいいから起こしてきてくれる？」

「お安いご用です。実は、俺今日聖君と約束してるんですよ。だ

からすぐに……」

…してないぞ！思わず心の中でつっこんでしまう。しかし、聖の心の叫びなど無視して、階段を上がる足音が聞こえてきた。しかも駆け足で迫ってきているようだ。声同様に足音がやかましい…

（母さん…レートニイを起こしに来させるなんて…普通追い返すとかさ…もっとこう…なにかないのかな。僕疲れて寝てるんだよ。）

ガチャッ…レートニイがドアを勢いよく開け放った。静寂…聖の部屋には、息遣いの音もしなかった。ただ…ベッドの上の毛布が人型の膨らみが見えるだけである。軽く辺りを一瞥し、そのままの足取りで聖のベッドの毛布に手をかけ、掛声と共に力の限り引っ張ったレートニイだったが…まだ温かいぬくもりがあるだけで、聖の姿は見えなかった。

「あり…聖は……やば、逃げたか。」

レートニイは念のためベッドの下を手探りで探した後、溜息混じりに呟いた。

「ふぅ…絶対レートニイに捕まったら、仕事やらされるからな～。とりあえず、帰るまで森で時間つぶそうかな。」

聖は手に刀だけ持って、寝巻き姿のまま窓から逃亡を図り、家の裏側で静かに佇んでいた。刀を手に持ったのは、反射的に手が伸びてしまったのだろう。あまりに今の格好と不釣り合いである。

「でも風の精霊の力って便利だな～。二階から飛び降りても全然平気だし。これは、メルシーの特訓の賜物だな。」

実際聖は、毛布を少し内側から人型に膨らましたり、着地の際風のクッションを即座につくりこの難を逃れたのであった。

今の聖の能力…メルシーが傍にいれば話は別だが、大気に漂う無数の風の精霊、簡単に言えば実態化のできない力の弱い精霊の力を、聖の意思である程度自在に操れること。メルシーと魂の契約を行ったからこそできる芸当であり、メルシーの精霊としての力が高くなければ、決してできないだろう。つまりは、何の契約も交わしていない精霊を扱うことになるのである。

この信じがたい能力を、聖はわずか一週間たらずでものにしたのである。まさに異才。その聖の姿を、さらに後方で驚きの表情で眺めていた者がいた。素人目には決して分からない。その力の片鱗を。

「嘘…精霊の姿も見えないのに。…さっすが、聖お兄ちゃん…でも…私の方が強いもん。…よし、試してみよう。絶対逃がさないからね。」

またもや、朝から聖の災難は続く…

第二十六話：レートニイ＋αの正体

聖は一人、森の中を歩いていた。メルシーの姿は見えない。恐らく、聖の意図を察してくれたのだろう。今頃本を読んでいるか、アミリヤとお喋りしているかのどちらかだ。最もアミリヤとの会話は、大抵アミリヤの一方通行で、会話は成り立っていなかった。メルシーが心を開いているのは、未だに聖だけなのだ。

「ふぁぁ…眠い…。」

聖は眠そうに大きな欠伸しながら、自分の好きな場所である巨大な木の下に向かっていた。そこでもう一眠りすることにしたのだろう。聖はその場所が好きだった。この町に引っ越して来た頃に見つけた秘密の場所。一目で気に入ってしまった。冷めた心が、風で揺れる葉の音と、暖かい日差しで緩やかに安らいでいく…人の温もりを感じているようで落ち着くのだった。今でもこの場所を知っているのはターシャとメルシーくらいのものだ。

「まったく…レートニイめ、せっかく気持ちよく寝てたっていうのに。」

途切れ途切れにレートニイへの文句を並べているが、憤りより諦めの気持ちの方が大きいようだ。重い足取りで、森の奥へと歩いて行く。

「……なんだろう…この奇妙な感じ……背筋がむずむずする…」

聖が独り言をつぶやいた正にその瞬間、地面から何体もの人の形をした土の人形…その大きさは、一体一体が聖の倍ほどであった。

次々と聖の周りに現れ、あっという間に周囲を埋め尽くしていく。

「…なに？これ…悪霊って感じもしないし。…見るからに頑丈そうなのが…約十体くらいかな…うわぁ…強そう。」

まるで他人事のように、寝ぼけた両目で眺めていた聖だったが、その土の巨人は急に意思を持ったかのように、一斉に襲いかかって来た。聖にようやく緊張が走る。かのように見えたが、

「…倒すのは無理そう…どうしようかな。」

相変わらずやる気はないようだ。目を瞑り、意識を集中させ始める…その目前には、今にも襲いかかってきそうな土の巨人の姿があるが、完全に意識から除外し、聖は風に身をゆだねていた。森の中を優しい微風が駆け巡る。

「…見っけた。」

瞬間、聖の姿はそこから消え去り、左後方の木の後ろにいた人影の首筋に、手に持っている黒刀を突き詰める。

「お前は誰…ってちっさ。しかも、女の子？」

聖の目の前には、金髪の綺麗な髪の毛を、二つに分けた活発そうな少女がいた。どうやら唖然とした様子で声が出ないようだ。その小さな口を開けたまま、微動だにせず固まっていた。聖もてっきり実行犯が男だと思っていたが、実際は聖の肩辺りしか背丈のない、幼い少女だとは思いもしなかった。なので、思わず目を見張ってしまい、手に持った黒刀を無意識に下げてしまう。

「……え～っと、相手を間違えたかな…うん…多分この子はただの迷子だろうな。でも、さっきの土人間の動きは止まってるし…やっぱり、この子だよな…」

「…なんで…エルナがここにいるって…」

「ん…っと、風の精霊達に教えてもらったって言った方がいいかな。周囲の人影を探してくれって頼んだんだ。精霊が僕に伝えたいことは、何となくだけど感じることができるから。」

「そんなことにも使えるんだ…はぁ…今日は武器も持ってきてないし、とりあえず降参。そして…合格！！よかったね、聖お兄ちゃん。拍手拍手～」

エルナは無邪気な笑みを浮かべながら、手を合わせて拍手をし始めた。この金色の髪…青い瞳…人懐っこそうな態度…聖はどこかで会ったような、そんな奇妙な感覚を味わっていた。だがどうしても思い出せない…思い出したくないような…そんな複雑な感情が入り混じっていた。首をかしげ、エルナを凝視していたが、いつの間にか拍手の音が増えている。その増えた音の方を向くと…

「ハハハ、おめでとう聖君。君は改めてレートニイチームの準メンバーだ。いや～もしエルナにやられたらどうしようかと思ったけど、余計な心配だったな。っていうか聖。俺って凄くね？この綿密な作戦。名づけて＜聖。お前はもう逃げられない大作戦＞は。この周到な二段構え。俺ってやっぱり天才だな。」

明らかに得意げな表情で、二人の方に歩いてくる。その満面の笑みが、聖には無性に腹が立ってきた。こんな馬鹿げたことに、朝の貴重な時間を取られているのかと思うと、軽い喪失感…自分が情け

なくなってくるかのように感じられた。

「どうした？黙っちゃって。自分の不甲斐なさを悔やむ気持ちも分かるが、そんなのは後にしてギルドに行くぞ。実は、俺もの凄い情報を手に入れたんだよな～マジやばいぜ。かなりの報酬が期待できそうなんだ。特別にやらせてやるからさ。一緒に来いよ。」

「エルナはレートニイお兄ちゃんいらないと思うな～後はエルナとターシャお姉ちゃんと聖お兄ちゃんに任せて、家に帰っててもいいよ。後で一割報酬あげるから心配しなくても大丈夫。」

「ちょ…待て待て、この話を持ってきたのは俺だぞ！？なんだ一割って？どうせお前は前みたいにしらばっくれるだろうが。絶対俺も行くからな。」

「え～～」

「実の兄に向ってなんだ！その来なくていいのになみたいな態度は！」

「みたいじゃなくて…来ないで。いらないから。」

「……はっきり言うな…なんだかへこんできた…おい聖。俺って必要だよな。」

エルナの侮辱のこもった視線に耐え切れなくなったのか、急に聖に助けを求めてきた。どうやらレートニイはエルナに嫌われているようだ。まぁ、この年頃の兄弟なんてそんなものだが…聖は返事をしなかった。いや、したくなかったのだ。巻き込まれたくない。早く家に戻って寝たいという考えしか聖の頭の中にはなかった。そん

な聖のそっけない態度にショックを隠しきれないレートニイだったが、すぐに立ち直り再び聖を促し始めた。

「まぁいいや。早く着替えて支度してこいよ。言っとくけど逃げられないからな。俺はしつこいぞ。」

「…嫌というほど知ってるよ。うーん…僕の方こそ別に必要じゃないと思うんだけど。」

「必要だよ！！聖お兄ちゃんはちゃんとした戦力になるよ。絶対。エルナが保証するから、お願いだから一緒にやろう？ターシャお姉ちゃんも、聖お兄ちゃんだったらいいよって言ってくれたもん。」

必死に聖を説得し始めるエルナだったが、その様子をレートニイは思わず可哀そうと思ってしまうほど、萎れた表情で呟いていた。

「妹よ…なんだ…この差は。そんなに聖が必要で俺はいらないのか…」

「こんなの放っておいて、早く行こうよ。ターシャお姉ちゃんも待ってるから。そうだ。レートニイお兄ちゃんの分け前を半分…」

レートニイは珍しく真剣な面持ちで、続きを言おうとするエルナの口を後ろから手で塞いだ。エルナが何とか手を放させようと暴れているが、単純な力比べならレートニイに分があるのだろう。すぐにもがくのを止め、大人しくなった。

「ハハハ、聖、そういうことだから。三十分後にギルド集合な。言っとくけど、逃げたらターシャが絶対怒るぜ。楽しみにしてるみたいだったからな。それじゃあな。」

「むー…武器があれば負けないのに…」

そう言って、レートニイは文句のありそうなエルナを強引に連れて、駆け足で森を後にした。

「…ターシャが怒るって…脅しだ…しょうがない。後でメルシーに何て言おうかな…」

聖は朝から何度吐いたか分からない溜息を、もう一度吐きながら、一人呟くのだった。

第二十六話：レートニイ＋αの正体（後書き）

感想を貰えたのが嬉しくて、思いつくままにですけど、すぐに書き終えてしましました。
やっぱり感想を貰えるのは嬉しいです。最近このままつまらないのに書いてていいのかな～とか思ってましたけど、やる気を起こさせてもらいました。メールでの感想。本当にありがとうございます。

第二十七話：日常終焉

「どうした？聖。仕事は一週間後という約束ではなかったのか。」

メルシーは、聖の思ったとおり一階のリビングで、のんびりと座りながら本を読んでいた。エルナよりも小さなメルシーのその大人びた威圧的な口調は、あまりに似合わなかった。メルシーの外見は、まだほんの４～５歳なのだ。聖の予想通り、メルシーは疑惑のまなざしで聖を見つめていた。その澄んだ目は、聖の今の状況を何もかも見通しているかのようだった。

「まぁまぁ…なんでも凄い仕事の情報を仕入れたとかレートニイが言ってたしさ。ターシャもいるし、多分楽勝だって。」

聖は恐る恐る慎重に言葉を紡いでいった。だが、聖の口からターシャの名前があがった瞬間、メルシーの表情はさらに険しくなっていった。

「……あの女と一緒に仕事をやるのか？私は反対だ。その情報とやらも、怪しいものだしな。」

「うーん…そう言えばそんな気もする…まぁ、ともかく僕は行かなくちゃなんだ。メルシーはどうする？無理強いはしないけど。」

「…寝ぼけているのか？お前が一人で行くなど、私が認めるわけがないだろう。私も行く。こんなこと、いちいち確認させるな。」

如何にも心外だとばかりに、メルシーは手に持っていた本をパタンと閉じ、おもむろに立ち上がった。その様子を黙って眺めていたアミリヤは、嬉しそうに微笑んでいた。聖とメルシーなら、どんな事態が迫ってきても問題はなさそうだ。確信はないが、そんな気持ち胸の奥から溢れてくるのだった。

「聖をよろしくね、メルシーちゃん。気をつけて行ってきなさい。」

アミリヤは、いつものように笑顔で聖とメルシーに声をかけた。メルシーはアミリヤの方に視線を向けたが、声を発さずにただ少し恥ずかしそうに頷くだけであった。

メルシーからなんとか了承を貰った聖は、すぐに二階に上がり、カミンの店から購入した黒装束を身にまとい、黒刀を背中に背負った。

「やっぱりこの服を着ると、気分が引き締まるな。戦闘は嫌だけど…」

聖はギルドに入る前から、悪霊や犯罪者と戦うかもしれないという意識はしていたが、どうしても相手を傷つける行為に、慣れるとも思えなかったし、慣れようとも思わなかった。黒刀が鞘に収まったままでも、これなら人を殺すことなく戦うことができると思い、秘かな安堵を覚える自分がいるのにも気づいていた。

これからのことを思い、カミンの店で他の剣を購入しようとしたこともあったが、聖は今では買わなくてよかったと思っている。自己満足の偽善だと分かっているが、自分の気持ちに嘘はつけなかった。

「はぁ…レートニイのことだから、危険な仕事なんだろうな…悪霊の大量発生…か…なんだろう、最近この町…いや、この国がおかしくなってきた気がする。アヴィズムって組織と関係があるのかな…ってしまった。カミンさんに色々聞いておくべきだった…マリヤにもあの日から会ってないし…うーん…」

今聖がいる国はギルバート王国であり、何十年も前はただの小国だったが、ある日を境に、圧倒的な武力を背に、近隣の大国をわずか数年で支配下に置いてきた。支配と言っても、圧政や過酷な税の取り立てなどは一切なく、その国の支配者階級である王族、貴族を処罰しただけで、その統治をなんと王族や貴族に不満を持つ国民の中から決めるという異例の措置を取ったのだった。無論、その国の軍の解散、武器の回収という相手の牙と爪を剥いでからの措置であったが、当時の国王のカリスマ性と手腕、その部下達の尽力によって、見事に功を奏し、武力を背景にだが表面上はなんの衝突もなく、速やかに統治がなされていった。

しかし、現三代国王、名をエルゴム・ハードが国を統治するようになってから、小さな石が坂道をゆっくりと転げ落ちていくかのように、だんだんと不穏な動きが明らかになりつつあった。現に、友好国であった東の商国ポルト共和国との戦争の噂が、静かに…だが、確実に広まりつつあった。このままでは、後三年以内に戦争が始まるだろうという声もある程である。

「聖、まだか？」

しばらく思考の世界に入り浸っていた聖だったが、いつの間にか後ろにいたメルシーの呼びかけで、ひとまず考えるのを中止した。

「考えてもしょうがないか…分かった。すぐ行くよ。」

頭の中ではどうしても釈然としなかったが、これからどんな運命が待ち合わせているかなど、現実に迫ってこなければ決して分からないということを聖は理解していた。

運命とは、常に理不尽さを兼ね備えながら、日常という平穏の隙間から襲いかかってくるのだから。

第二十七話：日常終焉（後書き）

久々の更新です。

第二十八話：仕組まれた罠

聖は朝日が燦然と輝いているのを眩しく思いながら、ギルドへと足を運んだ。最近では、外を通るたびに、通行人や知らない人に顔をまざまざと見られるということが増えてきていた。聖は内心奇妙に思いながらも、素知らぬ風を装っていた。実は今、町では聖の噂が絶えないのだ。悪霊を一人で倒したという無名の少年は、恰好の噂の的なのだろう。

聖はギルドの扉を静かに開ける。左右を見回し、レートニイの姿を探していた。ギルドの中は、相変わらず人で賑わっていた。眉に皺をよせ何かを熱心に読んでいる年配者や、何かを熱心に話し合っている若い男達など、常に何かしらの事件が起こっているような、そんな落ち着きのないざわめきが感じられた。

「おーい！こっちだ聖。」

聖よりも先に見つけたレートニイは、大きく手を振りかざしながら、聖に大きな声で呼びかけた。聖がそちらに目を向けると、四角い丈夫そうなテーブルを囲んで、椅子に座りながら不機嫌そうにオレンジジュースを飲んでいるエレナと、隣の椅子に座り、退屈そうに肘をテーブルにつけ顔を両手で支えているターシャの姿があった。

「おそいぞ聖。後でなんか奢れよな。」

「早く早く～」

レートニイと笑いながら聖に話しかけた。エルナも聖の姿を見つ

けると、立ち上がりテーブルに身を乗り出して、聖にこっちに来るようと手を振っていた。ターシャだけは、肘をつくのをやめただけで、ただ黙っていた。

「何言ってるんだよ全く…こっちこそ何か奢ってもらいたいんだけど。」

聖は真っすぐレートニイ達の方に歩き、小言を呟いた。

「はは、冗談。俺が奢るわけないだろ。とりあえず座れよ。」

レートニイは指で自分の隣の椅子を聖に勧めた。肩をすくめ、仕方なく聖は腰をかけた。メルシーは何も言わず、聖の左側に浮かんでいる。だが心なしか機嫌はあまり良くないようだ。明らかに聖の左側に座るターシャを意識していた。無論、それはターシャも同じであった。

「よーし、これでレートニイチーム全員集合だな。いいか。これから仕事の内容いうから、心して聞くんだぞ。」

立ち上がったまま、意気揚揚とレートニイが嬉しそうに声を発った。だが、その肝心のチームメンバー達の方はというと、

「おい、聖。これはいつ終わるんだ?私は一刻も早くここから離れたいのだが。」

「あら奇遇ね。私もそう思ってたところなの。」

「だったら、お前がここから消えてくれると凄い助かるんだが。」

メルシーは、聖とターシャの間に浮かびながら、レートニイの言葉…いや、まるで存在していないかのように、ターシャと睨み合って口論していた。エルナもエルナで、ジュースを片手に、物珍しそうに精霊と人間の喧嘩を眺めていた。

「…メルシー、落ち着いて。今日だけ我慢してよ。レートニイ達と一緒に仕事やるのは、今日だけにするから。」

聖は心底困っていた。このままでは仕事どころではないのである。つくづく引き受けなければよかったと深く後悔していた。

「むぅ……おい、そこの馬鹿そうな金髪。早く仕事を話せ。何を呆けているんだ。」

本心では気に食わないのか眉を少し寄せていたが、聖に言われてから、もうターシャに文句は言わなかった。それを見たターシャも、メルシーの相手をするのはやめ、レートニイに言った。

「そうね。もったいぶらないで、さっさと内容教えてくれない。私も暇じゃないから。」

「だ〜か〜ら〜、聖が来る前から俺が何回言いかけたと思ってんだよ！それをお前がボケーっとして、何一つ聞いてないし、今も言おうとしたら邪魔しやがったんだろうが。いくら聖が……ってターシャさん、なんでもないです。申し訳ありません。じゃあ、簡単に今回の仕事について説明させていただきます。」

この前、ターシャに思い切り殴られた記憶が消えないのだろう。ターシャがレートニイの顔を、ただ黙ってじっと見つめただけで、急に俯き言葉が詰まってしまった。

「ねぇねぇ、聖お兄ちゃん。」

「ん？」

いつの間にか、聖の後ろにはこれから先のことを想像して、思わず忍び笑いをしてしまっているかのような、そんな好奇心に充ち溢れているエルナがこっそりと佇んでいた。

「実はね、ターシャお姉ちゃんね、聖お兄ちゃんが来るまでそわそわしててね。じっと扉の方を見つめてたんだよ。」

「……なんで？今日の仕事をそんなに楽しみにしてたのかな。」

「うわーある意味惜しいね。聖お兄ちゃん、カッコイイのに勿体ないな～もっとこう、ポジティブに物事を考えないと。」

「…？」

聖はエルナが何を言いたいのか分からず、首をかしげていた。それを見たエルナはため息をついた。

「こら、聖。俺の妹に手を出してないで、ちゃんと聞け。」

「おいおい、手を出すって。話してただけ…っ」

聖は後ろを向くのをやめ、レートニイの方へ目を向けたが、二つの視線が聖を静かに睨んでいた。だが、何故睨まれているのか分からず、聖は困惑していた。そんな聖の様子を、エルナは小声で（えへへ）と嬉しそうに笑っていた。

「まったく聖は。いいか、この地図をよく見ろよ。」

レートニイはテーブルに地図を勢いよく広げた。さっきまで、全くまとまりがなかった聖達の視線がようやく一点に集中した。

「今回の仕事を簡単に言えば、賞金のついた悪霊の討伐だ。リリカの森に住み着いた大樹の悪霊。こいつを倒す。なんと、賞金は金貨五十枚！！」

「…ってレートニイ、いくらなんでも高すぎでしょ！？相当強いんじゃないの？」

「甘いな～聖君は。賞金がついたのはつい最近で、しかも、そこの土地所有者は金持ちの領主でな。なかなか退治されないからって、痺れを切らしてこんな大金つけるんだってよ。こんなお得な仕事そうそうないだろう。」

「ふーん…ねぇ、レートニイ。それじゃあ、もう先を越されちゃってるんじゃないの？その悪霊強くないんでしょ？」

ターシャはあまり興味がなさそうに質問した。

「確かに強くはない種類だ。今は悪霊が各地に発生しているから生き残ったんだろうな。それはおいといて、悪霊の場合ギルドに頼むのは手数料が結構かかるから、ギルドは通さずに話を進めたいんだってよ。金持ちって、変なとこでケチなんだよな～。で、俺はあるつてからその話を聞いて、急遽お前たちを集めたんだよ。俺って凄くね？一番乗り間違いなしだ。」

「じゃあ、早く行こうよ～先越されちゃう。」

エルナは焦れったいのか、聖の袖を両手で思い切り引っ張っていた。

「そうそう、やっと俺の言いたいことが分かってきたか。聖もやるだろ？」

「…その情報、本当に大丈夫なの？あまりにいい話すぎるんだけど。」

どうやら聖は、その点が気にかかるらしい。少し都合がよすぎる…確かに魅力的であるが、かすかな違和感を感じていた。

「大丈夫だって。なぁ、ターシャ？」

「…そうね。私は別にいいわよ。どんな悪霊にだって私は負けないから。」

ターシャは一点の曇りもなく、自信たっぷりにそう言い切った。そして、おもむろに立ち上がった。

「聖も来なさいよ。どうせすぐ終わるわ。」

「いや、そこのところは全く心配してないんだけど…。レートニイ、リリカの森までここからどのくらいかかるの？」

「んなことも知らないのか？そうだなぁ…一時間あれば普通に着くだろ。」

「…分かった。しょうがないから、僕も行くよ。」

聖も立ち上がった。本当は行きたいくせにと茶化すレートニイを無視しながら、リリカの森への一歩を踏み出した。頭の隅に残る、表現できない何かを感じながら。

一方、ここは聖の家。聖とメルシーがギルドへ出かけた二十分後。一人の男がその家のドアをノックした。

「はーい。」

アミリヤが普段と変わらない、明るい声で返事をしながらドアを開けた。だが、その男を一目見た瞬間、纏う空気が一気に変わった。息もすることを許さない緊迫感が周囲を押しつぶした。

「ひひ、どーも。初めまして。」

「あら…こちらこそ。」

第二十八話：仕組まれた罠（後書き）

このまま一気に終わりまで突っ走ろうかな～とか思ってます。ここまで読んでくれて本当にありがとうございました。
次話から話が一気に進んでいく…かなと思います。

第二十九話：アミリヤと死神

「あんたがアミリヤか？」

この男…危険だ、血のにおいが体に染み付いている…アミリヤは、直観でこの男は敵だということを悟った。そして、アミリヤは男の口元が歪んでいるのを感じながら、厳しい口調で言った。

「そういうあなたは誰？ストーカー？」

「面白い女だな。それに美人だ…あの坊ちゃんにはもったいないな。ひひ、聖がうらやましい。」

「…一つだけ言っておくけど、死にたくなかったら聖には近づくな。」

アミリヤの迫力が一気に増していく。この状況、恐らく聖では立っていることすらままならないだろう。だが、その男はさも嬉しそうに笑っていた。

「ひひひ、いいねぇこの感じ。そんなに必死になっちまってよ。本当の親子じゃないくせに…。」

ビュッ、アミリヤが常人では、決して黙視することができない高速の突きを男の顔面にめがけて放った。しかし、男は片手で難無くその拳を防いだ。バンッ、その音だけが静寂を突き破り辺りに響いていた。

「おお、怖い怖い。さすがは元ギルド四強の一人、孤高の舞姫。

もうとっくに引退したってのに大した一撃だ。」

「よく喋るわね。どこの回し者？三下君。」

「ひひ、言うねぇ。そうだな…俺の名前はシザール。アヴィズムの一級戦闘員ってところだ。今日、わざわざ来たのはよ。聖もいないことだし、あんたから聖のことを教えてもらおうと思ってな。俺もさっき言ったことしかわかんねぇんだよ。」

「私がわざわざ喋ると思ってるの？あなたは危険そうだから…ここで始末する。」

アミリヤはさらに左ての拳を放った。シザールは防御しようとするが、先ほどの一撃とは威力がケタ違いであった。衝撃を吸収しきれず、そのまま体ごと吹き飛ばされる。

「ああ、ごめんなさい。アヴィズムって組織のことも聞きたいから、もう少し手加減してあげるわ。」

今のアミリヤの表情や口調からは、何の感情も感じられなかった。ゆっくりとシザールに近づいていく。

「…ひひ、そう怒るな。聖にはなんも手荒なことはしねぇよ。アヴィズムのトップが相当聖のことを欲しがっているんでな。出来ればあんたにも協力を願いたいところだ。」

「誰がそんなこと…聖には指一本近づかせないわ。もし何かあったら、私がそのアヴィズムのトップを殺しに行く。」

「ひひ、あんたならやりかねないな。しっかし、何で元ギルドの

四強の一角が聖に肩入れするんだか…聖にはそれほどの価値があるってことか。あんたは聖の本当の親を知ってんのか？」

「……。」

アミリヤは何も言わなかった。ただ黙ってシザールの方へ近づいていく。最早話すことは何もないと決めたのだろう。その眼光は、真っすぐシザールを貫いていた。

「だんまりか。そうだな…聖。十三歳。性格温厚。特にこれと言って特徴なし。あるといったらあの黒い目。髪が金髪で、目だけが黒って普通おかしいだろ。これも何か関係があんのか？」

「……言いたいことはそれだけ？」

「まだあるぜ。ギルバード王国の最強軍隊に、一番隊、二番隊、三番隊があるっていうのは常識だが、昔は零番隊があったって話だ。そこの隊長は、この国じゃあ珍しい漆黒の髪と目をしていたらしい。そいつと関係があるのか？」

アミリヤは何も言わず、右手を前にかざした。

「いでよ。アントラシヤー（跳ね踊るもの）。」

アミリヤが唱えた直後、まるでその言葉にその場の全てのものが反応したかのように、家は震えだし、空気が周囲を駆け巡った。そんな中、シザールは平然と、嫌、むしろ嬉しそうに言った。

「それがあんたの返事か？」

「私はあなたを殺す。」

アミリヤのかざした手のひらから、突然水が滴り落ちてきた。最初は数滴だったその水は、すぐに意思を持っているかのようにアミリヤとシザールの周囲を大きな円を描きながら囲みこんだ。その大きさは、聖の家がすっぽりと収まってしまうほど巨大な水の壁であった。

「言っとくけど、逃がさないわ。あなたが全てを吐いたら、楽に殺してあげるから。安心しなさい。」

そう言って、アミリヤは右手に意識を集中させ始めた。すると、どんどん水滴が集まり、ひとつの形を作り上げていく。

「ひひ、なるほど。水の扇子。だから、孤高の舞姫ってか…しかも、こうも見事に水を操るくらいだから、あんたの精霊は水の妖精だろ?…しゃあない、俺は大事な用もあるんでな。退散させてもらう。聞きたいことも聞けたしな。」

「どうやって?逃げられるとでも思ってるの?」

「あんたが引退している間、かなり精霊科学は進歩してるってことだ。ひひ、たとえばこの指輪。」

シザールは左手の中指につけていた黒い指輪を宙にかざした。

「俺は精霊なんて持ってねぇがな。ひひ、この指輪さえあれば、簡単に精霊なんて使役できんだよ。来い!煉獄の火炎。ラシヤ・ルーロ。」

その瞬間、シザールの背後に現れた黒い影が、周囲一帯全てに炎を放射した。その炎を浴びて、アミリヤ達を囲んでいた水の壁が、一瞬で蒸発し、辺りは濃い水蒸気で覆われてしまった。

「ひひ、じゃあな。」

アミリヤは、シザールの黒い影が炎を放射し始めた直後、水の壁をさらに前方に出したために直撃は避けたが、去りゆくシザールを止める手段はもうなかった。逃げられたのだ。いや、逃がしてしまったのだ。聖に確実に害を及ぼす者を、今ここで始末しなければならない存在を。

「く……とんだ失態…すみません…ロア様…ごめん、蓮華。」

アミリヤは地面を力の限り叩いた後、悔しそうに呟いた。

第二十九話：アミリヤと死神（後書き）

ちょっと頑張ってみました。
読んでくれてありがとう。

第三十話：姦計

聖達はギルドを出発し、リリカの森に向かっていた。途中、たびたびメルシーとターシャの衝突したりエルナが急にいなくなったりと、大分時間をロスしてしまったが、とうとう無事に辿り着いた。

「これがリリカの森か。」

見渡す限り緑一色で、たくさんの木々が空を覆っていた。聖の家の近くにある森とは、その規模や森独特の空気など比べ物にならないほどであった。

「なんだ。やっぱ初めてなのか？俺はたまにここら辺来るけど。」

「うーん…母さんが許してくれなくて。まだ小さいんだから、遠くに行くなってさ。」

エルナは、豊かな景色に目を奪われながら、笑顔で言った。

「過保護なんだね。聖お兄ちゃんのお母さんって。知ってる？そういうの、温室育ちって言うんだって。」

そう年下に言い切られると、若干虚しさを感じる聖だった。実は、聖は一人で町から外に出たことがなかったのだ。何度かアミリヤに頼み込んだことがあったが、必ず自分が同行するというのが絶対条件だった。聖は、確かに自分は温室育ちかもしれないと思った。

「…何気に毒舌だね。まぁ、事実だけどさ。それで、悪霊はどこにいるの？。」

聖はレートニイの方へ目を向け、指示を仰ごうとしたが、なぜか視線を逸らされた。心なしか、焦っているようにも見えた。その異変にいち早く気づいターシャが口を開いた。

「ねぇ…まさかとは思うけど、悪霊の居場所を知らないっていうんじゃないでしょうね？」

ビクッ、レートニイの背中がターシャの問いに反応し、その悲しい事実に全身で応えていた。

「うそ～、この森結構広いんだよ！悪霊の出現エリアを調べとくの常識でしょ？」

エルナは声を張り上げた。

「お…落ち着け妹よ。そういや、聞くのをうっかり忘れちまったが大丈夫。ここは二手に分かれて森中くまなく捜索すれば今日中には…」

「え～…面倒くさい…レートニイお兄ちゃんが一人で探してきてよ。」

レートニイはしどろもどろになって、悲しそうに言った。

「それはあんまりだろ…いいか、とにかく時間がないんだ。早く捜索を開始しよう。そのメンバーだが…」

「私と聖。お前と妹。後はそこの野蛮女でいいだろう。」

今までじっと森を見据えていたメルシーだったが、強気な口調で言い放った。

「勝手に決めないでよ。何で私が一人なの？」

ターシャはメルシーの提案が気に食わないようで、真っ先に異議を唱えた。

「はっきり言って、聖以外は邪魔だ。私たちなら、風を使えばある程度生物の位置など特定できる。無論、この森の広さでは多少時間がかかるが、それでもこの森半分程度なら一時間もかからん。一人が寂しいなら、そこの金髪ばかについて行けばいいだろう。」

「よっし、それでいこう。それじゃ、悪霊見つけたらこの閃光弾使ってくれよ。どんだけ離れていようが、一発で分かるから。」

ターシャの意見など聞かず、最早決定事項のようにレートニイは聖に閃光弾を手渡した。これ以上、ここで時間を浪費したくないのだろう。だが、エルナもターシャも不満気な表情だった。恐らく、メルシーに邪魔呼ばわりされたのが、相当気に食わないのだろう。

聖は傍観を決め込んでいて、何一つ言葉を発さなかった。それは、今までの経験が導いた行動なのだ。少し情けない気もするが…

「それじゃ、エルナ、ターシャ、さっさと行こうぜ。もうそろそろ昼になっちまう。」

「よし、聖。早く行こう。」

先ほどのやる気のない様子とは打って変わって、メルシーはご機

嫌のようだ。よっぽど、ターシャから離れるのを我慢していたんだろう。聖が行くのを待たず、すぐに森の奥へと進んでいった。

「分かったよ。じゃあねターシャ。エルナちゃん。」

「あ～、私のこと子供扱いしてる～温室育ちのくせに。エルナって呼び捨てでいいからね。」

「…はは、分かった分かった。じゃあね、エルナ。」

まだまだ、子供だと聖は思った。まぁ、そういう自分も十分子供なのだが、エルナを見ていると、自分が随分と大人びているように感じられた。

「聖…何かあったら絶対呼びなさいよ。」

ターシャは心配そうに聖に声をかけた。だが、目を合わせようとしない。不審に思った聖だったが、まさかターシャが照れているとは、夢にも思わないだろう。

「うん、そっちも気をつけてな。行ってくる。」

そう言って、森の奥へと聖は姿を消していった。そして、ターシャとエルナは、レートニイの後に続く。

「私、聖お兄ちゃんと一緒がよかったのになぁ～はぁ…レートニイお兄ちゃんは顔はいいのに、性格がダメなんだよ。」

「思いっきり聞こえてるぞ、エルナ。っていうかわざと聞こえるように言ってんだろ？耳元でぐさっと人の傷つくこといいやがって。

兄に向って、ダメってなんだ、ダメって。もっとこう言い方があんだろうが。」

「はぁ…やっぱり駄目だよ。」

「どこら辺が！？字も何だかひどくなってる気がするぞ。いいか、もっと真面目に探せ。金貨五十枚だぞ。なぁターシャ？」

「……そうね。」

「あり、やる気が感じられない。やっぱ聖がいないと…いやいやいや、違うよ。気が引き締まらないなぁ～って言おうと思ったんだぜ。」

慌てて言葉を修正しながら、弁解を試みていたレートニイだったが、目の端をかすかによぎった、不審な物体の姿を見逃さなかった。

「どうやら俺らが当たりらしいな、エルナ、ターシャ。」

「……そうね。」

「おーい、頼むから真面目に聞いてくれ。俺真剣なんだぜ？」

傍から見る限り、一種のコントのように感じられるほど、緊張感がなく普段と変わらない談笑であった。

バキッバキッ、右後方で森を這いずり回っている何かが嫌な音をたてた。ようやく、レートニイ達は、各自臨戦態勢を整える。

「ぐおぉおおおおおおぉぉぉおおおおおぉぉぉ。」

その刹那、その物体は急にこの世のものとは思えない程の不気味な咆哮を唱えた。其の姿は、大樹がそのまま悪霊に変貌してしまったかのようで、三メートルほどの巨体で、最早人の原型を留めていなかった。その手は木の枝と化し、その顔は木に邪悪な目が光っているだけであった。

「哀れね…」

そう一言、ターシャはやりきれなさそうに呟いた。

ターシャの一言に反応したのか、その悪霊は、両手をまるで大蛇のようにうねらせレートニイ達に襲いかかる。

「いでよ、スメターナ（炎に宿る者）」

ターシャは右手を、前方にかざし呟いた。その言葉に呼応し、炎が沸き上がったかと思えば、それは鷲の形をした炎鳥となった。

「スメターナ、あの存在を焼き消せ。」

ターシャが一言命令するだけで、火鳥は一瞬で迫りくる木を焼き払い、悪霊本体をも炎で包み込んでしまった。

「おぉおおおおぉお…うがぁぁぁぁぁぁ」

炎で体を焼かれ、自らの死期を悟ったのか、最後の力を振り絞りその炎ごとターシャ達に突進してきた。だが、ターシャ達は平然としていた。

「まったく、大人しくしてれば楽に逝けたのに。レートニイお兄ちゃん、お願い。」

「って俺？この流れはどう考えてもエルナがとどめだろ！ったく、バロリー（土を食らう者）、あいつの動きを止めてくれ。」

すると、土の中から数本の手が伸び、悪霊の身動きを封じ込めた。だが、未だに悪霊は憤り、何とか一矢むくいたいのか、必死でもがいていた。

「これで完璧。いや～俺久々にいい仕事したな～」

だが、悪霊は前よりも大きな咆哮と共に、土の呪縛を解き放った。

「はぁ、これだから駄目なんだよ、レートニイお兄ちゃんは…しょうがないから、私がやるよ。あの悪霊に安らかな眠りを…イストアール（土に命を預けし者）」

聖を森で襲ったあの土人形が数体悪霊に飛びかかっていった。さすがの悪霊も、何体もの土人形に囲まれ、身動き一つ取れなくなった。最後は土人形ごと、地面に吸い込まれるかのように姿を消した。

「な～にが、安らかだ。めちゃくちゃ強引じゃねぇか。このかっこつけちゃってよ。」

「うるさい。この駄目男。私がレートニイお兄ちゃんの後始末したんだからね。」

「兄にむかって駄目男ってなんだ？いいのかな～そんなこと言っちゃって。エルナの秘密をみんなにばらしちゃうぞ～」

それを聞いたターシャは、呆れ顔で

「同じレベルなのね…ふぅ、聖どうしてるかな。」

とつぶやいていた。まるで、先ほどの戦闘が嘘のように、嬉しそうにはしゃいでいるレートニイ達だったが、突然前方から一人の男が拍手をしながら、歩み寄ってきた。

「いや～大したもんだぜ。難なくDランクの低級とはいえ、その年で倒しちまうとはよ。ひひ、お前らアヴィズムに推薦してやろうか？」

何故今まで気付けなかったのか。この男の圧倒的な存在感に…すぐに、全員が臨戦態勢をとり、その男を見据えていた。

「あらら、やっぱマリヤと違って俺は勧誘むいてねぇな…す～ぐこれだ。」

「だ…誰だお前は？悪霊じゃないよな？」

レートニイが口火を切った。

「ひひ、ひひひひ…ひゃ～ひゃっひゃ、面白い小僧だ。俺は悪霊か？そうだな、確かに近い存在かもしれねぇな…」

「俺達になんの用だ？」

「ん…大したことじゃねぇよ。ただそうだな。…お前らは聖を縛る鎖になりそうだから、死んでもらいにきた。あぁ、安心しろ。一人ぐらいは人質として生かしといてやる。」

第三十話：姦計（後書き）

バトルを書くのは慣れてないので…勘弁してください。
どんどん更新していけたらいいなぁって思ってます。一言感想がありましたら、ぜひお願いします。

第三十一話：聖ＶＳロム

「疲れた～もう駄目。」

聖は座り込みながら言った。あれから三十分は経っただろうか。メルシーの力を借り、意識を集中させ、広範囲に風を集めてみたが悪霊を見つけだすことは出来なかった。

「なにを言ってるんだ聖？あいつらに先を越されてしまうぞ。」

「いや、競争とかじゃないからさ。別にいいよ。」

聖はゆっくりと体を倒し、仰向けに寝っ転がった。眩しい太陽の光を木の葉を遮り、心地よい涼しい風だけが、聖の体を通り抜けていた。

「全く…俺は、死んでもあいつを倒すみたいなことは言えないのか？」

「…何か変な本でも読んだ？そもそもターシャがいるんだし、僕の出番は今回ないって。」

「だから、あの女よりも先に倒せばいいんだ。そんなんじゃ、いつまで経っても強くなれないぞ。」

「……眠い。」

メルシーがやる気になっているのとは対象的に、聖は眠そうに両手を伸ばし、背筋を真っすぐにし欠伸をしていた。

「そう言えばレートニイに起こされたんだっけ……あと、バレバレですよ。何か僕に用ですか？」

「……。よく分かったね。それが君の精霊の能力か？」

「いや、わざわざ探らなくても、うーん…殺気？っていうのかな。全身で放ってるから。それに香水の匂いもかすかにするし。」

聖の真後ろに、土の中から茶色い戦闘服を着たロムが、気味の悪い微笑をもらしつつ現れた。その左手には鋭く光るナイフが握られていた。聖はそのナイフ…そして、ロムの左腕はめられている黒い腕輪を冷静に見つめながら、素早く立ち上がった。メルシーは、ただ黙ってロムを睨んでいる。

「最初から土の中を移動していればよかったかな。ふふ…僕が何を考えているか分かるか？」

そう言って、ナイフを聖の心臓めがけて一瞬の動作で素早く投げた。それをメルシーが難なくはじき返す。

「何のつもりですか？」

聖はロムの常軌を逸した行動に、内心訝しみながらも、それを表面に出さずに、冷静さを装いながら言った。

「君が気に食わないのさ。聖君。たかが平民の分際で、貴族である僕を侮辱した。名誉を傷つけた。それだけに極刑に値するだろう。」

「まるで貴族が王様か法律そのものみたいな言いようですね。そんなのは何十年も前の悪習ですよ？」

「それだよ！！僕に向かって意見するなんて許されないのに。平然と言えること自体が、この国の悪習といっても過言ではないんだ。そんなもの、僕が根底から覆してやる。貴族のための国民。貴族のための国を作り上げてみせる。ふふ…あ～はっはっは、僕になら可能なんだ。その手初めとして、君には死んでもらわなければいけないんだよ。」

すると、ロムが右手を真っすぐ上に伸ばし。中指と親指で音を鳴らした。パンッその直後、聖が立っていた地面が突如沈みだす。刹那の判断で聖は風を纏い、上空に飛びあがった。そして、下を一目見るとそこには巨大な気味の悪い物体が蠢いていた。

地面が沈んだ遥か後方に着地した聖は、メルシーに言った。

「どう思う？メルシー。」

聖の真下では、先ほどの巨大な何かが地響きをあげていた。木々が揺れ、木の葉が舞い落ちている。聖が先ほどまで立っていた場所は、周囲の植物ごと、跡形もなく消え去っていた。いや、飲み込まれたといったほうが正しいだろう。そこには大きな丸い穴が残っただけであった。

「どうもこうも…これが奴の精霊の能力だろう。地面を周囲の物事丸めて飲み込んでいるのか。もしくは、吸収しているか…どっちにしろ、落ちなければいいだけだ。さして恐ろしい能力ではない。」

「いや…そうじゃないんだ。あの精霊…一目見たけど…絶対おか

しい。はっきり言えないけど…悪霊を見てる時のような、嫌な感じがするんだ。どうにか出来ないかな？」

聖は辛そうに、顔をしかめながら言った。そんな聖の顔を、メルシーは不審に思いながらもその真っすぐな瞳をじっと見つめていた。

聖は優しい…その優しさは、私は決して闘っている相手なんかに持てないだろう…そもそも持てるハズがないんだ。敵は殺す。それだけを考えればいい。現に先ほどのあの男の攻撃。もし避けていなかったら、聖は確実に死んでいた。

だけど…聖は……何故だろう。…ほっとする…こんな血塗られた私だが…せめて……私に残された時間。全てお前のために使ってやろう。

メルシーは、口元のわずかな笑みを隠しながら、努めて冷ややかに言い放った。

「…無理だろうな。確かにおかしな気配が奴の精霊から漂ってくるが、私では対処できない。だが、あの馬鹿な男が何かを施したのは確かだろう。奴を倒し、聞き出せばいい。」

しかし、メルシーの一言に逆上したのか、急にロムが口を開いた。

「馬鹿は貴様らの方だ。何を話しているかと思えば、僕の精霊の様子がおかしいだと！だから何だと言うんだ。これは僕が望んだこと。醜くい！しかも弱いこいつに、もっと巨大な力をと、あの方が与えてくれた素晴らしい力だ。」

「あの方？誰なんですか？」

咄嗟に聖が口を入れ、ロムに言った。

あの方…プライドの高いロムが、わざわざ敬語を使う人物…この不審な言動…狂気としか言えない行動…そいつが諸悪の原因かもしれない。

聖はそう考え、ロムの次の言葉を待った。地面から、今だに地響きが足を通して伝わってくる。ロムの精霊が暴れているのか…それとも苦しんでいるのか…どちらにせよ。早く決着をつけたいと聖は願っていた。

そんな聖の考えを見越したのか、余裕の表れか…ロムは不敵に笑みを浮かべながら言った。

「はは、そんなに知りたいのか聖？そうだな…どうせここで死ぬんだ。特別に教えてやるよ。通称死神…ギルドでも賞金首になっている男さ。どうも、アヴィズムという組織の戦闘員らしいんだが…面白い技術を持っていてね。知ってるか？各地で悪霊が大量発生しているとう現象。実はアヴィズムが主導してやっているらしい。ははっこの国を壊す第一歩さ。」

「馬鹿なことを…悪霊を人の手で作り上げるなど…許されると思っているのか！！」

メルシーはロムを見据え、怒鳴り散らした。これには、聖も度肝を抜かれてしまった。普段、ターシャと口論している時はともかく、声を張り上げて怒鳴るメルシーは見たことがなかったのだ。メルシーは本気で怒っている…単に気に食わないだけか…それとも聖の知らないメルシーの過去と、何か関係があるのだろうか…

「考えてもしょうがないか…メルシー、あの指輪を使うよ。これ以上長引かせるわけにはいかない。即効で決着をつけよう。」

聖は背中の刀を片手に持ち、左のポケットから、カミンの店で購入した銀色の指輪を取り出した。

「そうだな。この男を倒し、さっさとその死神とやらを殺しに行くぞ。」

そう言って、メルシーは指輪の中へと姿を消した。すると、不思議にもその指輪がかすかな光を帯び始めた。周囲の木の葉が突然生じた突風に悲鳴をあげる。そっと聖は指輪を右手の中指にはめた。

ロムは薄ら笑いを止め、無意識にその光景に見入っていた。自分が長年求め続けていた巨大で絶対的な力…死神と呼ばれている男にその力を感じたのは自分でも理解できた…しかし、まだ精霊を従えて間もない…自分より年下の平民に、死神と出会った時と同じ、いやそれ以上の絶望感を感じるのは一体…

「…なんなんだ？このざわめきは…聖…何をした？なんだ…こんな…あり得ない。貴様など僕の…」

ロムは言葉を紡ぎかけたが、それ以上言うことが出来なかった。聖の黒刀の鞘が、深々とロムの脇腹に突き刺さっていたのだ。その姿を目で追うことも、攻撃を避けることもできず、ロムは両膝をつき地面に跪いた。

底知れない痛みが全身を蝕み、麻痺させていく。最早地面しかその視界には映らなかった。しだいに意識が朦朧としていく…

「とりあえず、ロムはこのまま連れて行こうか。ターシャ達と合流しよう。」

横から聖の声が耳に響いてくる。くそ…この距離じゃ、バロリー（土に生きる者）の能力が発動できない…このまま、惨めに捕まるのか…

「その前に、こいつから死神の居場所を聞き出そう。いいだろう？聖。」

死神……その言葉に朦朧としていた意識が、鮮明に動き出した。負けたら僕は…敗者として確実に殺される…死神は笑いながら僕を殺しにくるだろう…逃げられない…くそ…くそ、負けられない。僕はまだ…

「死にたくない！！わが右手を対価に与えよう。鮮血に咲く大樹。レセ・メジネマ。」

ロムの左手にはめられていた腕輪が黒く濁った光を発した直後、ブシュッ…身震いする音が聞こえてきたかと思えば、ロムの右手が肩から腕にかけて真っ赤な鮮血と共に、消え去った。突然の出来事に、聖とメルシーに衝撃が走る。さらに、ロムの肩からは、血が大量に垂れ落ちながら、気味の悪い木が生え始めていたのだ。それは、亡くなった右手をロムの血を吸い上げながら真っ赤に染まりっていき、あっという間にその形を形成していった。

「…くっ…痛い…ここまでとは…だがどうだい聖？僕の新しい完璧な腕は。」

まだ血は垂れ落ちていたが、ロムはゆっくりと立ち上がった。聖には、その顔が苦痛で歪んでいるように見えたが、ロムは大きな高笑いを発している…

「ふん、とうとう狂ったか。哀れな男だ。」

メルシーは高笑いが辺りに響き渡る中、一人憮然とした表情で呟いた。

その言葉に反応したのか、ロムは高笑いを止めた。そして、聖やメルシーを見るわけではなく、ただ自分の新たな腕を見つめながら、一人話し始めるのだった。

「この腕の美しさが理解できないとは…馬鹿な奴だ…なぁ、レセ。君が現れた時点でもう貴様ら負けだというのに…」

「その腕がそんなに強いとでも言うんですか？」

その不気味な口調に聖は思わず質問してしまった。そこで初めて、ロムは聖の方へ顔を向けた。

「はは…聖。お前、そこから一歩でも動くことができるか？」

「何を言って……あれ、そういえば足が…手も動かない。」

聖は全力で足を動かそうとしてみたが、地面から伸びた鎖が手足に巻きついているかのように、全く動かなかった。メルシーも驚きを隠せない。一体いつこんなことができたのか？腕が生えたこと以外特に変化はないはずだ。考えられることは…一つ。

「それがお前のレセとやらの能力か？ある対象の身動きを封じる力。恐らく…毒か何かだろう。」

「ははは、その通りさ。もっとも、毒なんかではなく鮮血が舞う時にこの腕が発する怨念と僕は聞いたがね。発動直後じゃないとなかなか機能してくれないらしいが…聖を締め付け握り潰すことぐらいは簡単にできる。」

そう言って、ロムは今はもう木と化してしまった腕を、聖に巻きつかせた。まるで意思を持つかのように、嬉しそうに聖に忍び寄っている不気味な感触を、聖は肌で感じていた。だが、振りほどこうにも体が言うことを聞いてくれない。

「くそっ…おいお前！聖を離せ！！」

メルシーが必死に腕の浸食を止めようと試みるが、するすると聖の全身に巻きついていった。早くこいつの血をヨコセと訴えているかのようだ。

「よ～し、じゃあな聖。せいぜい綺麗な鮮血でレセを喜ばせてやるんだな。」

聖を巻きつけている木がその力を増していく。メルシーが風を周囲一帯に起こすが、時間稼ぎにもならなかった。

「死ね！！！」

ロムが叫んだ。だが、聖に巻きついていた赤い腕は、後方から発せられた光を浴びて、急速にその力を弱らせていった。この木は苦しんでいる…この優しい光はなんだろう…聖は目を凝らして、光を

見極めようとした。次第に光が収束されていく…

「それ以上、聖さんに攻撃をすることは、私、マリヤ・ラスターシャの名において許しません。」

そこに立っていたのは、星がきらめく夜空で出会った、青い髪をなびかせた女性だった。

第三十一話：聖ＶＳロム（後書き）

聖じゃないですけど…「はぁ、疲れた～」って感じです。さり気に今までで一番長いのでは…

どうも文章って書くの疲れるんです。何十時間も連続で書ける人が羨ましい…ちょっとエグイですけど、読んでくれてありがとうございました。

そのうち番外編書いてみようかなって思ってます。

題して「レートニイの初恋！？」みたいな…もう大体書き上がってるんですけど…載せようか思案中です。

第三十二話・死神の誘い

「いつまでも睨みあっててもしゃあない。そろそろいくぜ？」

目の前男はそう言ってほほ笑んでいた。ターシャ達に緊張が走る。遥か格上の存在…ターシャはこの男を一目見たときからそう感じていた。

このままじゃ…確実に全滅ね…ターシャは左にいるレートニイの方をちらりと目だけで追ってみた。どうやら自分と考えていることは同じのようだ。左足をわずかに後ろに下げつつ、重心も後ろに置いているのが見て分かる。あの男が動き始めたらすぐに逃げられるように…けど……レートニイがターシャの方へと顔を向けた。視線が一瞬交差する。

目で逃げろと合図を送ってくる……馬鹿ね、足が震えてなければかっこいいのに……

エルナは無音の動作で、懐に備えてあった短い双剣を取り出した。そして、双剣を逆手にシザールとの戦闘に備える。それを見た男の顔が、まるで獲物が足掻くさまを楽しんでいるかのような…そんな冷酷な表情へと変貌していった。この状況は、この男にとっては狩りでしかないのだ。しかも、自分が絶対的立場…肉食の獣が、目の前にいる兎を狩る…獣にとっては、ただ目の前にいる兎を殺して食らうだけなのだ…例え兎が刃向っても…逆に獣は喜んで牙を突き刺すだけ。

無茶よ…エルナのその構えは、目の前にいる男を挑発することに

しかならないわ…恐らく相手はアミリヤさん以上の使い手……私でも敵わない…けど…エルナやレートニイを逃がすだけの時間稼ぎなら。

ターシャはエルナを止めようとするレートニイに口早に言い放った。

「エルナを連れて逃げなさい。私がこの男を足止めする。」

レートニイは悔しそうに顔をしかめた。多分分かってる…自分じゃ時間稼ぎにもならないってことを…しかし、エルナは逃げようとはしなかった。双剣をその男の方へ向け、決死の覚悟で叫んだ。

「いや…私は闘う。こんな奴になんか絶対負けな……」

ドサッ……レートニイが後ろから、エルナの首筋に手刀をいれ昏倒させた。気を失い倒れたエルナを、レートニイは急いで肩に担いだ。その様を、何故かシザールは黙って見つめている。

「早く行って！」

ターシャはシザールを制しながら、行きあぐねているレートニイを大きな声で促した。

「悪い……」

そう言ってレートニイはターシャを背に、全速力で駆けだした。ターシャはシザールが追いかけると思い、精霊を出そうとするが、シザールは一歩も動かなかった。

何故この男はレートニイを追わないの？…未だに動き出す気配すら見せないシザールにターシャは疑惑の眼差しを向けた。

「何で追わないのか分からないって顔してんなぁ。ひひひ。」

ようやくシザールが声を発した。微風がターシャを横切っていく。…髪をなびかせながら、ターシャはじっとシザールを見つめていた。どうする…この男は本当に私達を殺す気があるのか…いえ、それよりも問題なのは、この男と聖はどういった繋がりがあるのかってことよ……

「あんたは聖をどうする気？」

「おいおい、質問できる立場かよ？あと俺の名はシザール、あんたなんて呼ぶんじゃ…」

「いいから答えなさい！いでよ、スメターナ。あいつを焼き消せ。」

ターシャは右手をシザールの方へ伸ばし、唱えた。熱く…そして激しい炎がその右手から発せられた。炎が猛り、上空に立ち上りながら鳥の形を成していく。そして、スメターナはシザールを焼きつくそうと、目では追えないほどの勢いでシザールに襲いかかった。

「煉獄の火炎に生れし者、ラシヤ・ルーロ。」

その男は右手を上に掲げ唱えた。その瞬間、巨大な空をも飲み込むような火炎が、スメターナの攻撃を簡単に防ぎ、遥か後方へと弾き飛ばした。そして、スメターナは悲鳴をあげながらその姿を消した。

ゴォォォォ…地響きを鳴らしながら、ラシヤ・ルーロはその姿を現し始めた。ターシャは今にもここを逃げ出したい衝動を抑えながら、冷静にあたりを見渡した。

そう、ターシャには見えていたのだ。ラシヤ・ルーロが現れた瞬間、周囲の木々は焼け落ち、足もとの草花は燃え尽きてしまったことを。これは、他の精霊と照らし合わせて考えてみると、何かおかしい。

…精霊が召喚された際、故意に自然を破壊する…そんなこと、この悠久の大地や澄み渡る青空から生まれた精霊が犯すはずがない。それはつまり、彼らは自分の親を…故郷を攻撃することになるのだから。

しかも、あの男の出した…煉獄の火炎と呼んでいたけど、精霊にしてはどこか違和感がある…まるで……悪霊のような……

「……まさか…悪霊？」

ターシャは無意識に言葉を紡いでいた。しかし、自分で自分の言ったことが信じられなかった。悪霊とは人間の魂を乗っ取った忌むべき存在。禁忌を犯した精霊のことを言う。その禁忌を犯した精霊は、皆例外なく自我を失い本能のままに行動するのだ。それを従えるなんてこと…出来るはずが…ターシャはシザールの傍らに立つ精霊に目を向けた。

ラシヤ・ルーロと呼ばれた精霊は、シザールの指示を待ち身動き一つしなかった。その精霊の姿も、炎に隠れてよく分からなかったが、真っ黒な皮膚をもち、成人男子に近い体格。いや、それ以上に

先ほど退治した精霊の目…見る者を凍りつかせる悲しい目に…あまりに似通っていた。

「何だ？よく分かったな。ひひ、確かにこいつは一般的に言えば悪霊。能力の優れた人間をベースにした、火炎を司る精霊だ。その炎は全てを焼き尽くし、全てを無に帰す。あのアミリヤの精霊をも凌ぐ力だ。最高の戦闘道具じゃねぇか。」

シザールは得意げにそう言った。まさか…ターシャは驚愕のあまり声が出なかった。体が凍りついたように動かない。ただその心臓の鼓動だけが耳に響いていた。アミリヤの名が出たことも驚いたが、それ以上に人間を悪霊を作る材料の如く言い放ったことが信じられなかった。しかし、現に今目の前にいる男は悪霊を操り、戦闘の道具と称した……戦闘の道具…

「ひひ、驚いて声も出ないか？そうだ…俺の精霊を当てた褒美だ。何故あいつらを逃がしたか…教えといてやるよ。」

一歩一歩近づきながら、シザールは言った。ターシャは動けなかった。シザールとの圧倒的な力の差、決して逃げられない。倒すにしても自分の力では不可能なのだ。せめて聖がいてくれれば…だが、無慈悲にも死神の死へと誘う黒い鎌は、確実にターシャの喉元に当てられていた。

「アヴィズムの五級戦闘員がこの森を包囲してんだよ。総勢三十名。この森からお前らが出たら殺せと命じてある。あんな弱そうな奴らを相手にすんのも退屈だしな。ついでにお前が心配してた聖には、刺客を送っといたぜ。くそ弱いが、あの腕輪を使ってれば負けはしねぇ…いや、殺しちまってるかもな……ひひひ、最悪死体でもかまわねぇだろう。そうなれば、お前らは聖を悪霊に仕立てる道具

ってことになる。せいぜい役に立つんだな。」

そう言ってターシャの目の前に立ち、喉を右手で締め付けあげた。

ターシャは自分の意識がだんだんと体から離れていくのを静かに感じていた。……苦しい…こんな最低な奴に負けるなんて……違う…私は……悔しい…スメターナを精霊にした時誓ったんだ……どんな悪霊だろうと私が倒す……そう…聖は私が守るって……

「東の煙霞…西の焔よ…この大地に溢れる炎を食らえ…我がスメターナの声を聞け。」

ターシャは虚ろな目でそう呟き始めた。意識があるかどうかも定かではない。目に見える何かをただ読んでいるだけのような…シザールは訝しみながらもそう感じていた。少なくとも、ターシャの声に力強さなど全く感じないのだ。しかし、幾つもの死地を乗り越えてきたものが感じる直感…シザールの窮地をいつも助けてきた相棒が、この場を急いで離れろと脳に信号を送ってくるのだった。

「我は炎に選ばれし者…我が声に従え。今こそ応えよ。遥かな時に君臨せし鳳凰として、目の前の敵を打ち消さん。」

シザールは咄嗟に逆の手でターシャの喉元を、袖に忍ばせていた短剣で切りつけようとした。

今ここで殺す気はなかったんだがな…しゃあない。これは恐らく…こいつの言霊だ。

シザールはそう考え、すぐに息の根を止めようとした。ターシャの方は、未だに虚ろな目で一人呟いていた。シザールはターシャの

体が、内の精霊の異常な熱気で体温をどんどん上昇させていくのを感じていた。掴んでいる手が熱さで限界に近い…この異常な現象に、シザールは久しぶりに焦りを覚えていた。

「死ね！！！！」

第三十二話：死神の誘い（後書き）

そろそろクライマックス突入！！！！しそうです。
読んでくれてありがとうございました。ためになるので、何か一言あったらお願いします。

第三十三話：覚醒

「いいところで…君は僕の邪魔をしようというのか？」

辺りを包み込んでいた強烈な閃光が、次第に収まっていった。ロムの右手と化しているレセは、光の収束を見計らっていたのだろう。不気味なうねりをあげ、マリヤに敵意をむき出しにしている。

マリヤは視線を聖へと向けた。未だにレセに捕えられたままだ…身動きしない所を見ると、意識を失っているのだろう。

あの失敗作を与えるなんて…もう、あの人の意思とは無関係にあの腕は人を襲う…

マリヤが見ている間にも、レセと呼ばれた腕は成長していた…当初はロムの腕程しかなかったが、今では餌に餓えた蛇のように、根元からロムの右半身を侵食し始めていた。

「聖さんを放しなさい。私はアヴィズムの諜報兼戦闘員です。私が聖さんを保護します。」

マリヤは毅然と言い放った。

「ふん。僕に命令できるのはあの方…いや、こいつがいれば、僕は誰にも負けない！はははは、もう僕には誰も逆らえないんだ。これほど愉快なことはない。こいつが欲しいんなら、土下座でもしてお願いするんだな。ははっ」

酷い…マリヤは思った。今の言動…前は自信に充ち溢れ、上品な

青年であったこの男は…もう手遅れだ。その表情は笑顔で彩られているが、顔は異様なほどに青白かった。目もどんよりと暗く確実に生気をレセに奪い取られているのだろう。

「これは命令です。」

「馬鹿め。これからは僕が命令する立場になるんだ。何でお前のような下賤の輩のいうことなんて…お前は消えろ！！」

レセが主の意に応えようと、聖を捕らえている部分からさらに先端の尖った枝を伸ばし、マリヤに襲いかかった。

「はッ！」

突如、メルシーが渾身の力を込め、ロムの死角…背後から聖を捕らえていたレセに、烈風…俗に言うカマイタチを発した。レセは聖を捕らえていた部分を真っ二つに切られ、鮮血をその傷口から吹き出した。

「うぉぉぉ…くッ、痛い…痛い。よくも…僕のレセを傷つけたな！！」

険しい顔でメルシーを睨めつける。

しかし、メルシーはロムなど眼中になく、地に落ちた聖を風で包み込み自分の元へ引き寄せた。そして、ロムをにらみ返し、勢いよく両手を前に掲げた。

「聖は私が守るんだ。もう指一本聖には触れさせない。」

血を失わない為か、吹き出ている血の後を追うようにメルシーに切られた根本から腕が生えていった。自己修復…しかも、二度と切られない…いや、血という自分の大好物を失わない為により強固になっていっている。その太さはさらに倍に膨れ上がっていた。

ロムは標的をマリヤからメルシーに変え、レセ、それに姿の見えないバロリーに攻撃命令をだそうとしたが、マリヤがまたもや眩い光と共にレセもろともロムを抑えつける。

「これ以上、あなたを野放しにはできない…元凶はあの男…私も同罪ですが、人であるうちに死んでください…お願いします。レイ・ラルレルグ（光を統べる者）。闇を払い、この方を光のもとへ…」

…眩しい……

聖の中で朦朧とさまよっていた意識が、眩い光を道しるべに再び自分の世界に舞い戻ってくるのを感じていた。何が起きたのか考える余裕も時間も聖にはなかった。ただあるのは落ち着きのない焦燥のみである。

…早く……早く！！こんなところで気を失っているにはいかない。

しかし、まだ手足の感覚が感じられない…意識は着実に戻りつつあるのに、全身が金縛りにあっているようだ。それは、ロムに絞めつけられた体が悲鳴をあげ、体の主が戻るのを拒絶しているのだっ

た。

…くそ…くそ。所詮僕なんてこの程度なのかな…いや、そんなことは昔から分かってるんだけど、そんなこと言ってる場合じゃないし…メルシー…こんなんじゃまた怒鳴られるだろうな。

目も開けられず、体も言うことを聞かないが、ようやく思考が出来るほど脳内は落ち着きを取り戻していた。しかし、現状は気を失いかけていた頃とさして変わらない。深く明かりの射さない暗闇の奥底でただ一人、そこから抜け出すことも自分を包む暗闇を掴むこともできず、せいぜい目の前の闇を眺めることしかできないのだ。

「情けない、あんな雑魚に手こずるなんて…ふふ、あやつが知ったらどうなるかの。」

誰だろう…でも、僕はこの声を知ってる……昔……どこかで……

「今なら少し会話もできるかの。聖…単刀直入に言おう。もうギルドに関わるのは止めよ。メルシーとも別れ、勉学に専念して穏やかに暮らせ。アミリヤの考えは知らんが、お主に戦闘はむかん。」

…全てが終わったらそんな生活も検討してみようかな。メルシーも付き合ってくれるだろうし…。

「アミリヤでは不満なのか？」

ってこれ夢？それとも死の一歩手前？…真面目に答えちゃったけど…訳が分からないや。

「このままいけば、必ず後悔することになる…お主が選んだ道は、

それほど楽な道ではない。いつか理不尽で残酷な死にも直面するだろう。」

……誰……なんだ？僕の……過去を知ってる？…

「それでもこの道を進む覚悟があるというのなら唱えよ。殺さなければ殺される修羅の世界を身をもって…知るといい……妄の……力で……」

聖は目をゆっくりと開けた。眩い光は依然として輝いていた。その光を浴びて、悲鳴をあげる声が耳に響いてくる。

「聖！！無事か？」

傍らにはメルシーの姿があった。目が赤い…本当にメルシーは精霊なのか疑いたくなるほど人間らしい。

「どうしたんだ聖？どこか痛むのか？」

痛む？…この悲鳴は……ロムだ。地面に両膝をつき、まるで悪霊のように悲痛な叫び声をあげ、異様に顔を歪ませている。この光がロムを苦しめているのかな。

いや、あの腕…あれが苦しめてるんだ。逃げ場を求めようと、ロムの体にまで這いずりまわっている。

自業自得……力を求め、力に溺れた報い……

でも……助けたい。例えエゴでも偽善でも嫌いな人でも、目の前で人が苦しんでいるんだから…

後悔……しないためにも。

「妖光の…深く鈍いその煌めき……地を穿ち…天を切り裂くその刃……汝、主が我が覚悟。我が魂しかと受け止め、解放せしむ。」

第三十三話：覚醒（後書き）

結構スランプで、今までで一番時間かかってしまいました。もう書くの辞めようかな～っと本気で思ったんですが、読んでくれた人に申し訳ないと思い、ぱぱっと書き上げました。今でも少し迷ってますけど…

読んでくれてありがとうございました。ぜひ感想あったらお願いします。

第三十四話：終幕へ

「応急処置はしておきました。万全とは言えませんが、命に別状はありません。」

マリヤは傍らで不安そうに見つめているメルシーに言った。

今、聖は横になって眠りについていた。レセに全身を絞めつけられた際に受けた傷や痣が腕や足に見え隠れしているが、穏やかな寝息がこの場を安心させた。

「そうか。色々と済まない。」

メルシーは頭を下げ、素直に礼を言った。その視線は地面の方に向いていて、マリヤに向けられることはなかったが、その言葉に偽りの色はなく、マリヤがレセに捕らえられていた聖を助けたことへの感謝の念もこもっているのだろう。

まさか感謝の言葉がこの精霊の口から発せられるとは思わず、マリヤは目を丸くした。

「いえ、これくらいは……もともとは…」

…そう、責められこそすれ感謝されることなんて全くないもの…

マリヤは自責の念を胸に感じ、メルシーに事の次第を説明しようと口を開いたが、言葉を紡ぐのを止めてしまった。

すぐ目の前でメルシーは愛おしそうに聖の安らかな寝顔を見つめている。

その姿は何故か分からなかったが、マリヤの口を遮り、後悔を募らせた。
あの男…シザールが聖に対し不穏な動きをしていたのをマリヤは感づいていた。最も数か月の付き合いだけだったが、それだけで十分だった。
あの冷酷な目……あの薄ら笑い……そもそも上は何を思ってこの男を聖勧誘の一員としたのかもマリヤには謎だった。
単なる人選ミス…とすれば話は簡単だが、マリヤにはどうしてもそうは思えなかったのだ。
例え自分が住んでいた村を焼き払った相手であっても……聖さんを守るためだったら。
そう思い、吐き気を抑えながらもこの男と出来る限り行動を共にし目を光らせたが、結局防ぐことが出来なかった。今回は、たまたまアヴィズムの戦闘員、しかもシザールの息がかかった戦闘狂がこの地に何人も派遣されたと上から伝えられ、真意を確かめるべくたまたまこの地に足を踏み、狂気と化したロムと聖に出会っただけなのだ。
無力……私は……何をやってるんだろう…
マリヤは風になびく髪を片手で抑えながら、起きる様子もない聖へと目をやった。
「一つ聞きますが…あれはあなたの力ですか？」
マリヤはメルシーの方へ視線を移し無意識に言った。沈黙…風の

ささやきと鳥の鳴き声だけが静かに響いている。

「……私じゃない。」

メルシーは聖の傍へ腰を下ろし、悔しそうに呟いた。

「そうですか…」

…それではあれは……あの力は一体……恐らくアヴィズムが聖さんを狙う理由の一つ…

そう思いながら、先ほどの聖の姿を頭に思い浮かべた。聖のすぐ右側には、ロムが横たわっており、そのさらに横には何メートルもえぐれた地面となぎ倒された木々が無数に横たわり、巨大な何かが通った後を作り上げていた。

「聖さんは一体何を……まぁ、いずれ分かることですね。そこの方は、すでに鮮血の大樹の呪いから解放されていますから、多分大丈夫でしょう。ただ、二度とギルドの仕事をなさるのは無理だと思いますが…」

「こんな奴なんて死んでもよかったんだ。」

「…私にとってもどうでもいいのですが、せっかく聖さんが救ってくれたんですから死なせるわけにはいきません。聖さんの石を使わせてもらいましたし、放っておいても死にはしないと思いますが…後は他の方々にお願いします。私はしなければならないことがありますので、これで…」

「……」

メルシーは返事をせず、ただ聖を見つめ黙っていた。

一方マリヤも様々な疑問が頭の中で渦を巻いていた。唯一分かるのは、聖が何らかの力を使い、ロムをレセの呪いから救ったということだ。

救う方法と言ってもあの腕輪を壊すしかないのだが、まずありえない…はずだ。発動した時点で腕輪は人体と完璧に結合してしまう。また、あの腕輪は万が一にも壊れないように、幾重にも強化がなされた特注品…金剛石よりもはるかに硬い…

「あなたは本当に…。凄いですね。」

心から出た言葉…自分の本心…そう呟いた瞬間、何故か喪失感や後悔で溢れていた胸がスッと楽になっていくのを、不思議に思いながらも感じていた。嘘偽りをすることでしか生きられないマリヤにとって、本心を口にするのは遠い過去の出来事のように思えた。

聖が背中に背負った刀を抜き放ち、ロム…いやレセに刀をすぐさま振り下ろした時の迷いなき表情……まだくっきりと目の前にいるかのように目を閉じると描き出せる…

光の中だったのであまりよく見えなかったが、髪が黒く染まっていたような気がしたが…

「そんなことはありえないですよね……」

そう呟き、聖と夜空の下で出会ったときと同じように、森の中へと姿を消した。

「動くな…」

シザールの首元にはそっとナイフが突きつけられていた。思わず体に緊張が走る。命じられるままにターシャを殺す為に握っていた短刀を止める。

「おいおい。今いいとこなんだがよ。誰だ？」

全く俺が気付かないとはな…落ち着いた外面とは裏腹に内心では驚きが隠せず、心臓の鼓動がいつもよりも早く脈打っていた。ターシャに一瞬感じたあの焦りが後ろにいる男に呼応して蘇ってくる。

「ギルバード王国三番隊副隊長、カミン・シューターだ。貴様には聞きたいことが山ほどある。それに、その子は常連なんでね。殺してもらっちゃ困る。」

王国の最強部隊。その副隊長がなぜここに…畜生！役立たずの諜報部共。そんな情報聞いてねぇぞ！！

「言っとくが答えない時は躊躇なく殺す。この子が気絶してて助かったな。遠慮なく殺れる。一つ目、お前の目的は聖か？」

カミンは突きつけていた短刀に力を込める。この位置なら、刹那の瞬間にシザールの首を刎ねることができるだろう。シザールに選

択できる道は二つ…

「まぁ、その通りだ。」

沈黙を守り死を選ぶか、従ってこの場をやり過ごすかであった。その点では、シザールの経験がものをいう。その証拠に、もう心臓の鼓動は普段の落ち着きを取り戻し、脳内では様々な考えが渦巻いていた。

時間が経てば手駒が何人かあいつらを始末したという報告をしに来るだろう。ひひ、俺はただ待てばいい…すぐだ…もうすぐ…

「二つ目、約四年前にギルバートの東にあるアルカ村を焼き払ったのはお前とその組織アヴィズムか？」

「さぁねぇ…俺が入ったのは最近だから知らねぇよ。」

シザールは平然と言った。その様子にカミンは顔を険しくする。その両目でシザールを激しく睨みつける。シザールの喉に押し付けられていたナイフが、静かにその力を増していた。カミンの手が…怒りを必死に耐え震えていた。

「そうか……言っとくが俺はお前の吐く言葉など全く信じていない。もう証拠は揃っている。村を焼き、住人を残らず殺したのはお前だ。その頃お前はどこにも所属はしていなかったが、大方アヴィズムに金でその仕事をやらされたんだろう。」

「ひひ、だから知らねぇっていってんじゃねぇか。」

「惚けても無意味だ。目的は…これは俺の仮説だが…アントラの

娘をさらうためだろう。それに、あいつがお前なんかに殺されるはずがない。実行犯は誰だ？これが最後だ。答えろ。念のため言うが、俺はお前が嘘をついたと感じた瞬間にお前を殺すからな。」

「ひひ、なんだ。結局は復讐かよ…副隊長ともあろう方が私怨で動いていいのか？どっちにしろ、俺の部下がすぐに来る。お前は俺が直々に殺して……」

「馬鹿め。一つ教えてやる。お前の部下など、とうに俺が捕らえたさ。レートニイやエルナも無事に保護した。あんな部下しかいないんじゃ、お前も終わりだ。俺の質問に答えろ。殺ったのは誰だ？アントラの娘はどこにいる？」

カミンが発するプレッシャーがその重みをさらに増していった。次はない…シザールは自分の立場を今一度肌で感じ取っていた。最初から選択権などなく、自分には死という終わりしか待っていなかったのだ…脱力感…死への絶望が頭の隅々を覆っていった。

「ひひ…そうか。そうだよなぁ…最初からこうすりゃよかったんだよ！！」

シザールが叫ぶのと同時に、微動だにすらしなかったラシヤ・ルーロがその炎で全身と包み込ませていく。パリン…シザールの手にはめられていた黒い指輪が音をたてて崩れていった…

「何だ？最後はこの悪霊に助けてもらおうっていうのか…無駄なことを。」

「馬鹿はお前だ！！俺はここで死ぬが…お前も死ぬんだよ。ラシヤ・ルーロの制御を解除した。こいつはある意味アヴィズムが俺に

課した首輪だ。これから周囲を炎で飲み込みすべてを焼き尽くす。」

「ならその前に始末すればいいだけ…」

「この悪霊のベースの名は…アントラって奴らしいぜ。ひひ、感動のご対面じゃねぇか。」

「……。」

カミンは何も言葉を発することが出来なかった。シザールの言ったアントラという言葉が体中を駆け巡り、それが鎖のようにカミンを縛りつけた。

嘘だ…絶対に嘘だ。

無意識に手が震える…何も考えられない、ただただカミンはアントラの変わり果てた姿を見つめていた。

第三十四話：終幕へ（後書き）

やる気が物凄いわくので、出来たら一言お願いします。

第三十五話：幕引き

「嘘だ……この悪霊…があのアントラだと…」

カミンは驚愕を隠せなかった。今すぐにこの場を離れなくてはならないという状況の下、ラシヤ・ルーロの顔を覗き込んだ。あるのは不安とかすかな期待…見なければよかったと後悔することになっても…自分の親友でないことを祈りながら。

炎が周りを包みこんでいく…ラシヤ・ルーロの顔は、真っ黒で輪郭もはっきりせずそれだけでは判断がつかなかった。しかし…四年前の火災…それにこの憎しみに溢れた目の色…それを考えると、頭から否定が出来なかった。

信じたい…あいつが悪霊になるはずがない…

「ひひひひ、どうした？副隊長。顔色が悪いぜ。せいぜいお友達の火炎で死ぬんだな。来い、ラシヤ・ルーロ！！お前の憎しみを見せてみやがれ！！この女もついでにな！！」

カミンがナイフを突きつけた瞬間から、ターシャはシザールから解放され気絶したまま地面に横になっていたが、この距離では確実に巻き添えを食らってしまうだろう。

「シザール！！貴様だけは！！ここで始末…」

「あああああああぁあああああぁああああぁぁぁ」

カミンを遮り、ラシヤ・ルーロは悲鳴とも雄たけびとも判断がつ

かない叫び声をあげ、その身を焦がしながら炎を唸らせた。そして……

「これは…？」

今マリヤの前方半径十五メートルが炭となり何もかもが消え去っていた。木の葉や植物は燃え尽き、大木であっただろう木々は跡形もない。ぱちぱちと残り火が燃えているのが見えるだけだった。

その異様な光景は森の中にぽっかりと黒い穴があいているかのようだ。不思議にもその範囲以外の木々は悠然とそびえていた。

「あの男の仕業…かしら…」

それ以外この出来事に説明がつかなかった。あの男がアヴィズムから与えられている悪霊の能力は見たことがなかったが、一定の範囲以外が無事だというのは何かしらの能力であったと考える方が的を得ているだろう。

マリヤは炭と化した大地の土を踏んだ。何か痕跡があるかもしれない。もしかしたら、ラシヤ・ルーロが暴走し、あの男が死んだかもしれないのだ。そうだとしたら、死体すら残っていなかっただろうが、はやる気持ちを抑えつけることだ出来なかった。

「うぅ…」

少し遠くで人が苦しみにうめく声が聞こえてきた。反射的に顔を声の方へ向けると、そこには筋肉質な男性が、火傷した右手を支えながら灰に包まれた地面の外、大きな大木にその身を預けていた。全身の服は焼け焦げ、その肌は炭で汚れていた。相当痛むのか、呼吸するのも苦しそうだ。

その横には気絶している少女、ターシャが横たわっていた。カミンと違い、傷を負った様子もなく服が少し炭で汚れている程度だった。

「大丈夫ですか？」

マリヤは急いで駆け寄った。素人目に見ても凄い重症であった。マリヤは積もる疑問を胸に隠し、精霊を呼び出した。

「レイ。お願いします。この方の治療を。」

すると、カミンの全身が光で包まれた。レセに浴びせられた眩い光とはまた別の、太陽のように暖かい光が周囲を照らした。

マリヤの精霊、レイ・ラルレルグはその名の通り光の精霊だ。光…風や炎など精霊のも其々属性があるが、中でも光は最も珍しく最も神々しいと言われている。光の精霊自体、その発見例が少なく人目に触れることはない程だ。その精霊が自分の宿主に人間を選ぶ…これだけで、どれだけ光の精霊を持つ人間が重宝されるか分かるだろう。

その能力は、主に怪我の治療と穢れを払うことだと言われている。代名詞ともいえる治癒の力は凄まじく、上級者がその精霊の言霊を使えれば死者の蘇生も可能と謳われるほどである。その精霊を持つ者は大陸全土にある教会に仕える女性に多く、聖女として崇められ

ている。

「…暖かい……メノール…か？」

…母の名前…

瞬間、マリヤに衝撃が走った。全く知らない他人から母親の名前がでるなんて、初めてのことであった。もしかして、居場所を知っているかもしれない…そんな期待が込み上げてきた。

「あなたは誰ですか？母の事を知っているんですか？」

「…母……まさか…君が……」

そう言って、カミンは閉じかけていた目を強引に開いた。

綺麗な青い髪……やっぱりアントラとメノールの娘だ……

「お願いですから答えてください！母は？どこにいるか知っていますか？」

どこにいる…かか、天国…だろうな。メノールはまさに聖女だったし、アントラは気のいい奴だ。二人仲良くやって…んだろ。

カミンは答える気力はすでになく、マリヤの必死の問いも虚しく意識を失った。普通だったら最早命はないだろう。それほどの大怪我…しかし、幸か不幸かマリヤにとってはやっと掴んだ母の手がかり…意識を集中させ、レイの力を最大限まで引き出し、なんとか命を繋げようと奮闘していた。

「意識は失ったままですが……後は近くの病院へ連れて処置してもらえば…けど、私一人では…」

今のマリヤの力では、火傷の傷を完全に癒すことは不可能だった。それでも十分応急処置の役目を果たしているが、まだ十分とは言えない。聖は今も気を失っているだろうし、メルシーを呼ぶにも治癒を止めこのままこの場を離れるわけにはいかなかった。八方塞がり…またも無力な自分に悲嘆にくれていたマリヤだったが、

「おーーーーい!!カミンさーーん!!ターーーーシャーーーー!!!」

「この馬鹿兄!何でターシャお姉ちゃんを見捨てて逃げちゃうの!?」

「まだ言ってんのか?あの状況じゃあ、俺らは足手まといなんだよ。そもそも俺はお前をおいたらまた戻るつもりだったんだ。」

「そんなことどうでもいいの!ターシャお姉ちゃんが死んだら馬鹿兄のせいだからね!」

「あいつがそう簡単に死ぬか!って俺のせいかよ。ふぅ…とにかく無事でいてくれよ…」

何とかなりそうね…

一人安堵するマリヤだった。

第三十五話：幕引き（後書き）

やっっと長かったシザール戦闘が一段落しましたーー！！
こんなに長くなるとは…多分作者が一番驚いています。次回はすこしいろいろあったあとで、新章聖君の学校生活的なものをやりたいなぁ～って思ってます！！メルシーの過去もいよいよ明らかになったり、お姫様が出てきたりと割と軽くて楽しそうだと思うんですが、読者の皆さんどうでしょうか？？今までの感想やこれからについてぜひ一言お願いします！

第三十六話：旅立ち

聖達がロムとシザールの策略にかかった二週間後…

風と太陽の日差しが人々を励まし、優雅に空を漂う雲の下。

今、一人も欠けることなく聖達は安穏とした生活を送っていた。

あの戦闘の後、カミンは町の病院に搬送され、無事に一命を取り留めた。焼けたのも表皮だけで、奥の神経や重要な血管には何ら異常は見られなかったらしい。ただ、ターシャを庇ってできた右手の火傷だけを除いて…

「暇だ～。なぁ、マリヤ。俺の店営業再開したいな～って思ってんだけど…」

カミンはベッドのすぐ脇で花瓶に水を取り換えているマリヤに懇願していた。

今でも右手には肩にかけて包帯で巻かれ、その傷跡を物語っている。

生活には不便そうだが、意外にも本人は気にも留めていないようだ。満ち足りた…何か心の重荷がとれたような解放感を、カミンは普段の生活の中でしみじみと感じていた。

無論シザールの死体の行方やラシヤ・ルーロがどうなったかなどの不安は未だに残っているだろう。それを思うとまだ全てが終わったわけではない…

「しつこいですよ。あなたが退院するまでは、私が店を管理しますから、大丈夫です。」

「暇だ〜。」

マリヤは付きっきりでカミンの看病を務め、無事回復したカミンから事実を伝えられた。両親の殺害…村の焼失。しかし、彼女は強かった。其の姿を見るカミンが、逆に勇気づけられるほどに……涙すら見せず、終始無言を貫き通していた。

覚悟はしてたんだろうな……辛かっただろうに。

彼にはそう思わずにはいられなかった。その姿は、年頃の少女とはどことなく違う雰囲気を帯びている。数日の間ターシャの家に厄介になっていたが、今ではカミンの店のアルバイト兼管理人として、そこで生活していた

「アヴィズムとは縁を切ります。私は、絶対アヴィズムを許しません。」

カミンから事実を知った三日後、姿が見えなくなり、カミンやレートニイ達の必死の捜索の末、同じく探してくれていた聖と共に病室にやってきたマリヤは、きっぱりと宣言した。これからは自分の道を探しつつ、アヴィズムについても独自に調査するそうだ。アヴィズムが彼女を放っておくかは分からないが、カミンがいれば問題ないだろう。

レートニイ達にも依頼してあるしな…

マリヤについては、カミンからゾシマ長老に便宜を図ってもらい、

情報提供を条件に責任は問わないように穏便に取り計らってくれたらしい。

「毎日レートニイさん達が手伝ってくれますし。ふふ、それにカミンさんが経営していた頃よりも、売上が二倍に増えたんですよ？」

マリヤは昔に比べ少し感情が豊かになり、明るくなった。吹っ切れた部分があるのだろう。ターシャに並ぶこの町のアイドルとして、ただマリヤに会うためだけに店に通う連中が増えつつあるとか…

…そんな奴らは俺が追い出してやる…

カミンは歯ぎしりしながら、その瞬間を心待ちにしていた。親友の娘…四年前、親友を失い敵を討つためにギルバード王国に所属し、その圧倒的な才と武力で瞬く間に副隊長となり恐れられていたカミンだが、今ではただの親馬鹿＋保護者根性まる出しといった感じである。

「ただ…最近聖さんに会っていないんです。なかなか店に来てくれませんし…どうしたんでしょうか？」

はぁ…と溜息を吐き心配そうな表情をするマリヤ、その一つ一つの動作が妙に目を引き、一枚の絵になりそうだ…思わずカミンでさえ目を奪われてしまった。…咄嗟に視線をそらし、窓から空を見上げた。ここに三番隊の隊員がいたら、あの悪魔の如き副隊長が……と、驚いて声を張り上げること間違いなしだろう。

「レートニイとエルナは毎日来てくれるんだろう？何か聞いてないのか？」

カミンはバツが悪そうにそのまま空を見上げたまま言った。

「それが、毎日考え事をしているようで、近くの森に入り浸っているそうなんです。」

「色々考えることがあるんだろ。そういえば、イグリオートっていう奴が、聖をラスルコフ学院に特待生で招き入れようとこの町に来ているそうだ。そのことじゃないか？」

カミンはゾシマに言われたことを思い出し、苦笑いをしながら言った。

「え…ラスルコフってあの王都最高の学院ですよね…そうですか…」

なぜか傷ついた表情をするマリヤにつられて、場の空気が重くなった。聖と同じく色恋沙汰に疎いカミンには、何故マリヤがショックを受けるのかが理解できなかった。ただ声をかけずらいことは間違いない…自分の発言に問題があったのだろうか…どうしたらいいのか分からず、マリヤが持ってきた見舞いの林檎をおもむろに口放り込むのだった。

…そうか、年ごろの少女は色々難しいと聞くがこれが……

「こんにちは。カミンさん元気ですか？」

噂をすれば、時として本当に人はやってくるんだな…カミンの脳裏に、どうでもいい確信がよぎった。目の前には、聖がアミリヤから持たされたのかお酒と…何やら一冊の本を手に持ってきていた。

「おお。よく来たな。ちょうどお前の話をしてたんだよ。聖。」

「どうも。これお見舞いです。母がどうせ死なないし、これでいいとか言ってお酒を渡されたんですけど…まぁ、退院祝いの時にでも飲んでください。」

そう言って、傍らに立っていたマリヤにお酒と同じく手に持っていた本を手渡した。

「ありがとう。で、その本は何だ？」

まさかアミリヤが本なんて送るわけないしな…というより本など自分には無縁なのだ。一体誰が…不信感を募らせつつ聖に聞いた。

「メルシーからですよ。えっと、確かタイトルは＜驚愕！奇跡の人体実験。人智を超えた革命をあなたの体に…＞だそうです。良かったですね。」

「……どの辺が？」

「革命を…のあたりが。」

「その前の部分。人体実験の時点で俺とは無縁だろうが。あのちび精霊は俺に死ねって言ってんのか？って何で聖は真面目に答えてんだ？このタイトルの時点で中身も想像…」

「大丈夫です。カミンさんなら死にませんよ。メルシーも、どうせ死なないし人類の為の尊い生贄になれば、あいつも本望だろう…とかいってましたし。」

「全くフォローしてないぞ…聖。」

「あと、ちゃんと後で返しにこいと言ってましたよ。なので試したらちゃんと…」

「誰が試すか！！これは返しておいてくれ。気持ちだけ受け取っておく。」

そう言って、強引にマリヤから本を奪い、聖に差し出した。聖は少し残念そうに本を片手に受け取った。どこまで本気なのか…この流れでいくと本当にさせられそうだと彼は心底思った。

聖も少し変ったな…何があったか知らないが…強くなった…

カミンは目の前にいる少年に心の中で呟いた。うまく言葉にはできないが、初対面の時に感じた一歩引いた感じ…マリヤと同じく、その年に似合わない大人びた雰囲気が少しずつであるが崩れてきているのを感じた。だが、その目には依然として強い光が宿っていた…

「こんにちは、聖さん。何だか久しぶりですね。」

カミンと聖とのやりとりを、微笑を洩らしながら聞き入っていたマリヤが言った。両手を後ろに組み、視線はただ聖だけを見据えていた。

「どうも、マリヤさん。お店大盛況だってレートニイから聞いたよ。凄い…」

聖は興奮が入り混じった表情で語りかけたが、それをマリヤが強引に遮った。

「またマリヤさん…ですか？聖さん…次言ったら怒りますよ。」

嘘ではないらしい。マリヤは顔を曇らせている。ベッドで横になっているカミンは静かに息をのんだ。

マリヤも怒るのか…ってお前、もう怒ってるだろう。

滅多にない…というより、感情が少し豊かになったとはいえ元来大人しい性質のマリヤが、言葉に怒気を含ませるなんて、そうそうないのだ。

「あっまたか。ごめん。どうもマリヤはさんづけしちゃうんだよな…条件反射かな…仕草が大人っぽいからつい年上みたいに…」

「年上…ですか？」

さらに怒気が強まる。さすがにカミンも恐ろしくなり、慌てて話題を変えようと聖に話しかけた。

「そう言えば、今日はどうしたんだ？聖。はは、まさかラスルコフ学院に入学するってニュースじゃないよな？」

「…おお、さすが副隊長ですね。」

聖は思わぬ問いに驚きつつ、笑顔で言い放った。

第三十六話：旅立ち（後書き）

レ：おーい、作者！！！俺の出番は！？結局俺何の活躍もしてないんだけど…奇跡のヒーロー誕生みたいに書けよ。裏方にも程があるぞ！

エ：そうよ！エルナはお兄ちゃんより、活躍できたけどもっと増やしてくれてもいいじゃない！

レ：ちょっと待て。実際は俺の方が沢山登場してるんだから黙ってろ。絶対人気投票とかやったら俺の方が人気あるね。マジで。

エ：この駄目兄。どうせ第二章（予定）でお兄ちゃんなんて消えちゃうんだ。絶対私は生き残るけどね。

レ：…嘘！おい～どうなんだ作者！！！！！次こそは俺に主人公という大役があるはずじゃなかったのか～！

作：？？

レ：ふざけんな～～！！

どうかな～って思って書いてみました。読んでくれてありがとうございます！書き方を色々挑戦中です。出来たら感想の方を……よろしくお願いします！

第三十七話：ｃｒａｖｅ　ｆｏｒ　ｆｕｔｕｒｅ

今から約一週間前……聖は心に秘めた思いをアミリヤに打ち明けていた。それは…

旅立ち…

年少の頃から…といっても僕自身、記憶がはっきりしてるのがここに引っ越してからのことだけ。それ以前のことは、思いだそうとしても記憶に枷がはめられていて、強制的に拒絶されているかのように、全く思い出せなかった。

だからギルドにも入ったんだ。母さんにも誰にも頼らず一人で生きていく力を身につけるために…どうやったら思い出せるか分からないし、所詮無駄な苦労かもしれないけど…嫌だった。このまま何となく生きていくのが……

唯一分かっていることは、ほんのたまに…誰かと大きな宮殿で遊んでいる姿を夢に見たことがあったこと。そこにも大きな木がそびえてて、緩やかな水の音、木の葉に漏れる出る日差しが妙にリアルで、目の前には二人…男の子か女の子かも判断できなかったけど、追いかけっこをしていて…目が覚めたときの鼓動が…まるでついさっきまで遊んでいたかのように踊っていたのを、変わらぬ朝の日差しと共によく覚えている。

そこに行ってみたい……けど、どこかも分からない…それに昔から母さんが僕を町から外に出すのを極端に嫌がっているのは、本当

に…嫌というほど味わってきた。好奇心から一度首都に行ってみたいって母さんに言ったことがあったけど、軽く流されて一蹴…父さんも連れて行ってくれなかった。

自力でチャレンジしたこともあったけど、すぐに母さんに捕まって、三時間くらいのお説教……そもそも、母さんには隠しごとも難しいんだ。勘の良さが半端じゃないし…

だから……自分で探し出してみせる！僕の過去を…その場所を…

「母さん…どうしても？」

聖の住まい。一階のリビングで、聖とアミリヤ、そしてメルシーを加えた三人が座っていた。どっしりと構えたテーブルを挟んで、聖の隣にはメルシー、相対するかのようにアミリヤは真正面に座っている。そこで今、聖はアミリヤの発する圧力に必死に耐えていた。

「どうしてもよ。」

そこにいつもの和やかな空気はない。メルシーも傍観を決め込んだのか、黙って座っていた。自分は何も言わない…これも、この場でメルシー決意した覚悟と言ってもいいだろう。じっと二人を見つめていた。

「……でもさ…ラスルコフ学院に行って、トップの成績をとれって…無茶だよ。」

恐る恐るといった具合に聖が反論を述べた。何故…という疑問が何にもまして頭に浮かぶ…どうしても納得できないのだ。もう一人で旅をしても大丈夫という自信がある。お金も当分は困らないほど

には溜まったのだ。聖は、それをこんな無理な要求によって阻まれるとは、予想もしていなかった。

ラスルコフ学院…ギルバード中から選ばれた王族、貴族のエリートが通う最大の学院である。歴史に残る優秀な精霊学者、または精霊使いの大半はこの学院の出身者だ。

すべての施設は国の全面援助の元、常に最先端のものばかり、また精霊について研究している機関としても名高く学者を目指す若者にとっては、まさに目から鱗と言わんばかりである。必然的に精霊を研究、もしくは従がえる講習が多いこともこの学院の特徴だろう。

「別に卒業しろって言ってるわけじゃないのよ。単に、学院の定期試験。一度でもトップの成績をとればいいってだけ。そうすれば辞めてもいいわ。無論、取れなかったら旅はなし。帰っていらっしゃい。」

アミリヤはそんな聖の態度を一蹴し、はっきりと断言した。そして立ち上がり、コップに水をくみ、一気に飲み干した。

「何でそんなことを？ただ僕は…」

「この家を出て、旅がしたい…でしょ？甘えないの。そのくらいの覚悟を見してもらわないと、とても一人で行かせることなんてできないわ。幸い、今変な奴が聖をぜひって言ってきてるから。そいつを尋ねなさい。」

「……。」

筋は通っているし、正論である。親としては当然と言った口調に、反論することは出来ても、それを相手に納得させられるとは聖にはどうしても思えなかった。そもそもこれは自分の我がまま、エゴなのだ。どちらかが譲らなければ、水かけ論で時が流れ、そのまま終わってしまうだろう。だが、この母親が譲るとはどうしても思えなかった。

結局、聖には何も言い返すことは出来なかった。覚悟…その言葉が妙に聖の頭の中に響き渡っていた。そして、いたたまれず黙って席を発った。心配そうに、聖の後を追おうとするメルシーをアミリヤがさりげない仕草でそっと止めた。ガチャっ…聖がドアを開く音が、二人しかいないリビングに響いていた。

「聖なら一人でも立派にやっていける。ギルドは国中どこにだってあるんだ。生活には決して困らん。何故認めない？」

メルシーは、アミリヤを睨みつけ耐えかねるように言った。

「事はそう簡単じゃないのよ。あなたにだって分かるでしょう？ただ何となく…ただ過去を知らないのが嫌…とかじゃ、真実を知ったとき聖は耐えられないの。さっきも言ったでしょ？覚悟…って。」

「それとラスなんとか学院に入るのと何の関係がある？」

「まぁ、一種の試練よ。後は私の優しさ…かな。聖がどのくらい本気か見極めたいし…それに…まぁダメならよし。もし出来てもまぁよしって感じなのよね～。」

息を吐きながら肩に左手をまわし、けだるそうに言い放った。先ほどとは全くの別人である。

「あぁ、それとゾシマっていう爺さんが聖に会いに来るかもしれないから、メルシーちゃん…絶対目を離さないでね。もし何か企んでるようならすぐに知らせて。ぶっ飛ばしにすぐ駆けつけるから。」

「…？あぁ…まぁ分かった。」

突然のアミリヤの物騒な発言に、若干恐怖を覚えつつ、聖が行ったであろう森にメルシーは向かうのだった。

「ってわけで、数日考えた結果、逆らえないししょうがないか～という結論に至りました。」

「そうか。で、いつ帰ってくるんだ？二、三年後ぐらいだろ。」

気軽に発言するカミンに、マリヤは少し眉を曇らせた。そんなマリヤをよそに、聖は苦笑いを浮かべながら言った。

「…さっきのこと根に持ってるんですか…帰ってくる気はないですよ。カミンさんも、怪我が治り次第、部隊に戻るんでしょう？レートニイから聞いた時は本当に驚きましたよ…まさか副隊長だったなんて…」

「あの馬鹿は…口止め料は後で奪い返そう…でもお前…あそこは秀才、天才が集結する馬鹿げた所だぞ？いくらなんでも…なぁ？」

「無理は承知の上ですよ。それでも僕は行きます。今日はお別れの挨拶に来たんです。もうレートニイやエルナちゃんには言ったし、ターシャにもきっと分かってるんで…。」

そう言い放った聖の顔には、一切の迷いが見受けられなかった。おいおい…逆に自信にあふれている…聖が大きく見えたことが、少し悔く…寂しくカミンには思えた。

「…そうですか…気をつけてくださいね…」

マリヤは笑顔で呟いた。

「うん、マリヤも元気で。今度遊びにくるから。」

「はい？」

聖が言ったことが理解に苦しむようで、マリヤは首をかしげた。それを見た聖も、どうしてマリヤがそのような反応をするのかが分からず、思わず戸惑ってしまう。

「はは、聖は何言ってんだか？俺が首都に戻るってことは、マリヤも行くに決まってんだろ？」

「え…本気？マリヤ？」

「ええ、迷ってましたけど、今決まりました。私も行きます。」

「迷ってたっておい…」

「すいません。そろそろお店の方へ戻らないと…それでは失礼します。」

マリヤは持っていたお酒を傍にあった小棚に置き、足早に病室を出ていった。その頬が妙に赤かった理由を知る者はこの場にはいなかったが、とにかくマリヤは去り、聖とカミンは初めて二人きりとなった。まぁ、どっちらにとってもそれほど嬉しいことではないが…ぎこちない空気が二人の間を漂っていた。

「それじゃあ用も済んだので…僕も失礼します。」

そそくさとカミンに背を向け、病室を後にしようとした聖の背中を、カミンは心地よい日差しが体中に照らされている気持ちよさを久々に感じ、中に入りたがっている風を抑えきれない窓のように、込み上がってくる衝動を我慢できず、つい笑ってしまった。

「どうしたんですか？」

突然の笑い声に、聖は不思議そうに耳を傾け、どうしたものかと声をかけた。

「いや～…悪い。さっきも、俺に冗談言ったのってマリヤを元気づけようとしてだろ？聖はレートニイとは違うからな。ラスルコフもお前なら大…もしかしら出来るだろ。」

「そこは、大人らしく大丈夫って言うところじゃないんですか？」

「俺は現実主義者だからな。まぁ頑張ってこい！」

「はい。」

聖は一言返事をして、静かにドアを開け、カミンの視界から消えていった。聖なら首都でもこの町のようにすぐに有名になるかもしれない。マリヤから、ラシヤ・ルーロ以上の悪霊を聖が倒したと聞いた時は、すぐには信じられなかったが、会って理由が分からないが不思議と納得してしまった。

「不思議な奴だ…」

一人残った病室で、嬉しそうに呟くのだった。

誰もが恐れ、嫌い、近寄らない深く暗い森の中。朝は太陽の光すらその森には届かず、森の気まぐれで、霧が辺りを彷徨うように覆い隠していた。そんな、人里離れた森の地下に通称死神…シザールは眠っていた。その体は、かろうじて人間としての原型を留めているが、特に左半身の方は、見るも耐えないと言った具合であった。

「おい。そろそろ起きてくれないか？こっちも暇じゃないんだよね～。おーい？……こら！起きろ負け犬！！この…」

その横で一人の男が、所構わず叫んでいた。

「黙れ…殺すぞ……お前は誰だ？ここは…」

見えているかもわからない虚ろな目で、口元で喧しく叫ぶ声の主

を、殺気を込めた表情で探し当てた。

「よっし！やっと起きた。一応、お前も重要な人材らしいんで、生かしといてやれっていう命令が上から下ったんだよ。良かったね～」

白衣を着た男が、大袈裟に拍手をしながら、一人小躍りしていた。シザールは理解が出来ないのだろう。傍らで、ボサボサの髪をしていて、顔には大きな紫色の眼鏡が目立つ男が語るのを黙って耳を傾けていた。何故自分がここにいるのかさえ、分からないようだ。

「でもね～結構厄介なことも引き起こしてくれちゃったわけよ。ほら！うちの組織で話題になってた聖君勧誘の失敗。また、お前のパートナーであるマリヤの裏切り。僕は彼女の隠れファンだったのにな～。そんでもって止めが、ギルバード第三部隊副隊長への敗北、及び情報漏洩、下っ端が捕獲されたのやらなんやら。うわ～、やっちゃったね～」

シザールはやっと今の事態が飲み込むことができた。あの爆発…どうして自分が助かったのかは分からなかったが、どうやら命を拾ったようだ。自然と笑みが口元を支配する。

「……ひひ、そうか…俺は生き残ったってことか…なら、さっさと俺の体を治せ。そうすりゃ全部俺がかたをつけてやるよ。」

「それそれ、僕も期待してるよ～。僕個人としては、お前に凄い感謝してるんだよね～あの最高傑作を見つけてくれたことと…お前が前に依頼した、いい悪霊のベース…いや～感謝感謝。」

「はぁ？何言ってやが……まさか…俺の体を？…冗談じゃない。

ふざけんな！！やめろ！！」

必死に体を動かそうと手足に力を入れるが全く入らず、しかも体中を鎖で縛られていることに、感覚が蘇ってくるのと同時にやっと理解できた。計り知れない恐怖が体中をすみずみまで纏わりついた。

「あ～り～が～と～。お前は今までで最高のベースだよ～。特別に僕のものにしてやるからね～。」

「やめろーーーーー！！！！！助けてくれーーーーー！！！！」

届きもしない、叶うわけもない救いの言葉を、暗い地下でシザールは叫んでいた。その横には、都合の良い時に救ってくれる調子のよい神などいるはずもなく、本物の死神が鎖と化して、シザールに纏わりつているだけなのだった。

「次は君だよ～待ってね～。メッルシ～ちゃ～ん。」

第三十七話：ｃｒａｖｅ　ｆｏｒ　ｆｕｔｕｒｅ（後書き）

ひ：一応終わったね…
メ：そうだな…
タ：って駄目よ！最後の方私全く出てきてないじゃない！！どういうこと？作者！
作：え～っと、登場させるタイミングを逃したと言うかなんというか…すいません！！
タ：第二章の方は？私はちゃんと出るのよね！？
作：え～っと、それも第二章を書いてくれって言う読者様の御要望があったらにしようかな～…と…思ってます…
マ：あるわけないでしょう？私としては、このまま終わっても仕方ないかなと思いますよ。
タ：よくない！私は全然活躍出来なかったのよ？大体、マリヤは最後の方は、なんかヒロイン的な扱いになってたじゃない！何で私は…
レ：まぁまぁ、俺がいるんだ。似た者同士仲良く行こうぜ。
タ：ぶち…（殺）
レ：うぎゃーーーー！！
作：こんなこんなでグダグダですが、第一章は終りです。感想、意見がありましたらぜひお願いします！半年間ありがとうございました。
タ：あんたもよ！
作：うぎゃーーーーー！！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9404c/

crave for future

2010年10月8日14時49分発行